伊藤源作編

地理上發見史

明治
29 9 4
内交

東京
合資會社 啓成社發兌

例言

一、日露の國交斷絶して、征露の大詔こゝに煥發せられ、國民の意氣頓に揚りて、百戰百勝未曾有の武威を輝かしぬ。この戰勝によりて、我國は一層世界注視の焦點となれり。されば我國民たるもの爾今益〻己れの位置を自覺すると共に、世界の大勢、列國の狀態を熟知するの須要を感じ來れり。是地理學研究の愈〻必要にして、又地理學普及の益〻急なる所以なり

一、日露戰役は、確に我國民の大多數に、新聞紙を讀み、地圖に親むの必要なるを感せしめぬ。是れによりて彼等の多くは滿洲のいかなる地なるかの概念を得、遼陽、奉天、哈爾賓等の位置形勢を知りて、興味を起せると共に、能く異域を、かくまで巨細に調査して、一見形勢を指點し得る迄に地圖上にあらはしに至れるに驚けり。而して一歩を進めて、何時何人のかく測量し、かく調査したりしかを知らんと望めり。これ確に人類に通有の、現狀を知ると共にその由來を究めんとする念の盛なるを證するにあらずや。

一、夫れ然り、然るに現今我地理、歴史學界を見るに、一般の史學、地理學等につき論述説明したるものは甚だ多しといへども、未だ地理學上發見の次第を叙述したるものを見ず、それ地理學の知識は、まづ地球上各地の存在を知り、その狀勢を察し、旅行探檢等によりて、貿易交通を生じて、漸次開發せられたるものなれば、發達せる今日の狀態を知ると共に、往古以來發達の徑路を知り、先輩辛苦の跡を察するは、地理學の研鑽に從事するものは勿論、世界の一員たる事を自覺せる國民には須知の一要件なりと信ず。

然るに本邦未だこの種の出版あるを聞かざるは斯界の一恨事とす、予や短才淺學その任にあらずと雖、隗より始めよの言に從ひ、敢て本書を上梓したる所以なり。

一、本書は、その大綱と要領とを The Story of Geographical Discovery. by Joseph jacobs; New York D. Appleton and Company 1899 に則り、Encyclopaedia Britannica; The Evolution of Geography; Century Dictionary; Life of Fridtjof Nansen; Geographen Kalender; The story of Stanley. クック世界三周航記、コロムブス傳、地學雜誌を始めとし、幾多の新聞雜誌等を參考して、記事の增減を試みたるものなれども、或はその取捨宜しきを失ひ、却て沒要領の點少なからざらんを恐る、讀者幸に叱正を惜むことなかれ。

一、本書は渺たる小冊子なれば、たゞ發見探査の次第を擧げたるに止む、その發見者の詳傳、探檢者の用意、苦辛等にして、讀者を感奮せしむるに足るものは、近き將來に於て讀者の座右に呈すべきを期す。

明治三十八年九月

日英新協約發表の日

纂譯者識す

目次

緒論……一
第一章　古代の人民に知られたる世界……七
第二章　古代における征服の擴張……二六
第三章　暗黑時代の地理學……三八
第四章　中世時代の旅行……五八
第五章　道路と商業……七三
第六章　東方印度にまで、ポルトガル道、ヘンリ王子とヴァスコ・ダ・ガマ……八七
第七章　西方より印度にまで、イスパニア道、コロムブスとマゼルラン……一〇六

第八章　印度への北方通路、英、佛、蘭及露國の通路發見……一三〇
第九章　アメリカの探檢と分割……一四二
第十章　アウストラリア及南洋、タスマンとクック……一五七
第十一章　アフリカの探檢と分割、パーク、リヴィングストン及スタンレー……一七七
第十二章　兩極地方、フランクリン、ロス、ノルデンスキョルド及ナンセン……二〇三
地理上發見年表……二二九

地理上發見史

緒論

世界の先住者等の地圖＝發見史の二別＝發見史の意義＝三個の動機＝世界略史の古代(トレミー)＝同中世代(アラビア人)＝同近代＝發見史の要。

世界の各地は如何にして發見せられたるか、吾人の知れる限に於ては、五六千年來世界各所に人類の住居せるありて、彼等は歐洲人が世界發見以前已に各自の住地の事情を知りしなり、即ちカムチャッカ人は、カムチャッカを知り、グリーンランド人はグリーンランドを知り、所謂コロムブスの發見以前、早く已に北アメリカ印度人は、その住へるアメリカの部分を知りしなり、又これら先住の人民は、たゞにその住へる地方を

世界の先住者　Kamtschatkans. Greenlanders　Columbus　Cortes

Kalliherey
Smith Channel
Cape york

先住者等の地圖

Tupaia
Tahiti
Cook

Australia

知るのみならず、屢、實に驚くべき精密の地圖を作りたるもありき。コルテスは實に西印度土人の酋長の作れる地圖にのみよりて、中央アメリカを一千哩旅行しき、カルリヘリーといふエスキモーは、スミス海峽とヨーク岬との間の海岸圖を作れり。これを今日海軍部の海圖と比較するに、たゞ些少の點に於て、やゝ異るあるのみ。ッバイアと名づくるタヒチの土人は、クックのために太平洋の圖を描けるが、そは經度四十五度間にわたり(殆んど三千哩)、その間に散在せる島嶼の位置大小等、よくその比を保てり。かく先住の土人等は、己の住める地方及その附近をよく知り、或は之を圖に描けるによりて、歐洲人の地理學上の發見は、多くその發見せんと欲する地方を知れる土人の案内によりてなされたるものなりき。

されば、今吾人がこゝに企つる地理上發見史は、地中海を中心として各方面にわたる廣大の地方が、地中海沿岸に居住せる文明國民の知識の範圍内に、漸次編入せられたる次第を記さんとするなり。これを分ち

發見史の二別及意義

Captain Cook

三個の動機

Africa
Speke
Burton
Liyingstone

Stanley

て二とす、即ち(一)舊世界における發見、(二)新世界に於ける發見オーストラリアを含む、是なり。又吾人は地理上發見といふと雖、實はそこに住へる人類新種族の發見なり。その土地に住へる人民といふ事より全く思を離れて、その土地のみに付きての知識を得んことを望むに至れるは、眞に近時のことゝす。或人曰く、正しく地理上發見史といはゞ、カピテン・クックの航海を以て始めとすべし、これ彼の航海の動機は、純粹に科學的貪求心より出でたればなりと。併しながら彼以前に既に人々は、征服せんためと、貿易せんためとの二理由―最もこの二理由は貿易せんがために征服すとの一理由に歸せしむべし―の下に相互相識らんことを欲したるものなり。現今に於ては、吾人は三個の動機の混交の著しきものあるを見る。即ち歐人のアフリカ分割是なり。これ第十九世紀の末期における著名の事實たり。即ちスピーク及ブルトン、リヴィングストン及スタンレーは、未知の土地を知らんとする念と、探險を好む心とにより、アフリカ内部を調査しき。其報告によりて大商會は忽ち侵入し來り、最

創世紀第十章

Rome

後にその商會が屬する政府は、その土地を占有するに至れること是なり。イギリスのインドにおける策また鑑むべきなり。實にアフリカ大陸内部の未知未開の地は、其征服、其貿易、及其科學的貪求心の動機による探險旅行の爲に、縱横に通過せられたり。以上によりて之を見れば、地理上發見史の第一階は、主として征服史なり。故に吾人がまづ成すべきことは、如何にして世界が知られしかとの見地より、古代世界略史を説くべき事なりとす。

「世界は始め誰に知られたりや」てふ疑問より先づ解釋せざるべからず。これに答ふるには、勿論創世紀第十章を以て、吾人が知り得る最も古き地理學の事業となすべし。而してその地球の殘部が如何にしてイスラエル人に知らるゝに至りしか、又そが何時ローマの一部となりしかを説かざるべからず。多くの道はローマに通じ、又ローマより出づ。されば吾人はこれが説明の中心としてローマを取ることは必要なりといへども、ローマは唯ローマ以前に永く征服したる土地及人民の知識を

Alexandria
Ptolemy
トレミー

Arabs
アラビア人

廣むるに必要なりし古代帝國の繼嗣者たりしのみにして、その地理上の知識を記載する才能をば有せざりき。吾人が今日古代人民が地球に就きて幾何を知得したりしやを知るを得るは、實に其功をアレキサンドリア大學教授トレミーといふギリシア人に歸せざるを得ざるなり。されば、本書に於ては、まづトレミーに付きて古代人民の地理上の知識の程度を知り、次にトレミーが記載せる知識は、如何にして得たるかといふ歴史上の事實の進路を瞥見するを以て便利なりとす。

中世代にては、地理上の知識も、すべて他の知識と同じく、多く隱匿せりき。故に吾人は、たゞいかに、その想像と理論とに走りしかを記して止まん。而して此期間に、アジアに關せる、なほ内密の知識を西方に運べる商人、若くは巡禮者以外にて、グリース科學の眞の繼承者となり、地理上の知識に幾分の貢獻をなせるものはアラビア人なりしなり。

史學にても、地理學にても、近世史の開幕はアメリカの發見よりす。この發見以來四百年間は、過去四千年間に知られたる地球上住民ある地

近世代

發見史の要

方の二倍以上の多大の面積に關して知ることを得るに至れり。この結果はアフリカ、南アメリカ、及兩極地方に未だ幾分の吾人に知られざる地方ある外、吾人が住する地球の自然的財本の如何なるものなるかを概知し、及各地方の些細なる精査を外にしては、地理學上の發見史は實際その終期に達せることを知るに至れり。

實にこの地理上發見史は、戰爭及探險の記事として興味あるのみならず、加ふるに漸次近世の人民にその處を得しめたる功あり。最も長年月間知られたる諸國と人民とは、概して文明の形成に最も深厚の影響を與へたることを知らば、この發見史研鑽の實用上に於てまた忽諸に附すべからざるを知らん。世界を發見したる方法は、現今世界史を決斷す、されば廿世紀の大問題は、アメリカ、アフリカ及アウストラリアの發見に直接の關係あるべし。この大問題に關して最も多くをいひ、最も多くを働くべき國民は果して何處のものぞ、彼等には實に、この地理上發見史は直接多大の興味を有するものなり、

第一章　古代の人民に知られたる世界

フェニキア人＝ギリシア人＝ホーメルの詩に見ゆる地理思想、＝ヘシオッドの說(北方ヒペルボレニ南方アビシニア)＝バビロニア人の世界說＝ギリシア人の殖民＝ミレタスの哲人アナキシマンデルの描圖＝ノーモンの發明＝ミレタスのヘカチウス描圖及當時の地理思想學＝ヘロドトス＝小人國＝ヘロドトスの後＝東方に關する知識(ハンノ其他の遠征＝ヒッパラス)＝北方に關する知識(ピテアスの報告)＝エラトステネスの事業＝彼の二大基線＝ストラボ＝トレミーの事業(經緯線＝幅員に關する錯誤＝不知南大陸＝彼の地圖)

古代の人民が、ローマ帝國の最大範圍內に包含せられて、終に自から世界の一部を成せることを、いかにして知るに至れるかを記述する前に、古代人民の知識の程度範圍を知るを以て便利なりとす。さればまづ

Phoenicians
Gibraltar

フェニキア人

Egypt
Necho
Herodotus

Homer
Asia Minor
Cyprus
Sicylia

ギリシャ人

本章にそを記述し、次章に於て、如何にしてその知識を得たりしかに付きて語らん。

抑〻本題目の古代の見聞に付きての吾人の知得は、まづ之をギリシア人に負ふことを知らざるべからず、而して初めギリシア人は恐らく之をフェニキア人より學びたるが如し。フェニキア人は、古代の大貿易家、大舟夫なりき。その地中海沿岸の航行は更にもいはず、ジブラルタル海峽を出でゝ、北に南に通航せり。或はいふ、彼等の中にはエジプト王ネコーの命令によりてアフリカを周航せりと、之に付てヘロドトスは、歸航の際太陽は右方の海中に沒せしことを記るせり。かくフェニキア人は世界の各所を航行せしも、その地理上の知識は、商業上秘密として敢て他に漏らさず、さればギリシア人は、たゞ僅かを彼等より學びたるに過ぎず。

ギリシア人が、地球の形狀及住民につきて有せし知識の程度を知るべき第一は、ホーメルの詩なりとす。この詩は北方希臘及小アジアの西海岸に關するやゝ精細なる知識と、エジプト、キプロス、及シチリアの幾

ホーメルの地理思想

Delhi
Heiod

ヘシオッドの說

Hyperboreani
Abysinians
Pigmies

Schweinfurth

バビロニア人の世界說

分を知れることを示す。而して地中海の東方はたゞ著者によりて危くも想像せられたるなりき。著者はその自から知らざる處は、何處にもあれ驚くべき想像を逞うしたりしがその想像は時として地理學的知識の進歩に、多大の影響を與へたり。かくてホーメルは世界は平板の如くにして、之を周らすに海と名つくる非常に幅廣き河を以てし、その平板の中心はデーリなりとせり。ホーメルより僅か後なるヘシオッドに從へば、ホーメルが記せるよりも遙か北方に、ヒペルボレニといふ人民ありて、北風はその邊より吹き來るとせり、南方はホーメルと略〻同じくして、アビシニア人の住地なりといへり。これらの觀念は比較的近世まで、世人が世界は如何なるものなるかに付きて有する觀念上に、主要なる感化を保ちき。ホーメルは又小人がアフリカに住むことを記せり。これは彼等が現世シュバインフルト及スタンレーによりて、再び發見せられしまでは、荒誕無稽の言とせられき。

ギリシア人が有せし、世界は海水に圍繞せらるとの觀念は、バビロニ

Babylonians
Mesopotamia
Euphrates

ア人より得たるが如し。蓋しメソポタミアの住民が、かゝる考を得たるは、彼等が何れの方向に旅行するも、殆んど常に海に達したればなるべし。即ちメソポタミアの周圍には、黑海、裏海、地中海及ペルシア灣あればなり。楔形字の記する世界の最古圖は、メソポタミアの平面をあらはし、その中に一條の河流ありて、ユーフラテスと名づけ、この平面が鹹水を示せる同心二重環にて圍まるゝを見るべし。この外に、各分離せる七個の島あり。これ恐くは、バビロニア人の觀念に從つて分たれたる世界氣候の七帶をあらはすものならん。

Magna Grecia
Marseilles
Gulf of Lyons

ギリシア人の殖民

世界に關するギリシア人の知識の大膨脹の初まりしは、ホーメル及ヘシオッド以後にして、そは西方地中海の沿岸になされたるギリシア人の大殖民による。今日とてもイタリア南部の住民はなほギリシア語を語り、その地方はマグナ・グレシア即ち大ギリシアの稱あり。マルセーユも亦西紀前六百年頃建てられたるギリシア殖民地の一にして、こゝよりまた、リオン灣沿岸に殖民せり。東方に於ても、亦ギリシア人の市街は、

Byzantium

黑海沿岸に散在し、その一は世界上重要なるビザンチウムなり。また、北アフリカにも、或は群島海の諸島嶼にも、西紀前第四、五世紀頃殖民せり。而して、これらすべての殖民地と母國との交通は常に維持せられたり。

ギリシアの描圖アナキシマンデル

Miretus
Anaximander

Athenians

さてギリシア人をして世界史上にかく有名ならしめたる一の性質は、彼等の好奇心なりとす。そはこの好奇心あるによりて、無數の殖民地よりギリシア本國に多數の報告を齎らさしめて、そを記述せんとするに至れり。而してその地理學的知識を記載せんとして、さしづめ必要なるは地圖なり。されば、ギリシア人なるミレタスの哲人アナキシマンデルが西紀前六世紀の頃、描圖法を發明せしと稱せらるゝも宜なり。地圖を描くには、多少天文學の知識を要す。野蠻人は自國の地圖を描くといへども、海を挾みて相離隔せる他國の位置の關係を記載することは、大に困難なり。アテネ人はビザンチウム（今のコンスタンチノプル）が、彼等よりやゝ北東に位置することを知れり。そは航海の時旭日の登る方に向つて進み、且つビザンチウムに近づくに從ひて、氣候寒冷を覺ゆれば

Gnomon

ノーモンの發明

なり。又これと同じく、マルセーユは、彼等より多少北西に方ると考へたり。然れども彼等はマルセーユとビザンチウムとの相互の位置の關係を、如何にして定めんとするか、マルセーユはビザンチウムより一層北方にありや、相互の距離幾何なるか、たとへマルセーユに至るには長時間を要すといふも、これ航路の迂曲せるが故にして、船のビザンチウムに至るには、比較的近きなり、茲に北方如何なる邊に、一地點の位置するかを決定するに一便法あり、そは星ある空をよく注意する時は、旅行者は北方に進むに從ひて、極星は漸次天空高く上昇する一事なり、故に一本の杖を水平におき、他の一本を以て極星を指さしむれば、この二本の杖のなす角度は、即ち極星の高さにして、やがて己の位置する北方地點の高度を示すなり。この二本の杖の代りに、その間に圍まるゝ角を充たす爲に、金屬若くは木片を切らばノーモンと名づくる日晷儀の最初の形を得べし。而してノーモンの形に倣ひて、その地點の緯度が決定せらるべし、このノーモンを發明せしもまたアナキシマンデルなり。苟も地圖と名づけ得べき形式を描かんとするには、かゝる器械なくして爲し得らるゝものにあらず。然して、恐らくはアナキシマンデルも全く初めよりノーモンを發明したるものにはあらざるべし。ヘロドトスは明かに、吾人の知れる限にて最古の天文學者たる、バビロニア人より、ノーモンは發達せしものなることをいへり。この說を確認する一の奇なる點ありそは角は度を以て度られ、度は六十分づゝに分たるゝこと、恰も一時が六十分に分たるゝが如くなり。この六十等分法は確かにバビロニア人の用ふる時計の計算法より發達せるなり。されば角度の六十等分の計算に關しても、その起源を、同じくバビロニアに取りしとするも宜ならずや。

Herodotus

Hecateaus Peri plus

ヘカチウスの地圖

アナキシマンデルの描ける最古の地圖は、今日一の存するものなしといへども、彼の同町民たるミレタスのヘカチウスの描ける地圖に似て、而もその基礎たりしは疑ふべくもあらず。ヘカチウスは形式的地理學を著したる率先者なり。彼の著書の斷片は現存せり。そはペリプラス

Donau
Nile
Indus
Tigris

Halicarnassus

ヘロドトス

Persia

即ち航海者案内記の性質のものたり。此處より彼處までは航海幾日を要するか、何れの方向を取るべきか等を記せるものなり。二冊より成りて、ヨーロッパとアジアとを細說し、今日吾人の所謂アフリカ洲は、アジアの中に包含せしめたり。この斷片によりて當時ヘカチウスの腦裏に於ける、世界地理の概略を復現せしめ得べし。これによれば、世界は大海を以て圍繞せらるとのホーマーの觀念は、その形體の大基礎を成せるが如し。その他に彼は、地中海、紅海、及黑海を知り、ドナウ、ニル、ユーフラテス、チグリス、及インダスの大河を知れりき。

ギリシア地理學史上に於て、前二者につぎて有名なるはヘロドトスなり。彼はハリカルナサスの人にして、歷史の父と呼ばるゝが如く、又眞に地理學の父とも呼ばるべきものなり。彼はエジプト、バビロニア、ペルシア、又は黑海の沿岸に與、旅行し、後南イタリアにその殘年を過ごせり。彼はこれら諸國の到處より、その同國人に、正しき信ずべき報知を多く發し、且つこれらの國々に關する知識の收集をつとめたり。特にスキシ

Scythia

Nasamonia
Soudan
Libya

小人國

Niger
Timbuctoo

アとペルシアとの州及道路に關して精說を試みたり。概して彼の報告は、彼の生存當時の如き古代にて望まるべき最も正確のものなりき。稀には無稽の事なきにあらざれども、そは又自からその信ずべからざるを指摘せりき。

彼の談話中の一に、興味に富めるものあり。そはスタンレーの旅行の一の先驅をなしたるかの感を起さしむるものなり。ナサモニアの五人の青年はスーダンの西なる南リビアより出立し、數日間西方に進みて遂に一森林に達したり。こゝにて極めて小體格の人類の一群に捕へられ、沼澤を通過して、同じき小體格を有する黑人の成せる大市邑に導かれけるに、そこに一大河の流るゝありきといふ。ヘロドトスはこをニル河となしたり、然れども彼が記せる旅行の方面より推せば、多分そはナイシャー河なるべく、到達したりといふ都邑はチムブクツーなりしなるべし。ヘロドトスのこの談話のために、永くニル河の上流は東西に流るゝと思考せられき。

Xenophon
Alexander
Hanno

Sierra Leone

ハンノの遠征

Gorillas

スキラックス

Scylax

ニアルコス

ヘロドトスの歴史の著作は、西紀前四百四十四年と決定せらるれども、その後、セノフォンとアレキサンダーとの二人の遠征によりて、アジア西部に關する知識は大に增加せられ、ギリシア人は遂に印度までをも知るに至れり。然してこれら軍事上の遠征以外に、吾人はなほギリシア地理學に多大の貢獻をなしたる、航海者の航海日記の斷片を有す、その一はハンノと稱するカルタゴの海將の遠征に關する一話なり。彼はシエラレオンまでアフリカの西海岸を航下せり。この地はその後千六百年間は航海せられざる處なりき。彼はその航海の土產として毛皮を持歸りて曰く、この毛皮は彼の捕縛したる男女の毛皮にして、ゴリラと呼ばるゝ土人なりと。なほ他の航海日誌はスキラックスと名付くるギリシア人のものなり。彼は殆んど地中海と黑海との間の各港を遍歷して、ギリシア商人の船舶は、一日平均五十哩を操縱し得ることを知れりと。これらの外にアレキサンダーの海將の一人なるニアルコスはインド河口よりアラビア灣まで舟行し得ることを知れり。其後ギリシアの水夫

Belgie
Holland
Elbe

Pytheas
Britain
Biscay

ピテアス

歐洲北部に關する報告

Sellucus
Punjab
Megasthenes

Nearchus
Arabia
Hippalus

ヒッパラス

ヒッパラスは適當なる時機には季節風を利用し得べきを發見せり。これによりて彼はペルシアとバルヂスタンとの海岸に沿ひて非常に勞して航行せずして、アラビアより直ちにインドに到りたり。されば、ギリシア人は季節風をヒッパラスと名づけたり。なほギリシア人はこの以前に印度につきてはアレキサンダーの部將セリウコスが印度パンジャブの王に派遣したる使節メガステネスの話によりて聞知するところありき。

かくの如く東方に關する知識の增加と共に、又歐洲の北部に付きての報告も續々到來せり。それは殆んどアレキサンダー大王時代(西紀前三百三十三年)に榮えたるマルセーユの住人ピテアスの旅行によれるにて、彼は文明人としてブリテンに至れる先着者なりと思はる。彼はビスケー灣にそひて北上し、しばらくは英國に滯在したるが如し。その計算によれば、ブリテン島は周圍四萬スタヂア(即ち四千哩)なり、彼は又ベルギー、オランダの沿岸を航し、遂にエルベ河口に達せしが如し。然れども

Thule
Shetlands

Eratosthenes
(B.c.240—196)
エラトステネス

Aristotle
Syene

ピテアスは地理學史上に於ては、これらの航海につきてよりも、寧ろッール島に關する報告によりて有名なりとす。彼はッール島は人類棲息の最北地點にして、これを超ゆれば、海水は深厚にして恰も膠の如き密度を有するものとなせり。彼は自からッール島を踏査したるにはあらずして、シェトランド附近に浮漂する氷塊の存在より推想したるものゝ如し。

これらの新報告を、すべて蒐集して、世界を知るに最も便ならしめたるものをアレキサンドリアの司書エラトステネスなりとす。彼は實に科學的地理學の建設者なり。彼は實に地球の大さ及地上住民ある部分の正確の測定を企圖したる始祖なり。この時代にはギリシアの科學者は、地球は宇宙の中心に固定せられたるものなれども、とにかく平板にあらずして球狀なりとは考へたりき。又この地球の大さにつきても種々の考案を出だせり。アリストートルは四十萬スタヂア(四萬哩)の周圍といひしが、エラトステネスは一層精密なる測量を企てき。彼は西紀前

二百年頃同一子午線上にありと思はるゝアレキサンドリアとセーネ(ニル河第一瀑流附近)の兩處にて、太陽の作る陰影の長さを比較し、その影の長さの差異よりこの緯差は地球全周圍の五十分一なることを推定し、こゝに地球の周圍は二十五萬スタヂア即ち五千三百二十三地理里なることを決定せり。而して近時精算の結果二萬四千八百九十九英里即ち五千四百地理里なるに比して、エラトステネスの計算が最近似數を得たりとは驚くべし。地球の大さをかくの如く定めて、さてエラトステネスは古人の住居し得らるべしと推測したる陸地の大さを決せんとしたり。彼及古代の人民は、當時見聞に上りたる島嶼中の最北と最南とは、嚴寒若くは酷熱にして住居に適せざるものとなし、こを三萬八千スタヂア即ち三千八百哩に亘れりと計りたり。而して住居に適する部分を東西に測りて、彼は西ジブラルタル海峽より、東はインド東部に至るまで、殆んど八萬スタヂアにして、地球表面の約三分一となし、殘り三分二は海水にて覆はるとせり。而してエラトステネスは豫言して曰、

Spain
Columbus
Greenwich
St.vincent
Messina
Rhodes
Issus
Gaul
Germany
Strabo.
ストラボ

く、若し大西洋の廣大なる面積を渡行し得べからしめば、同緯度に沿ひてスペインの海岸よりインドの海岸に達せらるべしと、吾人の知る如く、この後千六百年を經てコロムブスはこの理想を實行せんと企てたりしなり。吾人が今日位置の計算には赤道と、英國グリニッチ天文臺を通過する子午線とを以てその二大基礎とする如くに、エラトステネスはその計算に二大基線を置けり。其一はセントヴィンセント岬よりメッシナ海峽とローデス島を經てイスススに至る一線にして、他はニル河第一瀑流、アレキサンドリア、ローデス及ビサンチウムを連續する子午線を用ひたり。

エラトステネスの死後二百年間は、ローマ帝國の膨脹時期にして、ローマ帝國は、さきにアレキサンダー及その繼嗣者が所有せし處、カルタゴ人が所有せし部分等の廣大なる地方を領有し、且つゴール、ブリテン及グルマニ等の境にまで接せり。かくて增加したる地理上の知識は、西紀前二十年頃ギリシア語にて書けるストラボの地理學上の著述中に

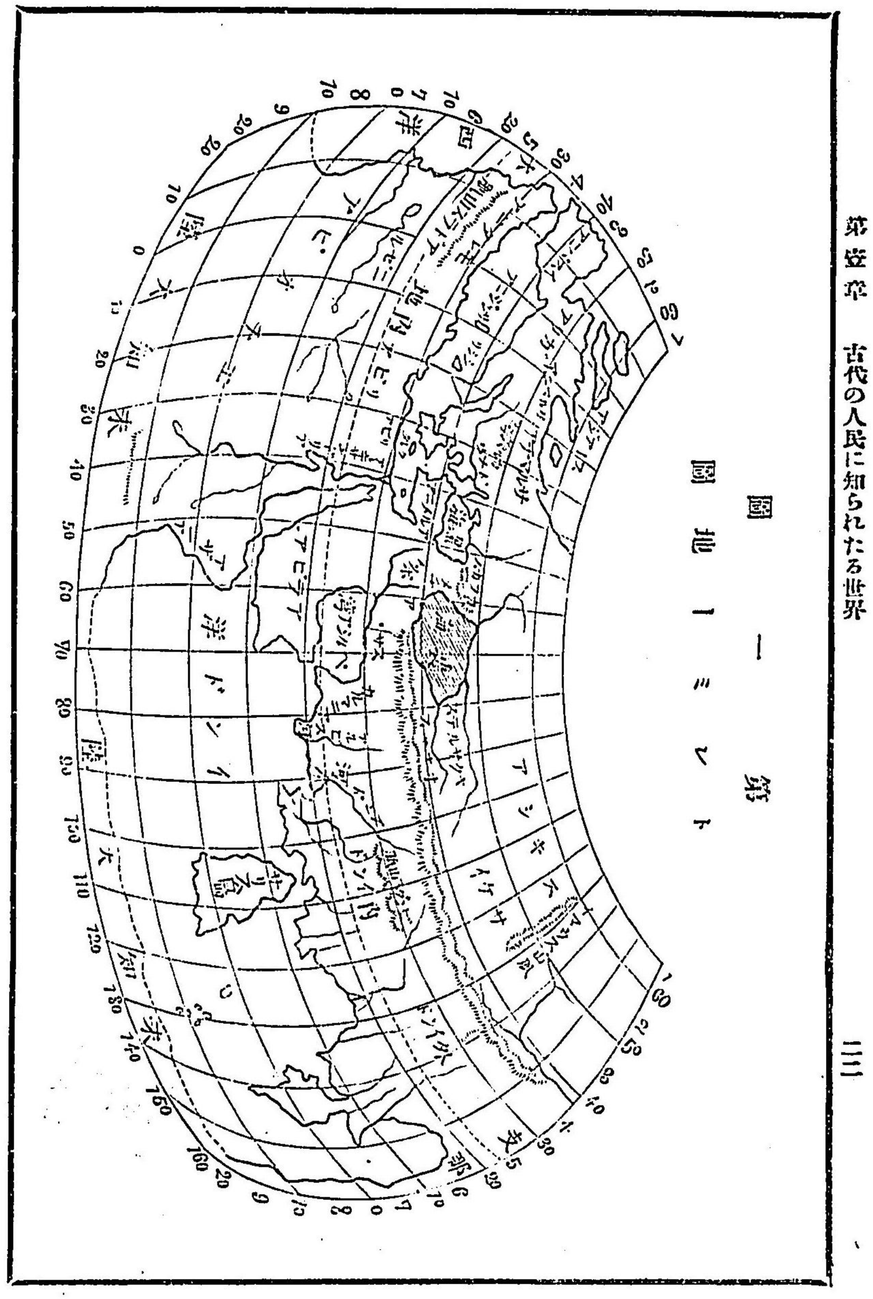
Ptolemy
Erythraean sea
Aden
Ganges
Ceylon

蒐集せられ、而してエラトステネスの作れる系統に多くの改良を加へたり。彼はツール島の存在を非認せしかば、エラトステネスよりは世界の範圍を狹小にせりと雖、別に氷洲の存在を認めたり。彼はこの島を以て英國の北に位置して人類棲息の最北部なりとなせり。

人間住居の地方につきて、古人の知識を蒐集したることに於ては、ストラボ時代と、トレミー時代との間に、隣保をよく識るに至れる點に於て著しき增加を見る。そはエリスレアン海のペリプラスとして知られたる印度洋の航海につき、舟夫の報告に載せられたるものにして、即ちアデンよりガンジス河口に至る沿岸の十分精密なる事情を表はせる事是なり。而して猶セイロン島についてはやゝ多く、又アジアの東部、印度支那地方、及絹の生產地たる支那に關する事までも含めり。これはトレミーの觀察に至大の影響を與へ、又間接には、アメリカ發見の一因となりき。

エラトステネス以來種々に考査せる古代世界に關する知識を大成

第一圖　地圖



トレミー

するの任は實にアレキサンドリアのトレミーにありき。彼は西紀百五十年代にして、四百年前よりの記錄に見ゆる報告は、蒐集して一も漏らすことなく、一定の形式圖中に類別彙編せり。經緯線の名稱と、その使用法とは實に彼の發明に係り、彼以前の記者が一點より他點までの距離が幾スタヂアありとして滿足せしものを、彼は基準線を設けて、經度幾度緯度幾度と計算せり。而してトレミーは有名なる古代の天文學者なりけれども、惜むらくはなほ一度は五百スタヂア即ち五十地理里なりとの誤謬に陷れり。故にトレミーの計算は、地球上住居し得る廣袤は殆どイスパニアより支那に至る眞の直徑の約三分二なりとせり。この結果イスパニアより西方支那への距離は六十度即ち殆んど四百哩に減少し、この誤算がコロムブスをして猶更世界史に一新紀元を劃する航海をなさんと力めしめしなりけり。若し彼が經度の基點をアレキサンドリアに選みたらんには、西方に計りて彼のなせる誤謬は、東方に計る時に差引をつけらるべきものあるを。然るに出發地點をカナリー島に

經緯度

測定の誤謬

Canary
Ferro

取り、その東方に計れる各度は、さきに一度を五十哩の長さなりと確信したるよりは、その五分一を増大せり。かく幾分の誤謬ありたるにもせよ、こゝに特筆すべきは、地理學上トレミーの勢力の大なることなり。そは第十九世紀の中葉までカナリー島のフェロが經度零度として取扱はれたるにても知らるべし。

今一のトレミー系の強大なる勢力は、ホーメルより出でたる「世界は太洋に圍繞せらる」との確信と異なれることなり。アフリカが太洋のために、中央より斷絶せらるとの以前の考に反して、トレミーは漠然たる傳說的知識により、アフリカは南方無限に延び、東方も同じく遠く不可測の大陸に連續すべしと信ぜり。その不知の大陸は、彼の天文學的作業のラテン飜譯にテルラ・アウストラリス・インコグニタと名付けられたるものにして、即ち不知南大陸の義なり。地球の幅員に關するトレミーの錯誤は、コロムブスに傳はりしが、またこの南大陸に關しての誤記はカピテン・クックの發見の素地を作れり。これらトレミーの誤謬は、一は使

不知南大陸
Terra australis incognita
Capitaln Cook

用材料の荒誕なるにより、一は科學的愼重を缺けるに基けるにも係らず、トレミーの著作は人間の作業として知識の一大紀念物たるは毫も疑なきなり。又トレミーの天文的作業は、ニュートンによりて廢棄せられたれども、それまでは天文學的準據となされたり。斯くトレミーの知識は舊世界に關しては、去世紀の初期までは一切の地理學的知識の基礎となり居たりき。質にトレミーは千五百年間以上も人類知識の二主要部門即ち地理學及天文學の最大典據たる稀有の天才を有せしものなりけり。世界に關する彼の說明の詳細は、この小冊子に說く要なけん。たゞ彼が描ける地圖の地中海、北東ヨーロッパ、アラビア及黑海の輪廓がいかに眞に近づけるかを見よ。彼はこれら以外の地點に關しては、たゞ概略の指示に止め、又は無敎育の商人の推量に一任したり。然り而して彼の緯度決定の方法は、後世多くの地理學者に襲用せらるゝに至りて大に價値あり。古代世界の發見と地理學的知識の歷史とは、トレミーを以て終りとす。

Newton

緯度決定の法

本章には古代人民に知られたる、世界の廣袤に付て、商人兵士及旅行者によりて得たる知識を系統的に統括記載したる、ギリシアの科學者の名と、功業とを略説したり。この地理的知識の大に蒐集せられたるは、地理學の目的のために系統的調査をなしたるによるにあらずして、征服のために軍事的遠征をなしたるにこれ依るなり。されば吾人はここに吾人の歩を回らして、トレミーが總括したる、ギリシア人及ローマ帝國に知られたる古代世界の知識に關する各地征服の種々の段階につきて一瞥を與へんとす。

第二章　古代における征服の擴張

分割より集合＝ローマの膨脹＝領土膨脹に伴ふ知識の擴張＝牡蠣の殼の生長＝双仔河邊の發達＝ペルシアの發達＝ギリシア、ペルシア戰役＝ギリシア史＝マケドニアの生長＝アレキサンドル大王＝イタリア國の各部＝ローマ膨脹史＝ケーザルよりは、ポムピ＝ローマの道路＝信仰を一にす。

古昔文明の發起點は之を別つて四とす。即ちニル河畔、チグリス、ユーフラテス河畔、ガンジス河畔、及黄河、楊子江邊これなり。然れども本章における吾人の目的は、これら歴史の初歩におけるものと關せざるなり。エジプト人は、その周圍に住める住民につきて知り、アッシリア人も亦此の如し。かく同一知識の約説は、創世紀第十章中の種族表中に含まる。この表は當時ヘブリウ人に知られたる限の人類を分類したるものにて、皆セム、ハム及ジェーフェットの子孫なりとなしたるものなれども、地理上略アジア、ヨーロッパ及アフリカ地方の種族と一致す。而してトレミーが其大著述中に約説したる報告の蒐集を、いかにしてなし得たりしかを確知する爲には、吾人はローマ帝國が世に知らるゝに至るまで膨脹して已まざりし、著しき進行に注意を集注することを要す。すべて各國ともその古代史は實に同模式たり。地方は同國語を談ずる種族の團體間に分割せられて各自その長上を仰ぎ、これら分割せる團體の主權者の

Shem　Assyrians
Ham　Hebrew
Jphet

分割より集合

Wessex　Israel

一が戰爭又は外交の巧なるがために、他のものゝ上にその主權を及ぼすに至り、遂に一王國の組織を見るに至れるなり。英國の歷史は、ウェセックス王國がいかにして遂にその殘部全體を統一せしか、佛國の歷史は、フランス國を治むる諸王がいかにして殘餘の陸地上に、その主權を廣めしかを語る。イスラエルの歷史は、主として猶太族が如何にして他種族の主權を得しかを語り、ローマ史は又いかに單一の市民が、當時に知られたる全世界の主權者となりしかを語る。このローマ帝國は、長年月間膨脹に次ぐに膨脹を以てし、遂にローマ人が全世界に膨脹して後初めて止まりたり。この領土の漸次の擴張は、その度毎に周圍の大國民に付ての知識を增加せしなり。されればその擴張の一歩一歩に得たる知識を地理上發見史の一部として、總括する事はローマ人の任務たりしなり。

ローマ人の任務

牡蠣の殼の成長

地理學の見地より、その人間知識の擴張は大なる牡蠣の貝殼の生長に比較し得べし。其殼の頂點はペルシア灣の北部に起れるバビロニア帝國を以て初むるものとすれば、吾人はまづ第一段にバビロニア帝國を見るべし。(カルデアともいふ。)この帝國は、チグリス、ユーフラテス兩河間なるメソポタミアの南にありしが、西紀前十四世紀の頃バビロニアの屬地たりしアッシリアは、その北方に起りて、母國を亡ぼし、幾多の騷亂の末、遂にメソポタミア全部及その附近の諸國を一統したり。西紀前六百年この大帝國の末期に際し、再びバビロニア帝國は興復して後バビロニアと稱せり。之を要するに、チグリス、ユーフラテス河谿に建設せられたる國を區分すれば、カルデア、アッシリア及バビロニアの三階級を經たるなり。

Babylonia
Chaldaea
Mesopotamia

双子河邊の發達

この河谿に近く東方にこれらと同じ發達の行路を取りたるものあり。たゞこれは北より南に及ぼせるの異あるのみ。即ちメヂアは北部に起りて發達せる國なりしが、西紀前五百四十六年その屬領なりしペルシアのキロス王のために併合せられたり。キロス王は、これより小アジアの北西部にありてヒッタイト人の繼承者たるリヂア王國を從へ、終に

Media
Cyrus
Hittites
Lydia

ペルシアの發達

Hittites
Cambyses

ギリシア、ペルシア戰役

Xerxes

Cyrus the younger

バビロニア王國を服從せんと企てゝ、西紀前五百三十八年その首府を攻撃して成功したり。彼はその主權を、一方にはインド、他方にはエジプトまで擴張したり。その子カムビセスに至りて、歴史の牡蠣の殼はここに西アジア全體を含むまでに膨脹したり。

世界史上次の二世紀間は、ギリシア人が、ペルシアに對して大戰爭をなしたる爲に費されたり。この戰爭はすべての歴史中最大決戰の一にして、アジアが世界を一統するか、ヨーロッパが世界を一統するかの關ケ原役なりければなり。ギリシア遂に勝ちて爾來勝利の天運は東方より西方に移りたり。若しこの際クセルクセスの侵入が成功したりしならんには、なほ永く勝利の運命は、東方にありたるや疑なし。こゝにペルシア帝國の大領地は多くの異れる人種、國民を含めるが故に、戰敗の結果、統一の組織は大に弛み、クルス大帝死後一百年にして、ギリシャ人はペルシア帝國に乘ずべき創痍を發見せり。そは彼の兄よりペルシアの主權を奪はんと企てたる、幼クルスに用ひられたる、セノフォン指揮の下

Xenophon

ギリシア史

Athen
Sparta
Thebes
Macedonia

マケドニアフイリップ王

Phileip
Alexandor

アレキサンドル大王

に一萬のギリシア傭兵の遠征これなり。幼クルスは西紀前四百一年に殺されたれども、セノフォン指揮下の一萬人は、すべて勝利を得て、無事ギリシアに歸へれり。この間ギリシアは確固たる國勢の發達をなしにき。ギリシアは山國にして各種の種族は割據して數多の小邦をなせども、遂に其中の一族は他族を治むる權を得たり。第一はペルシア戰役にてペルシアに勝ちたる功によりて、アテネがギリシアの主權を握り、次はスパルタ、最後はテーベなりき。而してこのギリシアの北境に位する山國あり、マケドニアといふ。この住民は、もとギリシア人より蠻狄と目せられたるが、次第にギリシアの文明を輸入し、富國强兵の道をつとめ、フィリップ王の時、遂にギリシアの盟主となれり。フィリップは、ギリシア一萬の兵がペルシアを蹂躙したる成功を知り、それに傚ひてペルシアを攻撃せんと用意せしが、果さずして死し、その子アレキサンドル大王その遺志を嗣ぎ、ペルシアは勿論、東方安息、大夏よりインド河畔に至り、アフリカにてはエジプトを略取して、空前の大帝國を建設したり。西紀前三百二

Adriatic sea

アレキサンドリア

十三年彼の死後、この大帝國は其部將等に分割せられ、極東を除く外、大部はギリシアと同方法によりて治められ、ギリシア語を用ふる人民は、一方より他方に至るに少しの困難なきに至れり。以てアドリア海とインド河間の國々とに關する知識がギリシアの學者によりて得られたるを知るべし。アレキサンドルはその遠征中到る處に、紀念として己れの名を命せる市街を建設しけるが、就中最も主要の位置を占め、今日まで盛に知らるゝは、ニル河口のアレキサンドリアにして、當時ギリシア學術の中心はこゝにありき。されば、エラトステネスが、アレキサンドル大王の征服によりて得たる人民棲息の土地に關するあらゆる知識を、系統的に書きあらはしゝもこゝなりしなり。西アジアにおけるアレキサンドル大王の全勝的進行は、地理上歷史上共に必要なりしや否やといふに、地理學上には多分の知識の貢献をなせりとは思はれず。これペルシアの東部、インドの北西部を除く外は、既にヘロドタスの旅行によりて知られし處なればなり。然し大王一行の旅行記は、各主要なる都邑

Latins
Epirus
Pyrrhus

Lombardy
Cisalpine Gaul
Etrurians
Samnites

イタリア半島

に關して一層正確なる知識を與へ、又エラトステネス及その後繼者をして世界地圖に記入すべき正しき位置を與へたり。エラトステネス等が、アレキサンドル及直接繼嗣者より得たる主要なるものは、インドの北西部に關する一層正確の知識なり。ストラボ時代に至るまでさへも、アレキサンドリアにてインドに關する唯一の知識は、西紀前三世紀中インド使節メガテステオスが與へたる報告なりき。

ギリシア方面がかく活動する間に、その西方に位するイタリア半島も亦開發の道程にありき。イタリア半島にも種々の住民ありて、その間に爭鬪絶えず。當時ロムバルヂアの沃野は今日の如くイタリアに屬せずして、シサルピン・ゴールとして知られ、イタリア南部は、前にいへる如くマグナ・グレシアと呼ばれてギリシア人の殖民地たり。イタリア中央部はエトルリア人、サムニテ人及ラテン人の三族住へり。西紀前五百十年より二百八十年まで、二百三十年間にローマはこれら三種族聯合の主權を得て自らその中心となり、イタリア聯邦を中央イタリアに建設

カルタゴ

Punic War
Alps
Corsica
Sardinia
Balearic

したり。その末年にエピロスの王ピラスは、ローマの膨脹力に對して、南部イタリアにおけるギリシア殖民地を興起せんと企てしが、そは曾て以てローマの勢力をイタリア南部まで擴張せしめたるに止まりき。

ローマの膨脹にして猶止まずんば、次にその齒牙にかゝるはシチリアなる事明かなり。この時シチリアは南方カルタゴよりも脅迫を受けつゝあり、カルタゴは西紀前九世紀の頃、フニキア人のたてたる殖民地にして、地中海沿岸における貿易航海の中繫場として緊要の處なりき。フニキア人は地中海中この附近の島嶼を取り、少くともコルシカ、サルヂニア、及バレアル群島等に他種族民の移住を妨碍したり。但しシチリア島にてはその西部一半を領有しき。ローマが中央政府に他のイタリア人の混入を許してその勝利の鞏固を計れる間に、カルタゴ人は唯貿易のために、多くの公開所を得んとて他國の所有地に注視し、地中海岸便宜の位置に會社支社等を設けんとして、アフリカの北西海岸及イスパニアの南東部を取れり。ローマ、カルタゴの兩雄は遂に衝突を免かれ

ローマ膨脹の狀況

Caesar
Pompi
Marius

ゲーザルよりはポンピ

ざりき。茲に又さきの牡蠣の貝殼の例を取れば、第一ポエニ役の當時はローマとカルタゴとが各〻その殼を作り始め、兩者の間にシチリアの東部が介在せり。この第一役の結果として、ローマはシチリアの主となり、更に第二、第三ポエニ役の結果は、ローマがイスパニア及カルタゴの所有主となれり。かくて西紀前二百年までに、ローマは實際西方地中海の主となり終り、西紀前二世紀の頃には、ローマはシサルピン・ゴールを征服して、イタリアの國境をアルプス山下に延長したり。又當時ギリシア事件に干渉して、マケドニア、ギリシアをその手中に收め、更にアレキサンドル帝國の後繼者に向ふ準備をなせり。これ西紀前一世紀の頃にして、ローマの膨脹は實際この世紀に終結せり。而してこれらの事業は主としてケーザル及ポムピ二人の功に成る。ケーザルは、その叔父マリウスの例に倣ひて、アルプス山脈をこえ、ゴール、西方ゲルマニ及ブリテン島にその威力を振ひたること八年。然れども、吾人今日の立脚點より見て、帝國の文明に一段の進境をなさしめたるに付ては、寧ろポンピの力を大

なりとす。彼は數多に分裂せる小アジアを伐ち、西アジア及エジプトにローマの領土を擴めたり。トレミーの時代までにローマ帝國は全く鞏固となりたれば、彼の地圖と地理學的記載とは、帝國の域内に關するものは大凡正確なりき。

ローマ人が其領土を鞏固になせし方法の一は、こゝに簡短に述べざるべからざるものあり。この大帝國内に一方より他方に通過することを容易ならしめんがために、直線の道路を作れる事これなり。この道路は千五百年後の今日歐洲各部に見らるべき底の堅固のものなり。これありしがために、ローマ帝國は五百餘年の無爲を得たり、又今日にても、一旦ローマの統治を得たる諸國の文明は、是を受けざるものに比して大に差違あることを見ん。文明即ち社會共同生活の術は、實にローマ法の結果なり。この意味に於て歴史上のすべての道は皆ローマに集れり。

ローマ人が西にてはカルタゴ帝國の子孫、東にてはアレキサンドルの後嗣者、ケーザルの征服したる北西ヨーロッパをも含む)より得たる知識を統括したるものは、實にクラウヂウス・トレミーとす。ケーザルは古代より生長せる二個の貝殻を結合する線なり。彼は從來の地理學上の知識にゴール、ゲルマニ及ブリテンを附加せり、又ポンピと爭ひて之に勝ち、北方の勝利に加ふるにイタリア以東を以てせり。されば此の結果は如何といふに、數多の文明諸國を一統治下に集めて一神の崇拜をすゝめき。これは旅行又は地理上發見史の上に効果あり。これ人類相互間の大堡礁は宗教の異るといふ點にあればなり。然るにローマは、この地方的宗教の固陋を打破して、一般に帝王崇拜をなさしめければ、この大帝國内の國民は何れも相互間に一脈絡を感ずるに至り、遂に吾人今日見るが如き宗教の形體を取るに至りたるなり。

ローマ大帝國が、地理學上の知識の增加に關して其中心となりたることは以上記述せしが如し。而してこの知識の幾分はローマ帝國の衰亡につゞける暗黑時代のために喪失せられたるは惜むべし。次章にはクラウヂウス・トレミーの統括したる知識の增補訂正につきて說く處

Claudius Ptolemy

ローマの道路

あらん。

第三章　暗黑時代の地理學

地理學發達の妨碍物(宗教)＝エルサレム中心說＝地圖の描法＝廣大なるアジア＝地理的神怪＝コスマスの說(基督教的地理學)＝ヒーアフォードの圖＝ワイク公の地圖＝道中記(ポイチンゲル・テーブル)＝靈地巡拜者＝地理的知識の退步＝人種移動時代の一轉機＝ブルグンヂーとポーランド＝サラセン人とアラビア人との貢獻＝アラビア人の著作＝ノルスマン＝アメリカ發見の先鞭者(ヴーンランド殖民)＝磁針の使用＝最初の羅針盤＝其改良＝海圖の製作(ポルツラノ)＝カタラン圖

吾人は前章に於て古人が漸次に征服し、漸次に膨脹して、遂に東半球の大部分を知得し、その知識がクラウヂウス・トレミーに統括せられたる所以を述べたり。依て本章に於ては、その知識が幾何損亡せられ、破壞

せられたるか、換言すれば當時いかに地理學が科學的性質を失ひて、今一度最古代に見ゆると同じき神異的想像に流れたるかを見んとす。この發達の妨碍をなせるものを一言すれば宗教なり。否寧ろ神學なりかくいへばとて勿論その詞固有の意味における正當の宗教とか、又批評的主義を基礎とせる神學とかをいふにあらず。屢〻痛く誤解せられたる經典の本文の固執より生ずる宗教的觀念を指すものなり。請ふこゝに簡短なる一例を引用するを許せ。以西結書第五章に「主エホバかくいひたまふ、我このエルサレムを萬國の中におき列邦をその四周におけり」と。中世代の僧侶等は、當時の最も地理學に通じたるものなりしに係らず、この文を以て一の詩的文意なりと解せずして、正確なる數學の理法と解せり。從て中世代の地圖はみなこれより割り出されたり。勿論エルサレムを中心とすることに多少の眞理なきにあらず。これエルサレムは古代の人民の思ひしが如く、世界を東西に計らばその中心たるに近かるべければなり。中世代の地理學者はエルサレムを世界の中心と思

地理的知識發達の妨碍物(宗教)

Ezekiel

エルサレム中心說

當時地圖の描法

へると共に、世界の周圍を海洋もて圍繞すとのホーメル的思想をも有し、そを世界の四圍に關する經典の文意に密着せしめたり。又地圖の描法は東を上にしエルサレムを中心とし、圓の下半部は地中海にあて、エーゲ海及紅海はその左右に垂直的に連れり。かくて上部はアジアに、下部の左方をヨーロッパ、右方をアフリカとなし、地中海は三大陸の廣袤を限れり。この地圖の錯誤の一は、第一アフリカ南部の全體を切捨てしことにて、これがためアフリカ南部を航して印度に至るには、簡單なる航海にてなし得べく想像せり。人間萬事塞翁が馬、この誤想は却て地理上發見史の上に必要且つ賞すべき結果を起せり。

Agean sea

廣大に想像せられたるアジア

Gog
Magog

○の中にTを書ける如き舊世界の觀念の他の結果は、非常の大さにアジアを想像せることとなり。さればアジア中には、中世代の僧侶の地圖作者に知られざる處多し。故にこの不明の部分に經典または古文學中より出でたる神怪的の說話を充てたり。聖經中に極めて僅少の基礎を有する二個の峻酷なる國民あり。ゴーグ及マゴーグと呼ばれ、早晩文明

Shakespeare
Sir john Maundeville

Pliny
Solinus
Sciapodes

世界を滅亡せしむる者なりと想像せられたるものなり。この二國民の住地は今日のシベリア地方に充てられ、アレキサンドル大王は鐵嶺の背後にそを記入したりと想はる。第十三世紀に、大韃靼が歐洲に侵入したる時に、歐人はこれ疑もなく、說話中のゴーグ及マゴーグに外ならずと思ひき。又極樂の位置は極東にして、中世代の地圖におきては頂上にありと思へりき。プリニーやソリナスの古文學に見えたる、普通人間よりは非常に異れる魔人の奇族に關する怪談あり。中にスキアポデスと名づくる人間にして、その足は非常に大にして、暑き時は足を上にし背を地につけて樹陰に憩ふものあり。又シェクスピアの著書中にもこれに似たる魔人あり。その頭はその兩肩の下に生せ

第二圖

地理的怪神

Cosmas
Cosmas Indico Pleustes.
Christian Geography
コスマスの説

り。又サー・ジョン・マウンデヴィーユの神怪旅行記中にこれらの奇怪なる動物の圖あり。こゝに轉寫せるものはその一なり。これらの怪異の動物が、中世代における地圖中には、アジアの廣漠たる地方を占領する如くに記されたるなり。

實に或作者はその教義上の熱心のために、人類住居の世界の觀念を限定せんとて、遠方へ旅行を試みき。コスマスといへる基督教徒の商人は印度に旅行したり。彼はコスマス・インヂコ・プロースティスと呼ばれ、西紀五百四十年頃、世界の形狀につきて異教作者の謬説と思はるゝものを驚慌せしむるために、基督教的地理學と名づくるものを公にしたり。特に彼の怒を惹起せしところのものは、地球の圓形なりとの觀念と對蹠地には人が倒に立つべしとの觀念なりき。彼は圓球を畫き四人が各その反對側に立つ處を圖して問うて曰く、この四人は各眞直に立つことを得べきやと。又若し太陽が地球を周回するにあらざれば、晝夜の關係は如何にして生ずるやとの説明を望む者に對しては、彼は極北に一

Mappae Mundi

大山脈ありて、その周圍を太陽は二十四時間に一回轉することを想像する故に、夜は即ち太陽がその大山脈の反側に回ぐれる時なりと。又彼は太陽は地球より餘程小なりと信じて滿足したりき。又その説に依れば地球は程よき大さの平面にして、人民の住せる部分は大洪水以前の世界より太洋の爲に分離せられたり。又地球の四隅には天蓋を支ふるための柱ありて、恰も宇宙は大玻璃標本函の天井の如しと。コスマスの意見は彼等一輩にはおもしろく、又をかしくもあるべけれども、當時の僧侶等と雖、そを信じ、注意を拂ふにはあまりに極端に過ぐと思へる位なれば、吾人には寧ろ滑稽に思はれて、世界に關する彼等の知識を集めたる種々のマッピ・ムンヂには一の參考とすべきことなし。これら地圖の最も有名なるものゝ一は、イギリスのヘレフォードに現存す。こゝに圖するものは即ちその平面圖なり。これによりて讀者諸君は、望む處の中世代の地理學に關する多くの材料を得ん。圖中の最頂上は極東にしてこの世の極樂土を示し、中央にエルサレムあり。この下の地中海は地圖中

Norway
Cynocephali
Gryphons

ヘレフォード地圖

第三圖

ヘレフォードの地圖

の下端まで廣がりて中心に多くの細記する群島を保てり。河流は多く注意せられありといへども、山脈は然らざりき。たゞ一の活動的知識の增加が地圖中に見ゆるは歐洲の北東部に關してなり。こは北人の侵入によりて一層よく知らるゝに至りしものゝ記入しあることなりとす。而して歐洲の位置に關する知識の全く欠乏せし證は、この地圖の作者がノルウェーの近くにシノセファリ(犬の頭を有する人にしてインディアン・モンキーの話の混雜より生じたる者ならん)を

William of Wykcham
Oxford
Fellows

Seven Sleepers

おけることによりて知らる。又彼等の近くにグリフィンスあり。こは非常の惡人にして、その不法なる行爲中には敵の皮を取り、そを以て彼等又はその馬のために衣服を作ると稱せらるゝものなり。又異教徒を改宗せしむるための奇蹟として話されたるセブン・スリーパースの居所をも作れり。又イギリス島の形狀は世界を圓く作るための必要より、かゝる有樣に作られたることは一目して瞭かならん。その他この島に關する細說は茲に之を略す。

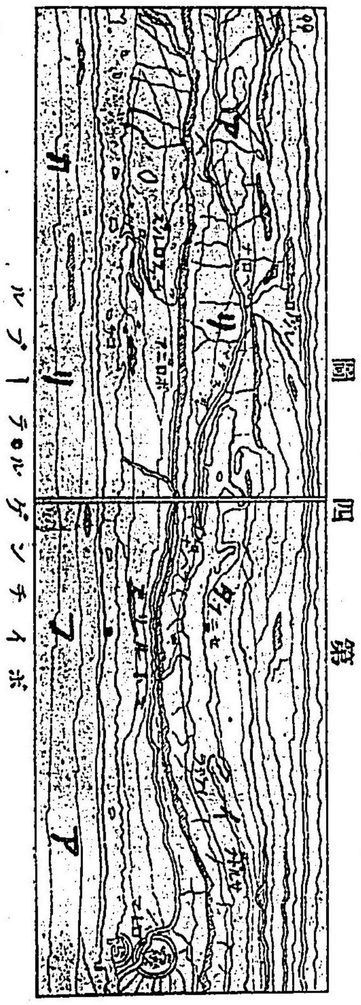
ヒーアフォードの如き地圖は、旅行者の實地使用に堪へざることは瞭かなり。又實際かくの如き目的にて作られざりしなり。こゝに於てか地理學は實地科學たる意味を失ひ、たゞ世界の圖きことを知らしめて、人を驚嘆せしむることの用たるに過きざりき。ウィリアム・オブ・ウイクハムはオックスフォルド大學の新分科のフェロー及學生に彼の法式を描かしめし時に、怪物や各異の王國の年代記や、人口に膾炙せる詩篇をもつて顯す樣指揮せりき。これより殆んどすべて中世代の地圖は、かゝる怪物奇

ソイクハム指揮の地圖

Peutinger Table,

物の繪にて充たさるゝに至り、その習慣は殆んど第十九世紀の初期まで製圖上に傳はれり。即ち海洋圖中に空席ある時は、船舶の疾走圖又は海棲怪物の噴水する狀等を畫きて、その部分を充たすが如し。

人若し旅行せんと望む時は、決して前述の如き地圖によらず、他の道中記を用ひたり。道中記には地球や、各國の形狀等は記載なしと雖、たゞ多く往來する道路に當れる主要の都邑を說明せり。かゝる種類は古より發達して、ローマの帝王中には時々かゝる道中記を編纂せしめたる



第四圖　ペウテンゲル・テーブル

ポイチンゲルテーブル

Kent

巡禮地巡拜者の功

ものあり。現にローマ帝國の殆んど完成せる案內記の殘存せるを見る、之をポイチンゲル・テーブルと稱す。これ始めてこの案內記に學者社會の注意を引きたるドイツ商人の名にとりしなり。

こゝに挿入せしは即ちその一部の縮圖なり。以て道路と都邑以外のものは何も知るべからざることを見るべし。不幸にもこの表のイギリスより發程する初めの部分が毀損せられたゞこゝにケント州の海岸を得たり。この案內記は、巡禮のための旅行にも、商業的旅行用にも、又兩者の意を含める旅行用としても、實に必要なり。東方ヨーロッパに關する主要なる報告の、西方ヨーロッパに達したるは、主として十字軍時代にパレスタインに參詣のため旅行したる巡禮者によりてなり。西紀五百年より千年に至る五世紀間に、ヨーロッパの地理學に付き吾人の得たる主なる知識は、實にこの續々行はれたる巡拜者の與ふる處なりとす。而してこゝに甚だ怪訝なる一事は、中世代の第二期中に、各種の旅行者が各種の方面より、即ちアジア、北ヨーロッパ又はアメリカの或部分よりさ

Attila
Visigoth
Vandal

人種移轉時代

Vistula
Dnieper
Volga
Hun

へも、多くの報告を將來したるにも係らず、それによりて得たる正しき知識を以て、ヒーアフォード中に見ゆる如き誤想を、コロムブス時代までも學者が改訂せざりしことなりとす。

されどこの時代に地理學の知識の進歩を見ず寧ろ退歩したるは、敢て怪しむに足らざる理由あり。この時代ヨーロッパの地方は、その政治的區分が一旦破壞せられて、又再び整理せらるゝ過渡の時代なりければなり。西紀四百五十年より千四百五十年間にわたる歴史の千年間は、實に殆んど全く世界の舊區分を破壞したる波浪のアジアの中心より起りたる時なればなり。

第五世紀には三の遊牧族が、特にヴィスチュラ河、ドニーペル河及ヴォルガ河畔よりローマ帝國に侵入せり、即ち最も東方のヴォルガ河邊よりはフン族がその王アッチラの指揮の下に襲ひ來りて、ローマ帝國を震駭せしめ、ドニーペル河畔よりは、西ゴート族が東ローマ帝國を攻撃し、その間ヴァンダル族は、ヴィスチュラ河邊より來りて、行く行く勝利を博し、ガリ

Burgundy

ブルゴンヂーとポーランド

Frank

ア、イスパニアに入り、遂にアフリカの北岸に一時ヴァンダル王國を建設しき。これらの運動の結果の一としては、ゲルマニ諸族をフランス、イタリア、イスパニア及イギリス地方にまで移動せしめたる事にて、世界史上この一段階により、吾人は英國史の初頁を始め、フランクのガリア地方進入は以てフランス史の初期となすべし。第八世紀までにフランク王國は、今日のフランス全體及中央ドイツの大部分を含むまでに擴張し、西紀八百年のクリスマス當日に、カロロ大帝はローマに於て、法王より西ローマ帝王の冕冠を受けて、こゝに古帝國の復活を見るに至れり。勿論カロロの得たるは現世的權力にして、精神界における心靈的權力は依然法王の有なりき。

この大フランク帝國の分裂は吾人の注意を値す。フランスとドイツとの間に介在してその緩衝國たりしブルゴンヂーは、自然的境界を有せざりしために、永く兩國間の鬪爭目標たりき。歐洲の東方に位置せし國にして、これと同性質のものは、ポーランド王國なり、その形狀も不正

Poland

にして常に東方歐洲諸強國間の爭點なりき。ポーランドは西紀千七百九十五年に、其獨立を失ひ、同時にロシア及他歐洲諸國間の緩衝國たるの任は終へたり。されば、ローマ帝國の範圍内にゲルマニ族移住後の歐洲史は、一言以てすれば、ブルグンヂーとポーランドとの所有に對する爭鬪なりと概言することを得べし。

こゝに歐洲の南西部に於て、文明の狀態に世界的變化を與ふる一の徵候として、吾人の注意を喚起すべき主要なるものあり。第七、八世紀の間アラビア半島の住民の興起是なり。彼等は新興のイスラム敎を熱心に鼓吹して、遂に東はインドよりアフリカの海岸をわたりて、西の方イスパニアにまでその勢力を及ぼせり。而して彼等は一旦定住するや、地中海の北岸には已に消失したるギリシア的ローマの科學を復興せり。

Arabia サラセン人
Islam

Bagdad

シリア地方の基督敎徒は、その聖語としてはギリシア語を用ひたれば、バグダッドのカリフがギリシア人より聞知せんと欲する事は、まづギリシア人の科學上の著作を、シリア語を語る基督敎徒によりて、シリア語に飜譯せしめ、さて後にアラビア語に再譯せしむ。かくしてアラビア人は天文學にあれ、地理學にあれ、悉くトレミーの大著作を了解したり。天文學は彼等の最も必要と感せし所のものなりき。

アラビア人の征服は、二の方面より地理學上に貢獻せり。一は十字軍により、他はアジアの東西相識の復活をなせるによること是なり。アラビア人はザンジバル、ソファラに至るまで南東アフリカを知れり。この地方は、トレミーは大不知南大陸としてインドの方向インド洋に擴布すと想像せしものなりき。又アラビア人はニル河源につきても幾分の知識ありしが如し、又錫蘭、ジャヴァ及スマトラ等を知り、ココアナットの使用法を知れる嚆矢なり。アラビア商人は、九世紀の頃既に支那と交通を開きければ、支那に關することはまづ彼等より傳はれり。曰く支那人は立派なる體格、綺麗なる黑き毛髮、しまりある容貌を有して、インド人よりも遙かに美く、よくアラビア人に似たりと。終りに吾人は、かく廣大の面積に布敎せられたる宗敎のために、如何にアラビア人が已知の世界の

アラビア人の貢獻

Zanzibar
Sofala

Ceylon
Java
Sumatra

yacutr
Roger
Edrisi
アラビア人の著作

一端より他端に旅行することの比較的に容易なりしかを語らん。先づアラビア人の地理學的著作に付き數言を費さゞるべからず。ヤクートに從へば最も主要なる著作の一はABC順に排序せられたる地名辭書なりとす。猶一層大なるものは、西紀千百五十四年シチリアのローゲル王に從へば地理學家エドリシの著なりとす。彼はトレミーの方法に倣へるが、更に修正して世界を說明したるなり。彼に依れば世界を七横帶、所謂七氣候帶に分ち、その一帶は又十一縱帶に小區分せらる。故にエドリシは世界を七十七目に劃されたる碁盤の如くし、そを一目毎に苦心して說明したり。畢竟するにかゝる方法は各個別々の國の明晰なる觀念を與ふるには適せざるなり。アラビア人は又土地の記載に於てその土地にある都邑の位置等は顧みずして、その土地に屬する住民種族に付きてのみ記せり。要するに彼等は人類地理學に著しく卓越したりしなり。然れどもアラビア人の地理學は、歐洲の地理學界には影響せざりき。是れ地圖の示す範圍に於ては、コロムブス時代までは殆んど事實

Norway
ノルスマン
Ireland
Greenland
Labrador
New Foundland
Biorn
Vinland

よりは寧ろ想像に基礎を取ることの繼續せられたればなり。

かゝる程に第八、九世紀間に他の一運動が進みたり。そは現世のヨーロッパを形成する上に多大の補助をなし、非常に北歐人の知識を增加したるものなり。ズニキア滅亡以來大海國民たりし率先者をノルウェー國とす。この國はこの二世紀間に實に殆んど全歐洲の沿岸を風靡したり。ノルウェーの峽江にその狹長なる船舶を保ちし北人は、歐洲沿岸到る處に激烈なる打擊を與へたり。而して多く鞏固なる政府を形成してその人民を安心せしめたり。氷洲にもイギリスにも、アイルランドにもノルマンヂーにもシチリアにも又コンスタンチノプル及ロシアにも又或時は靈地エルサレムにも、北人は王國を建設してその間を絕えず互に往來して、知識の交換をなせり。

彼等は又グリーンランドに航し、なほすゝみてラブラドル及ニュー・ファウンドランドにまで至りしことは證蹟分明なりとす。西紀千一年に氷洲人ビオルンが其父に會はんとて、グリーンランドに航せり。洋上南西

アメリカ發見の先鞭者
ヴィンランド地方
Zeno
Venice
Es'otiland
エストチランド
Faroe

に吹送せられて、自からヴィンランドと名付けたる地方に達せしが、こゝには矮人の往居するありて、一日の長さは僅に八時間なりといへり。これ恐らく北緯五十度邊ならんか、こゝに北人は殖民をなせり、その後千百二十一年の頃グリーンランドの僧正は彼等を基督教化せんとてそこに至りき。而してこのヴィンランドは北アメリカ胴體の一部なること、は疑なし。されば北人は歐人にてアメリカを發見したる先鞭者たるべし。其後千三百八十年にゼノと名付くる二人のヴェニス人は氷洲に至り、こゝにエストチランド島の傳說あることを報せり。この島はグリーンランドの南、ファロー島の西、一千哩にあり。傳說によればこの島民は開化せる善良なる海員なりと。然れども彼等は未だ磁石の使用を知らず、彼等の南には野蠻の食人種あり。又南西には他の開明人種ありて、大市街大殿堂等を有せりといへども、人間の犧牲を獻ずる習慣ありといへり。これ恐らくはメキシコに關する朦朧たる知識なりしが如し。

古代にても中世代にても、航海發見に付ての最大困難は、常に海岸に

磁針の使用
Java
Barcelona
Coeur de Lion
Alexander Neckam
Guyot of Provance
Troubadour
Dante

近接して進むにあらずば航海する能はざることこれなり。彼等は日中は太陽に、夜分は北極星に依りて航すれども、一旦空かき曇るや日中にても全く途方にくれざるべからず。されば常に極星を指す磁針の發明は、遠洋航海上最大急務となれり。この磁針は極めて古代より支那人間には知られて、十一世紀頃既に彼等のジャンクに利用せられたるが如し。アラビア人のセイロン若くはジャバに航せしものは、其使用法を支那人より學べり。而して歐洲にて初めて其使用を傳へしは、バルセロナの海員なりといふは、恐くは、これをいへることならん。磁針に關する最初の記載は、クール・ド・リオンのリチャードの兄弟たるアレキサンダー・ネッカムの著自然科學史の論說中に見ゆるものならん。他の參考としては西紀千百九十年プロバンスのギョーなるトロバドール(第十一世紀より第十三世紀の末までフランスの南部イタリアの北部等に勢力を占めし一派の詩人)の諷詩に見ること是なり。これには航海者は北極星を見出してその方向に舵を把りて舟を進ましめ得べしとあり。そは即ち磁針

最初の羅針盤

Brunetto Latini
Roger Bacon
Flavio Gioya of Amalfi

の方向に從ふ事にて、磁石とは水を盛れる皿の中に藁を浮べ、その上に磁氣にふれしめたる針を置きたるものなりと。然れどもこは廣く使用せられざりしが如し。ダンテの敎師たるブルネット・ラチニが千二百五十八年にロージャー・ベーコンを訪へる時に、僧侶は磁石とその性質とを彼に話し、且つ曰く魔術者といはれんことを恐れて航海者は一も之を使用せずと。實に初めて磁針が使用せられたる如き形體にては實用には通せず。現今使用する如き一の樞軸上に平衡を保ちて方向を書ける盤上に安置せられ、舟子の必要なる準備品の一に伍するまでには度々の改竄を經たるものなり。この實地に改進したる功は、第十四世紀の初期アマルフィのフラヴィオ・ジョーヤに歸すべし。

從來の地理學者は(主としてギリシア人、及アラビア人)兩地點の關係を示すには、商人か軍人かの旅行記に見ゆる概括によりて定め來りしが、磁針一たび航海者の常用に供せらるゝに至りて、各國の位置の關係は速かに決せられ、又道路はいかに曲折せりとも、少の困難もなく兩地

海圖の製作

Portulano
Nordenskiold
ポルツラノ
Cataran map
カタランマップ
Majorca
Angelico Dulcert
Cresquez

點の位置の關係を發見し得るに至れり。されば學識ある僧侶が猶神話や偽言をとりて、世界の地圖の基礎となし居る中に、一方には地中海の舟夫等は、同海及その附近の島嶼の海圖を漸次に製作しつゝありたり。この種類の海圖をポルツラノと呼ぶ。これポルト(港)よりポルトに至る間の道を最よく示せるが故なり。ノルデンスキォルド男は近時これらのポルツラノが、(現今は已に失はれたれども西紀一二六六年より一二九一年までの間に編成せられたるもの)カタラン圖より發達したるものとなせり。然れどもなほ當時舟夫等のこれら實際より得たる知識を信せざる學者もありき。西紀千三百三十九年にマジョルカの人アンジェリコ・ダルケルトなるもの、ポルツラノの主義に從ひて精密なる世界圖を作れり。これには正しき海岸線(少なくとも地中海丈には)を記入せり。西紀千三百七十五年同じくマジョルカ島のユダア人にしてクレスクェッなるものは、マルコ・ポロといふ大旅行家より得たるカタイ即ち北支那に關する最新の知識を、該圖の東部に塡充して、一段の進歩をあらはせり。この圖は(圖中に澤山記入しある國語によりてカタラン・

マップと呼ぶ)八並行帶に分かれ、最初の頁に地中海の海岸線は、如何にして正確に表示せらるゝに至りしかを記せり。

ポルツラノはよく事實を表し、且つ海岸線の正確なる表明を與へて、地理學上の知識がその進境を復活したるが爲に、航海者は何等の恐怖もなく安全に航海することを得て、大に知識を增進したり。ポルトガルの王子ヘンリ・ヒナヴィゲーターをして中世代を閉づるに足るべき程に、地理學上の調査をなさしむるに至りしもこれがためなり。

Portugal
Henry the Navigator

Marco Polo
Cathey

第四章　中世代の旅行

中世代に於ける人智開發の段階＝蒙古興起＝歐洲侵入＝使僧プラノカルピニ＝ルブルキの支那に關する報告＝その他の僧侶＝マルコ・ポロの東洋行＝ポロの登用＝ポロの歸國＝ポロの入牢＝ポロの旅行記＝ポロに關する批評＝イブン・バッタ＝景教の流布

蒙古の興起

中世代即ち第五世紀にローマ帝國に蠻族の侵入せるより、第十五世紀に新世界の發見ありたるまで、凡そ一千年間に、世界に關する人類の知識の擴張に資せる歷史上の主なる階段は……(一)第八世紀九世紀における北人の航海……(二)第十二、十三世紀における十字軍……(三)第十三、十四世紀にける蒙古帝國の膨脹。

これなり。然して北人の得たる知識は、北人以外の他國までには蔓延せず。十字軍及その先祖等の靈地巡拜によりて得たるものは、たゞ已に古代人民間に貯へたる知識を、歐洲西部に轉送したるに過ぎず。獨り蒙古の膨脹の結果はその影響する所廣くして、ローマ人には未知の東方アジアの知識を增加せしめたり。

第十三世紀の初期に、成吉思汗はオナン、ケルレン兩河間の一小蒙古部に起りて、漸次その附近を征服し、遂に支那を始め中央アジアを含む大範圍に主となれり。その子窩濶臺(太宗)の時、鋒を西方に轉じてアルメニアを征し、その部將の拔都を總督とし王子宿將等ロシアに入り、ポー

Armenia
P. land
Buda-pest

ランドを侵し、西紀千二百四十一年にブダ・ペストを陷れたり。茲に於てか、ヨーロッパ人はこれ即ち神話に見ゆる世界終末期の近づきけるにて、ゴーグ及マゴーグ等の國民が、その豫言を實行するならんとて大に恐怖の念に驅られたりき。然れども窩濶臺は俄に死してこれら諸軍は召還せられたる爲に、歐洲は辛うじてその蹂躙を免れたり。かく歐洲全般の恐慌は遂にローマ法王をして蒙古太汗に使節を派遣せんとの決心をなさしめたり。西紀千二百四十五年に法王は遂にヴォルガ河畔サライに都せる拔都の陣營にジョン・オブ・プラノカルピニといふ僧侶を送りけるが、拔都は彼を更に和林に都せる蒙古太汗の下に送れり。

Volga
Sarai

始めてアジアに至れる使節

こゝに初めてアジア東部の沿岸には、未だ蒙古に服屬せざるカタイ國のあるを知れり。これに關する充分の報告は、ウィリアム・ルイスブローク即ちルブルキよりありたり。彼はフランダル人にして、聖ルイより使節として和林に至り、西紀千二百五十五年ヨーロッパに歸へれり。そのロージャー・ベーコンに報告せる一端に曰く、カタイ人は體格小にして發音

John of Planocarpini
William Ruysbroek
Rubruquis
St, Louis

プラノカルピニ
ブルルキ

Flander

多く鼻にかゝり、一般東方人民に普通なる如く眼は小なり。通貨には織物を用ひ、その長幅共に三インチにて、上に蒙古太汗の印璽に似たる線を引けり。又彼等は畫家の用ふる刷子に似たるものをペンとして字を書し、その一の字は多くの意味に變化す云々と。而してルブルキはこれらカタイ人を古代のセレスと同一なりとし、トレミーは絹を生産する國としてこれを知り、又シネーにつきても知りしが兩者を同一視せざりしなり。シナなる名稱は、海路より西歐に傳はれるマレイ語の變化を受けたるにて、セレス及カタイの名は陸上より傳はれり。さては同物異名を混雜するに至りしならん。

Seres
Sinae

是等につぎて他のフランシスカン派の僧ジョン・オブ・モンテコルヴィノなるもの帝都北京に僧正として住へり。これ凡西紀千三百五十八年頃なり。この間にフリウリの附近なるポルデノンのオドリック僧正は、西紀千三百十六年及千三百三十年の間に印度と支那とを旅行せり。而して最も驚くべき誤報を齎せり。この誤報は多くサー・ジョン・マウンデヴィュの

Franciscans
John of Montecorvino
Friuli
Odoric of Pordenone

モンテコルヴィノ
オドリック僧正

Bokhara
Clement IV.
Gregory X.
Nicolo Polo
Maffeo Polo
Crimea
マルコ・ポロ
Sir John Maundeville

著作中に引用せられたるものなり。

是等僧侶の齎せし報告は、之をマルコ・ポロの大且つ正確なる東洋に關する報告に比すれば物の數にも足らず。マルコ・ポロは實に東洋に十八年餘を過ごせしヴェニス人にして、その旅行は、コロムブスの新航海を導きて地理上發見史の一時期を劃するに値するものなり。

西紀千二百六十年にマルコ・ポロの父ニコロ・ポロ及叔父マフェオ・ポロの二人は商業のためクリミアに至らんとて、コンスタンチノプルを出發し、遂に夫よりボカラを經て、蒙古太汗忽必烈の許に達せり。太汗大に喜びて二人を優遇し、西歐の文明を蒙古新帝國に輸入するの利なるを知りて、基督教及西方の技術を蒙古人に教ふる爲に、百人の賢者を派遣せられたしと、法王に請求する任務を二人に託したり。因て兩人は千二百六十九年故郷ヴェニスに歸り、更に法王廷に至りて太汗の希望を述べんとせしに、法王クレメント四世はその前年に死し、後嗣未定の時なりければ志を果さず。依て二年間を經てグレゴリ十世の法王に登位する

Dominican
Ormutz
Khorasan
Balkh
Oxus
Pamir
Kaipingfu
ポロの登用

を待ちて奏上せしに、法王はさして喜びもせざりしが、ドミニカン派の僧二人を、兩人のポロに添へて太汗に遣すことゝせり。兩人は時未だ十八歳の少年マルコ・ポロをも共につれて太汗庭に至れり。彼等は千二百七十一年に出發したりしが、二僧は中頃失心して途に歸りたり。

ポロ等三人はまづペルシア灣頭オルムッに達し、更に北方コラサン、バルク等を經てオキサス河畔に出で、遂にパミール高原に達し、戈壁の大砂漠を過ぎて西紀千二百七十五年五月太汗の夏庭開平府に至れり。太汗の希望を滿足に果たさゞりしにも係らず、ポロ等は優遇を享けたり。且つマルコ・ポロの年少にして、その聰明らしき容貌、敏捷なる擧動はいたく太汗の愛する所となり、遂に官吏として登用せられたり。この頃に至り支那の記錄中にポロは樞密院第二等出仕に任ぜられたる文書發見せられたり。在官中ポロは西藏、交趾支那さては印度にまでも種々の使命を帶びて旅行せり。ポロは太汗の寵を受けたるために非常に多くの富を蓄積したり。ポロまた只管太汗の爲を思ひ、一身を捧げて其職

Zayton

ポロの歸省

に盡せしが、とかく故郷の空の夢寐の間にも忘られで歸國を請ふこと度重なりけるが、太汗もポロに別るゝことを惜みて許可あらざりき。

こゝに計らずもポロが歸郷を得るの好機こそ到來したれ。そはペルシア汗が蒙古太汗の親族の一女と婚を通せしに、この女子已れ獨り遠く異域に旅行することを好まざりしかば、共にペルシアまで送り添ふべき人を求めけるに、韃靼人はもと航海に熟せざれば、遂にこの航海を保護して、公主にペルシアに附添ふべき大命はポロに下れり。是に於て彼は西紀千二百九十二年ゼートンを出發し、アジアの南岸をめぐりて二年の後安全にペルシアの緣家に着せり。ポロはこゝに其重任を果しゝかば、ペルシアを辭してイタリアの故郷に向ひ、千二百九十五年に歸着せり。この時ポロは韃靼風の粗大なる衣服を着しければ親族等は久しく不在なりしポロとは容易に信じもあへず。ポロも詮方なく彼等の疑念を晴らす工風もがなとて晩餐に親族等を招きてその時盛裝をなし、會食中も數度裝束を改めて、着替へし服は給仕人に與へ、會將に終ら

ポロの入牢

Adoriatic Sea
Genoa
Pisa
Rusticano

とする時、再びもと着し粗服に改め、さて鋭刀を取りて縫目を斷つや否や、目も眩せんばかりに、紅寶玉、青玉、紅玉、金剛石さては綠玉など燦爛として耀き出でたり。是がために親族等のポロに對する態度も大に異りて、いかにしてその富を得たるかを熱心に問かんとせり。

ポロは蒙古太汗の富及その領内の人民の數の夥多なるを話すに幾度となく百万なる詞を用ひたり。故に、マルコ・ポロは普通に朋友間にはマルコ百万と呼ばれたり。マルコ・ポロの歸國の年に、アドリア海の女王と呼ばれたるベネチア市と、ゼノア市との間に海上に關する戰爭の開始ありたれば、ポロも一隊を指揮して軍に從へるが、不幸にも捕はれてゼノアの獄に下されたり。入牢中共に入獄せるイタリア國ピサの人ルスチカノと相知れり。こは一個の學者にて、さきにラウンド・テーブルに關する多くの小說を散文に改書したることある人なり。當時文學にはラテン語を用ひず、フランス語流行し、佛語は實に西歐武士の常用語なりしかば、ルスチカナは入獄中ポロの東方旅行の談話をきゝて佛文に

ポロの旅行記

Khotan　ユールのポロに關する評言　Colonel Sir. H.yule.

て綴れり。これなほ今日にも存せり。マルコ・ポロは千二百九十九年に宥免せられてベネチアに歸り、一月九日に死せり。その遺書に從へば、これ千三百三十四年なり。

マルコ・ポロの旅行記に細說しある記事、及其地理上發見史上における價値は、今この小冊子に十分論說せんことは難し。されば、こゝにはカーネル・サー・ヘンリ・ユールが概括したるものを示して足れりとせん。ユールはポロの旅行記を大に研究して、場所に關するその位置、道程を明にしたり。その出版物は實に英國學界の一大紀念物なりとす。

マルコ・ポロはアジアを横斷して自から親しくその途中の國々都邑の名稱狀態等を目睹して記述したる旅行者の魁なり。ペルシアの砂漠、バタクシャンの美しき花咲く高原、すさまじき峽谷、硬玉を産するホタンの河流、盛ならんとするキリスト教國を襲擊したる祖國の搖籃たる蒙古の草原、そこに立てる新しく輝ける汗庭、何れとしてその足跡の印せられざるはなし、又支那の殷富及宏大、その

Abyssinia　Socotra　Zanzibar　Madagascar　Java　sumatra　Andaman　Nichobar

大河江、その大市區、その饒多なる製品、その增加する人口、河海を急航する大艦隊等につきて支那を紹介したる第一の旅行者なり。彼は又風俗宗教を異にせる支那四隣の國民をも紹介せり。即ち迷信を持てる西藏、金塔と搖落たる冠とを持てる緬甸、その他老撾、暹羅、交趾支那及日本（東方ツールと稱して薔薇色の眞珠及金葺家屋ある樣に記せり）を紹介したる率先者なり。なほその他に記載せられたるは、美と驚異とに富める印度群島にして、歐人の最も尊重する香料を産するあり、眞珠の島なるジャワ、多くの王を有し高價の貴重品を産し、食人種の住へりといふスマトラ、アンダマン人、ニコバル島の裸纒、聖山あり且つ玉の産地たる錫蘭、アレキサンドリア物語の夢の國にあらざる大印度國、そこには高德の婆羅門僧住み、淫猥なる隱遁者あり、陸地に金剛石を産み、海底に眞珠沿めり、中世代に歐洲より離れたる處にアビシニア基督教國、及ソコトラ半基督教國あることを始めて紹介し、又黑奴と象牙とを産するザンジバル

Tunguse

を記せり、又大にして大陸より離れたるマグガスカル島を記して、南は暗黑大洋に接して妖怪の住所たり、シベリア及犬橇、白熊、馴鹿にのるツングス人の住居せる北極の對蹠地となせり。云々

マルコ・ポロは實に地理學發見史上の一大人物なり。誰か地表に關して吾人の有する知識に彼以上の貢献をなしたる他の旅行者を指摘し得るものぞ。確にスタンレーが暗黑大陸を探檢したるまではこの他に大旅行をなしたるものなかりき。而してポロの發見したる諸國は已に多くの人口を有せりといへども、早くその繁昌期を過ぎて、他の文明諸國より絶縁せられたれば、彼の談話は後世その實況を目擊するものなかりし故現時多くは妄誕虛構と思はれ終れり。

Tangier
Mahommed Ibn Batuta（イブンバツタ）
Mecca
Borhan Eddin

タンジールの人マホメット・イブン・バツタは千三百三十四年に旅行を始め、メッカの靈地に參拜する回教徒の普通の義務を果さんとて出發したるなりきアレキサンドリアにてボルハン・エヂン聖に會してその旅行の目的を告げしに、ボルハン曰く、汝はわが兄弟ファリド・イヂン及

Farid Iddin
Rokn Eddin
Scindia
Gregory X.

ロクン・エヂンにあるもの及支那のボルハン・エヂンを訪へ、彼等に逢はゞ以て我意を通せよと。法王グレゴリ十世が基督教僧を支那に派遣する事につきての錯誤により、韃靼諸王は基督教の代りに回教を採用すとの事實を信じて、イブン・バツタは遂にボルハン・エヂンの言に從ひ、その兄弟等に逢はんと決心したり。實に彼は又支那にて逢ひたるシエイク・カワン・エヂンの好意をスーダンに住めるその親戚に知らせんとて一層大なる探檢をなしたり。彼れは三十年間の旅行にてエルサレム、アルメニア、グリム海、コンスタンチノプル、ボハラ、アフガニスタン及デーリ等に至れり。遂にマホメット・イングラク帝に知られ、擢でられて判事となり、使節として支那に遣さる。始め陸路をたどりしが、道路危嶮多かりければ、遂に印度カリクトに錨を抜きて、錫蘭、マルデーヴ島、スマトラ島等を經て當時支那の大港たりし廣東に達せり。時に支那は内亂ありければ、再び同じ海路をカリクトに歸り、而も常に渴せずしてオルムッ及メッカに行き、遂に千三百四十九年にタンヂールに着せり。彼の旅行の嗜

Ormuz
Mecca

Sheikh Kawan Eddin
Mohammed Ingklak
Calicut

Morocco
Niger
Jimbuc'oo
Fez

St, Thomas
Nestorian Church

景教布教僧

好は未だこゝに盡きず、更に直ちにイスパニアに向ひたり。後又モロッコよりサハラを横過し、スーダンに至れり。彼はニゼル河に沿ひ（これをニル河と思へり。）テムブクッーに至り、更に千三百五十三年フェズに歸着せり。彼の旅行談はアラビア字にて記されければ、マルコ・ポロ以後歐人の知識にはスーダンに關する以外には何等貢献する處なかりき。中世代地理學の歴史はイブン・バッタを以て終りとなすべし。その死後八十年にしてポルトガルのヘンリ航海王子の活動始まり、これより近世代に入るべきなり。

然してこの間印度は割合に多く知らるゝに至れり。そは印度にて殉教者と信ぜらるゝ聖タマスの社殿を拜せんが爲に、印度に入りたる逼歴僧の旅行によりてなり。又こゝにネストール教の中央アジアに擴布したる有樣を記載せざるを得ず。第七世紀の頃シリアの基督教徒はネストリウスの教義を奉じ東方に宣教し、基礎をペルシア及トルキスタンにおきて遂には北京にまで布けり。蒙古太汗の治下にネストール僧

Ung Khan
John the Cohen

の宣教の元氣は大に恢復したり。而し夫等布教僧が報告書に用ひたる國語の痛く制限せられたりければ、或特別の興味あるものゝ外は、地理學上の知識に貢献すること少なかりき。イスラエル十族の衰運は研究の興味を興奮せり。彼等は基督教に改宗せられ、プレスター・ジョンと名づくる僧王の下に存せりとの傳説生せり。而して、あるネストール僧等によりて將來されたる報告によれば、ウング汗なる蒙古の王公は、基督教を採用したりといふ。その名シリア語にて、ジョン・ゼ・コヘン（即ち僧の義）と響きければ、小説傳説中のプレスター・ジョンと同一視せられたるがために、この基督教國を發見せんとすることは、この長年月間の東方旅行の目的の一となりき。然もその後かゝる基督教國はアビシニアに存在せしこと明になれり。トレミーの誤見がアラビア人に襲用せられて、アビシニアは印度よりも遠方に位置するものと思はれ、プレスター・ジョンの國をアビシニアと一致せしめたり。而して吾人はこの謬見が、いかに地理學上の發見の進歩を助けしかを見んとす。

要するにこれら中世代の旅行の地理學上の知識に、貢献したる全量は、主として世界地圖上に日本群島及支那内地の廣大なる面積の增大を成せるにあり。

第五章　道路と商業

征服は道路に依る＝道路とは何ぞ＝市街の位置＝陸路＝水路と市邑との關係＝商業的交際＝ローマ市の位置と發展＝ローマの道路の「建設」＝隊商路＝十字軍後歐人生活の奢侈＝パレットの記述＝東洋品の西漸＝アレキサンドリア港の狀況＝イタリアの貿易港＝ベネチア港、

吾人は、今や古代及中世における吾人研鑽の歩をすゝめて、第十五、十六世紀大發見の時期に到れり。又吾人は、已にこの長き年代の間何人が地球を研究せしか、又如何にして學びしかの梗概をも指示したり。然して、なほいふべきは彼等はいかなる手段によりて、その知識を得たるか

征服は道路により道路には商業が導く

何故にそを究求せしかの事なり。この問に答へんには、一部は征服の進行によるといひ得べし。然れども、人は征服の爲めにのみ征服するものにあらず、戰爭における物質的利益をも考慮するなり。人々その發見のために戰鬪を行ふ時には、大約その征服せられんとする國の土人が既に開きたる道路によりて進行す。而して、屢その勝利を得たる時に、彼等は特種交通の方法を建てゝ、そを鞏固ならしむ。されば、吾人は新航路新大陸發見の近世代に移る前に、極めて簡單に、古代及中世代の世界の道路と、それらの道路が主として使用せられたる商業とに付て觀察せんとするなり。

道路とは何か

道路とは、吾人の目的によりて解すれば、二の市街間を連絡する最も便利なる手段なり、と定義し得べし。これに依れば、道路が作らるゝ前に、已に市街の存在なかるべからず。而して特別なる道路に付て、十分の調査なをさんには、まづ何故に、人は或る一定の地點にその住所を定めて集合するかを調査することより始むるを必要とす。よつて今少しくそ

を説かんに、最初人類の集合は、主として共に防禦の目的によりて成る。最古の市街はアテネやエルサレムの如く、最も防禦に便宜なる自然の形勝の地に成立せり。次に宗教的動機は、已に古代に於てその影響をなせり。この時は市街は寺院、僧院等の周圍に成立すべし。而して次には、人々の近付き易く、貨物交換のために會合するに最も便宜なる場所を選びて、市街を形成す、即ち河流に沿へるウェストミンスターの如く、或は形勝便利のナポリの如く、或はその地方の中心地たるニュルムベルヒ又はウィーンの如し。河流及海岸に沿へる市邑に於ては、最便最良の交通機關は船舶とす。然れども一旦かゝる市邑の成立したる上は、又陸路相互に連絡を保つ必要を生じ來り、その道路は、主として土地の形勢によりて決せらるゝものなり、即ち山脈蜿蜒せる處には迂路作らるべし。例へばピレネーの迂路の如し。河流が防遏せる處には、淺瀬が求められざるべからず。而して新市街は通行の最も便宜なる處に立てられざるべからず。二地の間に道路の一たび開設せられたる時は、たとひそれよりは一

市街の位置

Westminster
Naples
Nuremberg
Wien

陸路

層よき道路が後日に至りて發見せらるゝも、人間の保守的天性は、よく前者を繼續するものなり。

水路の勢力は、古代に於て市街の位置を決する首要物たり。アーチャンゼル、リガ、ベネチア、ゼノア、ナポリ、チュニス、バスソラ及カルカッタの如き灣の一角にある市街は、自然にその灣中の貿易の中心地點たるなり。而して河流に於て適當なる地點は、ロンドンの如く潮汐の影響の及ぶ終點にあることとなり、或は河流の大彎曲せる處か、又は支流の本流に會合する地點は、市邑の發達に適す。コブレンツ、カルツームの如し。又半島の兩側にも常に主要の市邑の發達を見る。ハムブルグとリュベック、ベネチアとゼノアの如し。海軍用の目的には半島の尖端に位置するこそ望ましけれ。シェルブール、セバストポール或はジブラルタルの如く、海の兩肢節を監視する必要あればなりされば半島の道路は頸部と尖端部とを連絡せざるべからず。

水路に關する位置

Archangel
Riga
Tunis
Bassorah

Coblentz
Khartoum
Hamburg
Lubeck

Cherbourg
Sebastopol

初は、一市街の住民は、自己以外の住民を以て皆敵と見做しゝも、時を

商業的交際

Mesopotamia

經るに從ひて、隣人との間に互の有無を交換することの便利を感じ來り、こゝに貿易の道開かるゝに至り、その市場は勢ひ中立地とならざるべからず。これ一時は、互の怨恨が共通的利益の爲に生ずべければなり。而して又二州の境界線における地方は貨物交換の場所に選定せられ、遂にそこに新市街の發達するに至る。商業的交際の發達に從ひ、古昔の高地における城邑の近付き難く不便なるを感じ、谿谷や河邊における居住の便宜なるを知るに至るものなり。概して道路は自然の行路として、谷又は平地を選べばなり。然れども軍事上の目的よりしては、時として谿谷の道路より殊更離隔する必要あり。已に知れる如くローマの道路はこれら商業的交通の要求に毫も顧るところなかりき。

既に述べたるが如く、古代國民間の交通は、海においてはフェニキア人その魁たりき、而して地中海沿岸到處に、商業のため會社又は中立地を建設せり。ギリシア人は、直に多島海及黑海に於てこの例に倣ひたり。聖書によれば、古代隊商の道路はエジプト、シリア及メソポタミアの間に

ローマ市の位置と發展

ローマの道路

building

開かれ、後極東にまで延びたり。ヨーロッパにて大道路の建設者はローマ人なり。これローマは、古代世界の中心點に居りしが爲なり。即ち初はイタリアに於て、後には地中海の全沿岸に於ての中心たることは、その市街成立の上に必要なる殆んどすべての利益を保有し居りたればなり。即ちローマは海に近く且つ河の屈曲部にあり、自然の小丘は市街の防禦を容易ならしむ。而してそのラテン平原の中央に位することは、ラテン貿易者の自然的根據地たらしめたり。故にローマ人は、直にその中心地點を利用して、イタリアの殘部を近付けんとしてまづ堅固なる大道の建設を創めたり。これらの道路の殘墟は今なほ見るを得べし。「建設！」(ビルディング)いかにこゝに用ふるに適する詞なるよ。實にローマの道路は地下深く掘りて、そこより地平以上まで築き上げたる幅廣き壁なり。いかなる運搬もこの地行工事を破壞する能はず。されば今日歐洲中を求めて二千年以前の建設物は之をローマの道路に求むるの外なきなり。ローマ帝國の膨脹するに從ひ、それらの道路は、その版圖内の君主等が、その占領

隊商路

物を保存するに適する一手段なりき。そはこの道路の各方面より集中湊合し來る中心點に、軍兵を駐在せしめて、國内何れの方向をも、速かに攻擊威壓するに適當ならしめたればなり。停車場は自らこれら道路に沿うて設けられ、今日歐洲の主なる公道は、この古ローマの道路の筋に從へるなり。近代の文明は、概してこの網の如く建設せられたる道路の賜と謂ふべし。實に吾人は、明かにかゝる道路の存在せざりし國民の文明は、既に存在したる國と大に異るあるを見るなり。現にロシア及ハンガリーが、最良の交通系を有する歐洲西部と、異るあるを見て知るべし。已に示せる如く、古代ローマの道路の寫圖は實にトレミーの大事業として總括せられたる地理學上の知識の骨骼たり。

地理學的知識の發達になほ主要なるものは、アジアの隊商大路なり。吾人はこれにつきて觀察する所あらんとす。アジアは世界の屋脊と稱せらるゝパミール高原を有する高臺的の大陸なり。パミール高原の東方には、殆んど緯線に並行して、四大山脈連亙す。南よりいへば、ヒマラヤ、

海路

Kashmir

コンロン、天山及最北のアルタイとす。ヒマラヤとコンロンとの間は西藏の大高原にして、西端はカシミルに連る。コンロンと天山との間には蒙古ゴビの大高原ありて、ヤルカンド、及カシガルより東に走る。又天山とアルタイとの間にはキルギス曠野の一部あり。かくしてこゝに明かに西部アジアと東部アジアとの間に二條の道路の通せるを見ん。一はカシガル及ボカラを連絡するものにして、コンロン、天山間を通ずるもの、他の一はアルタイの南を通じ、バルカシ、アラル、及裏海の北を走りてロシアの南部に出づるもの是なり。前者はバスソラ或はオルムッに出で、こゝより海又は陸にてアラビヤを廻り、アレキサンドリアに達す。後者はコンスタンチノポリスを經て歐羅巴に達する長路なり。又南方アジアと歐洲間の交通は主として海により、印度海岸にそひ、季節風を利用して、セーロンよりアデンに至り、紅海に入るなり。さて蒙古北支那と西歐との交通が上記の如しとせば、自然に、アレキサンドリア、バスソラ及オルムッは東方貿易の中心となるなり。中世代の旅行者ポロを初め

十字軍後歐洲人生活の東方化せること

Mosul

として、その他が北支那（カタイ）に至りしは多く後者の道路に依りき。而してポロの歸國旅行によりて、また支那へは海路到達し能ふことをも知得せり。實に中世代の末期、蒙古大帝國の分裂して、中アジアの陸路不安の時は、その東方交通はアレキサンドリアを經る海路に依りしなり。

十字軍後の歐洲が、東方諸國と接觸したるために、いかに生活上に奢侈を生じたるかを見るは、また吾人當來の研究に必要の事とす。支那の絹、印度のキャラコ及モスリンの如きは、當時歐洲にては機織せられざりき。帝王貴族の衣冠を飾るに用ふる綠玉、紅玉、鋼玉及金剛石の如き玉類は、東方ことに印度より輸入し、中世代の醫學はアラビア及印度等より多くの藥品の輸入をなしたるアラビア人より發達せり。歐洲ローマ教徒の祭壇に焚く香も、商人がその材料を東方諸國より買入れたるもの、手藝家も最良材料は之を東邦の商人より求む。例へばヴニス用のセルラックの如き、美術家繪具用の乳香の如き、又西人が營養上より生ずる臭氣を消すために東方の麝香を輸入せり。以上の外健康に必要なる加味

Hakluyt
"English voyages and Navigations"
William Barrett

貿易品

物又は冬期鹽漬食物を鹽梅する爲に用ふる藥味、四旬齋の鹽魚等は、アジア諸島に產する種類を用ふ。ハクリュートの大著書「イングリッシ・ヴォイエージス・アンド・ナヴィゲーションス」の第二卷中にアレッポーの商人ウィリアムバレットが西紀千五百八十四年に東方貿易の主なる市場は何處にして、何を交易するかを記したるものを表示せり。今その中より少許を摘拔して讀者に示すも、興味あることならんか。

丁子＝モリュカ、タレナテ、アムボイナよりジャワの道を經て、
肉豆蔻＝バンダ、ジャワ、マラッカより、
普通胡椒＝マラバルより、
肉桂＝セイロンより、
スピックナルド＝インド及ラホールより、
蓋＝カムベイ灣內スラートより、
東邦の珊瑚＝マラバルより、
硇砂＝シンヂ及カムベーより、

樟腦＝ボルネヲより、
沒藥＝アラビアフェリックスより
硼砂＝カムベー及ラホールより、
明礬＝支那及コンスタンチノポリスより、
麝香（ホルバナクス）＝ペルシアより。
蘆薈＝交趾支那及マラッカより、
セルラック＝ペグ及バラグェートより、
ハラタケ＝アレマンニアより、
プデリウム＝アラビアフェリックスより、
羅望子（タマリンド）＝バスゾラより、
サフラン＝バスソラ及ペルシアより、
番木鼈（マチン）＝マラバルより、
龍血樹＝ソコトラより、
麝香（ムスク）＝支那を經て韃靼より、

インヂゴ＝シンド及カムベーより、
絹＝支那より、
海狸膏＝アルマニアより、
乳香＝シオより
阿片＝ペグ及カムベーより、
漆＝アラビア及アレキサンドリアより、
旃那＝メッカより、
アラビアゴム＝ジャッファより、
阿片丁幾＝キプラス及カンヂアより、
瑠璃＝ペルシアより、
黃金色顏料＝トルコの各地方より、

以上は實にバレットの表よりの少數の摘記に過ぎずと雖、なほ生活の必需品又は奢侈品の大多數が、中世代に於てアジアより歐洲に輸入せられたる狀況を知るに足らん、此等物品の貿易に從事せるはアラビア

人にして、歐洲にては金、銀貨の外交易に使用せざりければ、西より東へ貴金屬の斷えず流出するにより、サルタン或はカリフをしてソロモン大王よりも一層富み且榮えしめたり。この時に當り、アレキサンドリアは實に貿易の中心となり、歐洲多數の國民は、この港にて東方の物品を求むる商人の利益を安全に保護するために、この市街に會社を設けたり。猶太人ッデラのベンジャミンは西紀一千百七十二年頃この地に來りて左の如き記事を殘せり、

Tudela Benjamin

當時のアレキサンドリア

アレキサンドリアは商業甚だ隆盛にして、各國民に通じて優越なる市場たり。あらゆる基督教國民はこゝに膺集す。ヴァレンシア、タスカニ、ロムバルヂ、アブリア、アマルフィ、シチリア、ラグヴィア、カタロニア、イスパニア、ルージョン、ドイッ、ザクセン、デンマルク、イギリス、フランダルス、バイナムルト、ノルマンヂ、フランス、ポアッ、アンジュー、ブルグンヂー、メデアナ、プロバンス、ゼノア、ピサ、ガスコニ、アラゴン及ナヴァリ等より來る。又西方よりは、アンダルシア、アルガーヴ、アフリカ及アラビアの回教徒、並に印度、サビラ、アビシニア、ヌビア、イーメン、メンポタミア及シリア、其他ギリシア人、トルコ人等に出會す。印度よりは各種の香料を輸入して、これを基督教國の商人に賣渡す。

市街は奔馳忙速に滿ち、各國民は各々その旅舍を有せり。云々

イタリアの貿易港

これら諸國民中にてイタリア人はアレキサンドリアに達するには、最小最短の航路にて濟むべければ、東方貿易は實際、第十三世紀末までは、イタリア人の手中にありき。イタリアにては初めアマルフィ及ピサが東方貿易の主港なりき。航海用磁石の完成を見たるもこのアマルフィに於てなりき。程なく、イタリア半島頸部の兩側に位置せるゼノア及ヴェネチアの二海港は、その自然の位置の利あるために、その隆盛前二者に優れり。而してこのヴェネチア、ゼノアの二港は永くこの貿易の特權につきて互に競爭せしが、ヴェネチアはゼノアに比してアレキサンドリアに至るには、その航路直截にして短近なれば、ゼノアは遂にコンスタンチノポリス及支那より北方陸路の貿易を以て自から滿足するに至れり。こ

ヴェネチア

Dalmatia
Morea
Crete, (Candia)
Cyprus

ヽに於て香料、寶玉、薫物及東洋の織物類は、ヴェネチアより北の方アウグスブルグ及ニュルムベルヒを經て、アンヴェールス、ブルージ及ハンザ諸市に轉送せられ、これら諸市府よりは漁業、機織業にて得たる金を取り歸るなり。イギリス人は東方の藥味及薫物にてその口鼻を娛ましめんとて、羊毛をイタリアに送りけり。

ヴェネチアの富と地位とは、全く有利なる東洋貿易專賣權を有するに歸すべし。第十五世紀に至る間にイタリアは、ポー河下流の谿谷にそへる地方、ダルマチア地方、モレア半島の大部及カンヂア島にまでその領土を擴張し、遂に西紀千四百八十九年までに、キプロス島の所有權を得、かくてアレッポ或はアレキサンドリアより、アドリア海北方に至る通路中主要なる一切の碇繫場を得たり。然しながら今やヴェネチアの繁昌の最高點に達せし時しも、驚くべき大敵は前面にあらはれたり、この敵や殆んど第十五世紀間東洋貿易の競爭に、小說的方法を用意したるものなりき。この方法より近世地理學上發見の一大期は開始せらるべし。

第六章　東方印度にまで、ポルトガル道、ヘンリ王子とヴァスコ・デ・ガマ

イベリア半島

Moor

イベリア半島＝ヘンリ太子＝太子の設計＝當時アフリカに對する觀念＝先決問題＝アフリカ西岸を南下す＝太子の薨去＝その死後の遠征＝コンゴー河口＝東方基督教國に遣はせる使者＝陸路よりせしもの＝海路に依りしもの(喜望峯)＝バスコ・デ・ガマ＝初めて印度に達す＝葡國に對する共同の敵＝カブラル＝アルメイダ＝アルブケルケ＝葡國の殖民策＝葡國船我國に來る＝記憶すべき一五二一年＝葡西領有地の限界線

イベリア半島の住民は、第十五世紀までは、七百十一年頃より殆んど全半島に蔓延したる回教徒を驅逐することに精力を費せりき。ムーアがイスパニアにその跡を絕ちしは、千四百九十二年なりとす。(この年は歷史上にも地理上にも共に一新時期を劃する年なり。)半島の西側に位

Juan
Joao
Aljubarrota

Ceuta
Agincourt

ヘンリ太子

Sagres
Astrolabe

するポルトガルはイスパニアよりも約二百年前にアラビア人の災厄を解脱したるも、隣國カスチール王國より獨立を保持することはなかなか難かりき。葡國を征服せんとするカスチール王ジュアンの企圖は、ポルトガル王子ジョアオの爲に拒斥せられ、ジョアオは千三百八十五年に葡王となり、アルジュバロタの戰勝ちてカスチール側の災厄を免れたり。この王ジョアオはジョン・オブ・ガウントの娘フィリッパと婚し、その第三子をヘンリといふ。ヘンリは實にこの地球に關する先人の意見に革命を起すべき使命を受け來りしものゝ如し。彼はジブラルタル對岸のセウタを獲んがために、千四百十五年アジンコートの役に勇氣をあらはし、戰勝ちてムーアの海岸に初めて葡國旗を掲げたり。かくてムーア人との觸接はヘンリ太子をしてインドの回教國内にも、こゝと同じき城邑を建てんとの念を起さしめたり。而してヘンリは千四百十八年より當時に知られたる道路以外未知の他の道路によりて印度に達し能ふべしと考慮を費し、その目的のために歐羅巴大陸の最西端なるザグレスの岩

太子の設備

Mestre Jacme

當時アフリカに對する感念

岬に、己れの住所を作れり。

茲にヘンリは觀象臺を建て、理論及實地の航夫を養成するための學校を設立し、又諸所より天文學者、製圖師及熟練なる舟夫を召集し、探檢用として堅固壯大なる船舶を作れり。又アストロレーブ(近世六分儀の始め)を完成して緯度の計算を正しからしめ、各船舶に悉く羅針盤を備へて、航路は全くその指導に依らしめ、マジョルカ(十四世紀頃は實地地圖製作の中心たりし處)より航海の技術、地圖及その器械の製作に熟練せるメスタ・ジェクムを招致し、その補助によりて、アフリカ沿岸をめぐりてインドに達する海路を發見することの可能なる問題を學べり。

吾人は既にトレミーが、愼重なる科學的研究を以てして、なほ南方におけるアフリカの廣袤の不明のまゝに遺されたるを見たり。エラトステネス及幾多のローマの地理學者は、トレミーに倣ひても、これを不明におくに滿足せず、大膽にもアフリカの海岸は、アフリカの東角丁度紅海の南より今モロッコの附近北西海岸までは半圓の觀界をなすと臆斷

せり。若しこれを事實とせば、この觀界の海岸にそひての航路は地中海及紅海を經るの航路よりも短小なるべく、又勿論スエズの地峽にて一旦荷物を陸揚するの不便もなかるべし。斯の如くアフリカをその眞の面積よりも餘程縮小して考へたる著者等は、アフリカ大陸の南に今一の他の大陸あるを想定し、この大陸は熱帶に横り、全く住民なきものとなせり。

當時ヘンリの時代までにアフリカ北西岸は、ボヤドル岬まで知られたり。さきにノルマンの舟夫等が、既にノン岬をこえて進めることは瞭にして、これ以南には何も存在せずと想像したる故に、かくは名づけたるならん。さればまづヘンリの決定すべき問題は、アフリカの海岸は、このボヤドル岬より急に東方に曲れるか、又は以南に古人の想像したる熱帶無住人の大陸が存在するかを知ることなりき。ヘンリはこを決するために年々遠征隊を派出し、アフリカの西北岸を下らしめ、一隊は一隊より遠く南下せり。この行動の殆んど初めの効は千四百二十年にへ

先決問題

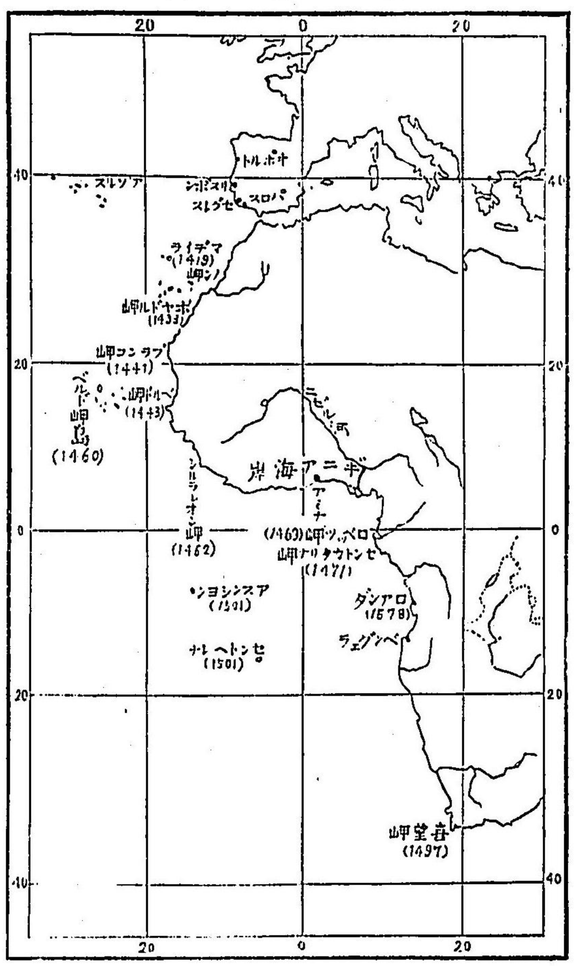
Joao Gonsalvez Zarco
Porto Santo
C. Branco

Bojador
Non (Nun)

マデーラ發見
ポルトサント

ンリ家扈從の一人なるジョアオ・ゴンサルベツ・ツアルコがマデーラ島を發見(或は再發見)したることなり。この發見と隣島ポルト・サントを得て當分滿足せり。このサント島は發見後兎を放ちしために荒寥となれり。

第五圖



葡人發見進行圖

C.Verde
Nuno Tristao

上ギネア海岸

Alvez Cadamosto
Giego Gomez

太子の死去

マデーラ島には、ブルグンドより葡萄を移植して、今日は該島主産物となれり。千四百三十五年にボヤドール岬を過ぎ、千四百四十一年にブランコ岬を發見し、後二年ベルデ岬に達し、ヌノ・トリスタオは又之を過ぎて、海岸が東方に曲れることを初めて記せり。この頃よりヘンリ太子のもの等は、この海岸に沿へる土人と親しくなり、土人の約千人は葡國貴族中にページ及從者として伴はれたり。

千四百五十五年アルベッ・カダモストといふヴェネチア人は、商賈のためになほ、南方に航せり。ヘンリ太子はその資本を供給して好結果を得ば、その利の半を分たんと約せしが、彼はガムビア河口に達するや、大にその土人の敵意を受けたり。然れどもこれ歐洲の航海者が、北極星を見失ひて更に南方交點に輝ける一星座を發見したる初なり。ヘンリ太子の存生中になせる最後の發見は千四百六十年彼の一船長デエゴ・ゴメッのケープ・ベルデ諸島の發見なりとす。千四百六十年は實に太子薨去の年なり。この年々の發見は一々太子の製圖師によりて連結せられ、太

Fernand de Poo
Pedro d,Escobar

Framauro

子の死する前葡王は、この發見の委細を、マップ・ムンデに記載する樣フラ・マウロといふ僧侶のもとに報知せり。フラ・マウロの地圖今なほ其斷片を存す、上に圖するもの即是なり。

第六圖

フラ・マウロの地圖

ヘンリ太子の企劃せるアフリカ沿岸調査の衝動は、その死後もなほ繼續せり。千四百七十一年フェルナンド・ド・プーが今もなほその名を存する島嶼を發見し、同年ペドロ・デスコバーは赤道を横過せり。ポルトガルの研究者が上陸せし所

Bartholomeo Diaz
Pedro di Covilham
Atlfonso de Payba

Martin Beheim

コンゴー河口

Padmos
Diego Cam
Rio do Padrao
Zaire

には、何處にもあれ、その來れる印を殘せり。第一には十字架を立て、次にはヘンリ太子の題句 Talent de bien faire を木に彫り、最後に石柱を立てゝその上に十字架をのせ、王の腕とその名とを彫刻せり。この石柱はパドラオスと稱せらる。千四百八十四年にはヂエゴ・カムはパドラオ河の河口に、この石柱の一を建設せり。この河こそ土人はゼイアと呼べども、今はコンゴー河として知らるゝものなれ。ヂエゴ・カムは、この遠征にはニュルンベルヒのマルチン・ベハイムと共なりき。ベハイムの地球儀は古代の觀察の最終の記錄として、地理學史上有名のものなり。

かゝるほどに土人の王の使節にてポルトガルの朝廷に來れるものあり。曰く從來發見せられたる諸國の遙か東方に一大基督教王國ありと、これ葡人をしてプレスター・ジョンの傳說を想起せしめ、この王國に達せしめんとて海陸兩道より使を發せしめたるものなり。海よりはバルトロメオ・ヂアヅの指揮の下に二隻の船を送り、陸よりはその翌年に、アラビア人に知己を有する、ペドロ・デ・コビルハムとアルフォンソ・デ・ペイ

陸路たどりしもの

The Island of The moon
Cairo
Abraham of Beja
Joseph of Lamejo

コビルハム

Cabo Tormenteso
Cabo de Boa Esperanza
(Cape of Good hope)

海路によりしもの

バとの二人を遣はせり。コビルハムは、アデンに達し、こゝより印度のカリカットに向ひて出帆せり。これ葡人にて印度洋を走りたる第一者たり。後ソファラに歸り、月島(今マダガスカルといふ)に關する報告を得てカイロに歸着するや、彼は葡王ジョンよりの使命たる猶太人アブラハム・オブ・ベヤ及ジョセフ・オブ・ラメジョの二人に逢へり、コビルハムは彼等に向ひて、船はギネアの海岸を南下し正にアフリカの南端に達するならん。而して東方大洋に到らん時、ソファラ及月島を訪ふを忘るべからずと告げたり。此後コビルハムは紅海に歸り、アビシニアに關する最初の觀念を歐人に傳へたり。

プレスター・ジョンを求めんとして陸路をたどりしものは斯の如し。これと共に海路をたどりしものも幾分の希望ありとの報告を齎らせり。ヂアヅは、今日喜望峰と稱する岬の邊に達し、その岬にカボ・トルメントソ(嵐の岬の意)と命せり。然れども葡王ジョンは、このヂアヅの航海は、ヘンリ太子が七十年前より引つゞき探檢せし處の希望の滿たさるべき祥

喜望峰

Vasco da Gama　Emmanuel　Columbus

兆なりと知りて、カボ・デ・ボア・エスペランザ(喜望岬)なる吉祥の名を命じたり。

或る理由の下に、他の遠征軍を派遣してヘンリ太子の企圖の完成を實行するための計劃は殆ど十年間なされざる中に、コロンブスは千四百九十二年にイスパニアのローマ教王朝に仕へて、その補助により、インドに達する西方航路を發見せんとせり。これは自然に、ヘンリ太子がかねて想像したるよりは遙に遠く且つ妨碍多き航路なりけるアフリカ海岸に沿ひて印度に達せんとするの企圖に中止を與へたり。コロンブスの第一回發見後三年に葡王ジョンは崩じ、その繼嗣エマニュエルは彼の治世三年間はインドに達せんとする傳奇的葡人の方法を採用せざりき。而してコロムブスの第二回の航海によりて、彼の方法にて印度に達せんことは、彼が想像したるよりも大に困難なること明かとなり、千四百九十六年に第二回航海より彼の歸國せし翌年、エマニュエル王はさらば今一たび舊法によりて印度に至らしめんと決心し、朝臣中の一紳

バスコ・デ・ガマ

Mosambique
Quiloa
Mombasa
Melinda

喜望峰の廻航

士バスコ・デ・ガマに使命を傳へ、三隻の船に六十人を乘込ましめ、東方航路を完成せしめんとせり。當時既に不知の海洋を航するコロムブスの大膽なる冒險は他にも感染しければ、ガマはこゝにアフリカの西海岸に沿うて漸次に南下することをせず、直ちにベルデ島に向ひて漕ぎ、それよりセントヘレナ灣(喜望峰のやゝ北にあたる)に達するまで大洋を下れり。

ガマは一時は夏期絶えず吹く強き南東風に妨げられ、喜望峰の廻航難かりしが、つとめて漸くに之を過ぎ、遂にアフリカ東岸に沿ひて航海を始むる好運に至り、コビルハム及プレスター・ジョンの王廷につきて、尋ぬる便宜を得る處毎に、舟夫を上陸せしめたり。然るに東海岸到る處回教狂なるムーア人は、上陸者の基督教徒なりと知るや否や、我等を征討に來れるかと思ひひがみ、印度に至る航路の水先案内を雇はんとするもなか〳〵承諾せざりき。モザムビクにても、キロアにても、又モムバサにても同樣拒絶せられ、メリンダに至りて漸く食料と水先案内とを得

Priuli

印度に逆す

Guzerat
Melemo Cana

たりき。水先案内に雇はれしものは、印度グーゼラト生れにて、名をメレモ・カナと呼び、印度カリカトへの航路を熟知するものなりければ、この案内により、ガマの艦隊は廿三日を費してメリンダよりカリカトに達せり。こゝにありける海王はこの基督教新來者に對して嫌忌の念を起し、回教貿易者等も葡人の來航は己れらの東洋貿易の專權を奪はんとする危險の敵手なりとし、ガマ一行を海賊と思へり。然れどもガマは堅忍の行爲によりて、この商敵の謀計を避け、遂に海王をして葡王と好んで同盟するまでに誘ひ入れたり。こゝにガマは滿足して故國に向ひ拔錨し、アフリカ東岸にて最も親きメリンダに寄航して千四百九十九年九月にリスボンに歸着せり。この行殆ど二年を費せり。エマニュエル王は大に喜びガマを印度提督となせり。

バスコ・デ・ガマの航海の眞意は直に從來東洋商業の特權を握れるヴェネチア人、及埃及王等に了解せられたり。ヴェネチアの年代記作者プリウリはかく報せり「この報告(葡人東洋航路發見の報告)のヴェネチアに達するや、全市大に感激し、昏迷したり。學者は今日まで達せる最急の報告なりといへり。」と慥かにこれヴェネチア國の沒落を豫言したり、埃及の王も同じく感奮せり、如何となれば彼の富の大原因は、輸出貨物に課する十ペルセントと、彼の領土に輸入する貨物に課する五ペルセントとの課稅にあればなり。從來ヴェネチア、埃及間には、商業上の利害を異にする故紛糾たえざりしが、今や兩者に共同の、觀ある敵あらはれたれば、埃及王は新商業者拒斥の共同運動をなさんことをヴェネチアに申込めり。然れども埃及には今まで海軍なく又造船に適する材木もなければ、こゝに止むを得ずヴェネチア人は材木をカイロに廻し、更に駱駝を用ひてスエズに轉送し、こゝに小艦隊を作りて、葡人の第二回印度航行の時に攻擊せんと準備したり。

葡國に對する共同の敵

Pedro Alvarez Cabral

カブラール

ポルトガル人はバス・コ・デ・ガマの航路につぎて、今一つの計劃を立たり。即ち千五百年に葡王はペドロ・アルバレッ・カブラルの指揮の下に印度洋中の回教國を征服し改宗せしむるために、船十三隻を艤し、一萬二

Santa Cruz
Pinzon

Ascension
Seychelles
Socotra
Tristan da Cunha

maldives

千の軍兵と、フランシスカン派の僧とを便乘せしめたり。彼はガマより、は一きは西方の航路を取りて南緯十七度に達せし時に一地を發見して葡領となし、サンタ・クルスと名づけたり。この時彼が建てたる十字架は、今日なほブラジル國に保存せりといへば、カブラルは當時今日のブラジルと呼ばるゝ國に寄りたるや明なり。コロンブスの同伴者の一人ピンゾンは、既にカブラル以前にブラジルの海岸に立寄れることありしは確實なれば、コロンブス以外に葡人もまた西世界を發見したるには相違なきなり。カブラルは多くの財貨を舶載し歸れりといへども、船と船員との多くを失ひければ、決して十分の成功とはいはれず。次に千五百二年再びバス・コ・デ・ガマは大艦隊を率ゐて派遣せられたるが、彼はカリカトの海王を從へ、貴重の財寶を奪へり。是等の航海に伴ひて葡國の航海者はセントヘレナ、アセンション、シーセリス、ソコトラ、トリスタン・ダ・クンハ、マルダイヴス及マダガスカル等を發見したりき。

もとヴェネチア人は殖民地の各所に代理ドーヂを派遣してその地の

葡の殖民策

Vice-Doge Almeida

Alfonso de Albuquerque
アルフォンソ・デ・アルブケルケ

Selim I.

貿易の奬勵と朝貢の收納とに力めしめたりしが、その例に倣ひて、葡王エマニエルは東洋に總督を置きて、東洋貿易の事務を監せしめたり。而して千五百年にアルメイダは總督の印綬を帶びて印度に流せり。彼は後に錫蘭に至りて、その地の肉桂貿易の專賣權を得たり。

インドにおける葡の總督中最も偉大なりしをアルソンソ・デ・アルブケルケとす。彼は印度本土にありて、今なほ葡領たるゴアの要港を得、又東洋貿易の中心地點の一たるオルムッをも得たり。而してモリュッカ諸島即香料諸島の獲得は一層重要の事にてありき。この諸島は千五百十一年に發見したる者にて、千五百二十一年には香料島全土を得、全く葡國一手にて香料の貿易を行ふに至れり。從て歐洲市場にて香料の價格は俄に騰貴となり、十五世紀末に一ポンド殆ど十七シリングなりし胡椒は千五百廿一年及其以後には平均二十五シリングとなれり。葡人がこの專權を掌握するに至りし他の理由の一は、千五百二十一年ゼリーム一世の下にトルコ人が埃及を占領したるにより、アレキサンドリアを經

る舊道に依る貿易の路杜塞せられしによるなり。かくて葡人はモリュッカ島より容易に支那及我國に至れり。そも〳〵我國に至りし最初の歐洲人は葡人たるには相違なきも、その年月と人名とは今日確と明かならず。我國の記錄に殘れる最も古きは、後奈良天皇享祿三年(西紀一五三〇)葡の商船豐後に來れるを記し、又天文十年(西紀一五四一)前後に葡船の我南島に來しこと數々見ゆ。而して南浦文集中の鐵炮記には天文十二年(西紀一五四三)西南蠻のもの種子ヶ島に着し始めて鐵炮を傳へたりとし、且その乘込外人として牟良叔舍、喜利志多陀孟太二名の名を記せり。これを歐洲の記錄に見るに、西紀千五百四十一年アントニオ・デ・モタ、フランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ペイゾートの三人が鹿兒島に至れることを記し、又西紀千五百四十五年にはフェルナン・メンデッ・ピント等三人來航の事を記せども、前者と同じきや、はた異れる組なりや明からならず。こゝにまたピントの紀行文なるものあり、彼自から記して日本に來れること前後三回、豐後にも種子ヶ島にも來り鐵炮を傳へたりと

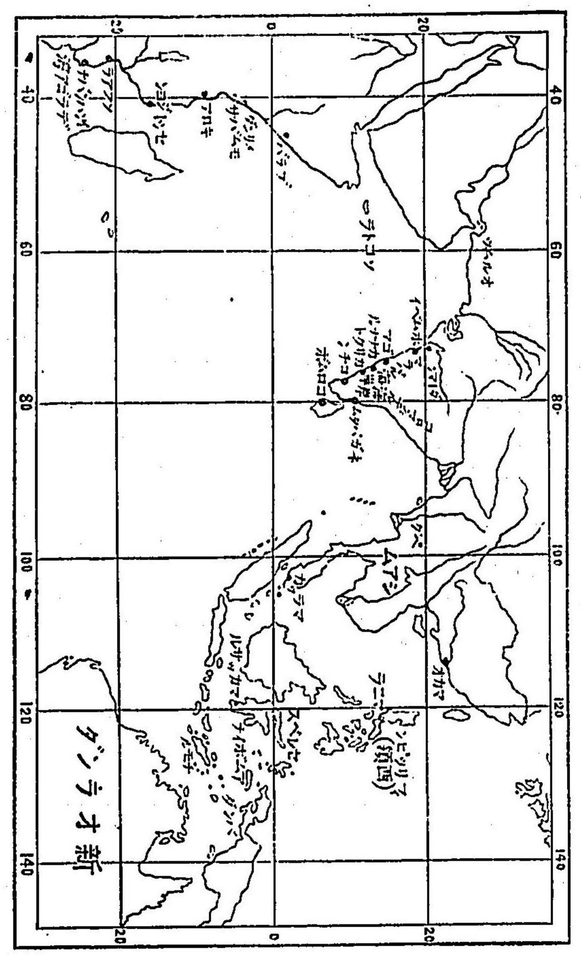
葡船我國に來る

Antonio de Mota
Francisco Zeimoto
Antonio Peixote,
Fernan Mendez Pinto

あり。依て考ふるに葡人の始めて我國に來れるは、その年時明かならざれども、天文十年前後なることは確なり。天文十八年(西紀一五四九)に有名なる宣教師ザヴィエルは來りしなり。

Xavier

第七圖



葡領印度の圖

Magellan
Philppin

記憶すべき千五百廿一年

葡西發見地限界線

葡人が香料島占取の競爭に勝ちて、その眞に確得せし年に、マゼランは世界一週の途次、この香料島を去る數百哩以内なるフィリッピン島に達せり。又その乘れるヴィクトリア號は、勢よくこの諸島附近を帆走せり。これ實に千五百二十一年にして、世界發見史上記憶すべき事なりとす。イスパニアとポルトガルとの兩國が、前者は西方に、後者は東方に航して共に印度に達せんと企てたるが、各〻その目標點に達したるもこの年なり。又香料島が葡の手に入りて、商業上埃及を塞迫したるもこの年なり。終りにこの年はヘンリ航海太子の事業を保護して完成せしめたる葡王エマニュエルの崩御の年なりけり。

新航路新土地の發見の唱へらるゝや、ローマ法王は葡西兩國發見の境界を限定するを宣告し、千四百九十三年五月四日付にて、法王アレキサンドル六世は、アゾールス島及ケーブ・ベルデ島の西方約百リーグを過ぐる線を限界として、その西方發見地をイスパニアに、東方發見諸地をポルトガルに屬せしむることを許せり。當時不完全なる地理學の知識にては、アゾールスとベルデ島とは同經線上に位置せるものと想像せしなり。翌年葡政府は校訂を請求して、境界線は遂に西方二百七十リーグ即ベルデ島の西千百十哩の點に變更せられたり。然れどもこれ地球の半面における境界線たるも、一度香料島の發見せらるゝやその境界線を地球の他の半面に引のばして如何なる地點に相接續すべきか、この香料島は西、葡何れの勢力圏内に容るべきかにつき議論生せり。この群島は實に兩國境界線の眞の附近にありたるは一奇なり。兩國委員はバダヨスに會して、この問題を決せんとせしが能はざりき。千五百二十九年チャールス五世は、その義弟葡王にこの島を渡せり。こゝにフィリッピンがイスパニアに屬する間は、葡王はいかなる權利をもモリュッカ島に執行し得べしとせり。これより印度洋は第十六世紀間は商業上葡國の湖水となれり、千五百八十年には西葡兩國の王位は、フィリップ二世に一統せられたれば、葡人の印度專賣權も僅に五十年を維持したるのみ。

Badajos

第七章　西方より印度にまで、イスパニア道、コロムブスとマゼルラン、

西方道の觀念

西方道の觀念＝コロムブス＝トスカネリの說＝コロムブスの材料收集＝コロムブス葡王に請ふ＝葡政府の奸策＝英王に請ふ＝一たび西王に請ふ＝二たび西王に請ふ＝イスパニアの好意＝コロムブスの出發＝サンサルバドル島＝第一回歸航＝その後の航海＝批評＝コロムブス以後の西方航海＝アメリゴ・ベスプッチ＝アメリカの名稱＝マゼルランの世界一周＝周航の効果＝西王の喜悅＝約說

葡人がある確執を以てすら印度に達する東洋航路を發見せんとして殆ど一世紀間を費せし程遲々たりしにも係らず、こゝに大膽にして而かも單純なる想像は、イタリア國ゼノアの一舟夫の胸に起れり。そは西方に航するもなほ葡人と同じ目的を遂行し得べしとのことなりき。既に讀者の知れる如く、古人にも地球の圓狀なるを承認せるものあり、エラトステネスは西方に航して印度に達することの可能をさへ認めたり。希臘人及愛蘭人のある傳說は、大西洋の西に不可思議國あるをいひ。大哲學者プラトーは、印度を遙に去る處に、アトランチスと稱する國ありて、非常に天產に富めることを想像したり。古人のこれらの觀念はこゝにまた學者の注意を惹けり。これ千四百五十二年コンスタンチノポリス陷沒して土耳其人の手に歸し、そこに居たるギリシア學者は逃れてイタリアに入り、イタリアに文藝復興、印刷術の發達を來したるためなり。トレミーの地理學は、千四百六十三年ローマに印刷せられ、千四百七十八年に、地圖さへ添へられたり。然れども地圖なくとも已知の世界の長さを計りたる結果は、ポルトガルと印度との間を二千五百哩の距離に短縮したり。ギリシア地理學者等は多少地球の全周圍を小に評價したれども、日本は葡國の西四千哩程に在りとせり。

コロムブス

これクリストフ・コロムブスが航海を決心したる動機なりき。コロムブスは千四百四十六年ゼノアに生れ、その家系賤しく、父は機織を業と

せしが、彼はラテン譯書にて古今の著書を研究するに足るだけの教育は受けたり。彼は壯年に及びて水夫とならんとせり。當時ポルトガルは地理學上の知識の中心たりしが、彼及その弟バルトロメオは、多年南北に航したる末、居をリスボンに定め、彼は熟練なる水夫として、その弟は製圖家として同棲せり。これ千四百七十三年の頃とて、その後コロムブスはッェリバ・モニッと婚せり。この婦人はイタリア生にて葡王の臣下となり。一時マデイラの知事たりしバルトロメオ、ペレストレロの女なり。

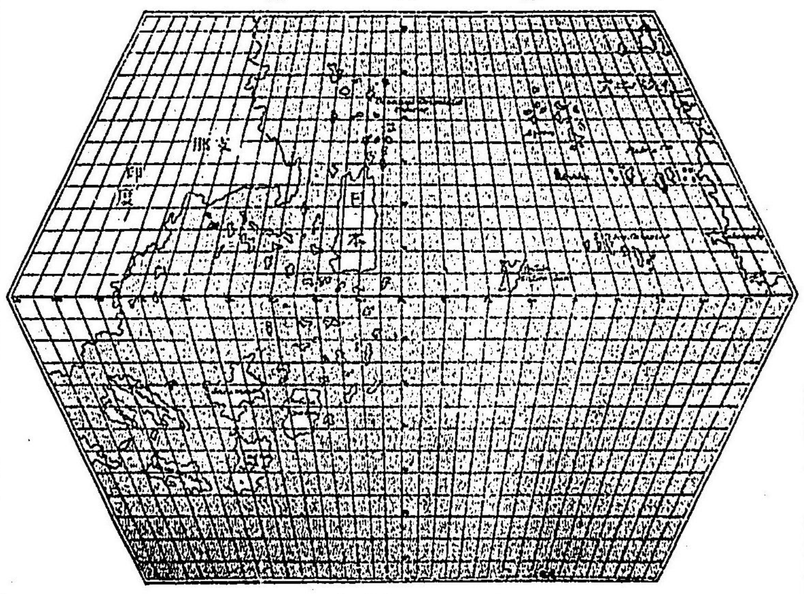
Bartholomeo
Felipa Moniz
Bartholomeo Perestrello

既に記したるが如く、中世代の終りに至り好奇心及利慾心より、東方に航海を求むること流行したると同時に、世界は圓形なれば西方に航すれば自から東に歸り得べしとの說大に起れり。尤も此世界球形說は、古人既に說きしが、耶蘇教僧は斯る說は聖書の方文と矛盾するものと信じて斥けたりけり。玆に歐洲人は長夜の眠さめて、知識の發達著しく球形說もまた行れ來れり。當時ポルトガルに一の流說あり、曰くイタリアの哲人トスカネリなるもの西方に航して、支那に到り得べき見解を

トスカネリの說

Toscanelli
Martinez

第八圖



トスカネリ地圖（複活シテ示ス）

下せりと。こゝに葡王は千四百七十四年六月二十五日マルチネッッをしてその說をきかしめたり。さて又全く葡王と關係なくコロムブスもこの風說をきゝてトスカネリに請求せしに、彼はマルチネッッに答へたると同文の答を與へたり。特に一層必要なるはトスカネリは西路イスパニアと支那との間の想定距離を度にて示した

St.Brandan
Antillas

コロムブスの集めたる材料

る圖を添へて贈れることとなり。この圖はトレミーの謬見にマルコ・ポロの報告を加へたるにて、アゾルス諸島より支那までの距離を五十二度三千百二十哩に減せり。コロムブスは漕航の事、航路距離の計算等、案内者としてトスカネリ地圖に負ふ所多きを常にいへり。不幸にもこの地圖今は失はれたれども、近世の地理學者は經緯線上に或程度までは復活し得たり、此に示すはその描圖の一部なり。

コロムブスは、熱心にトスカネリの見解を採用し、その全生涯を堵してこの見解を實現せんとせり。彼は大西洋の想像島嶼につきては、得る限の報告を拾集し、聞き能ふ限の雜談聞話等をも集めたり。所謂想像島とはセント・ブランダン島の如く、愛蘭の聖人が幸福の人類を發見せりとの島或は七市府を有せりとのアンチラ島等をいふなり。又見聞したる材料中には、カナリ島の海岸に不思議の遺骸の打上げられたるあり。これ歐人には未だ曾て知られざる人種なりとか。非常に大なる杖の打寄せられたるあり、こはたしかに人工によりて曲げられたるものなりとか。ある水先案内は、カボ・ヴィンチエンテを去る四百五十リーグの所に彫刻したる木片を見たりといひ。彼の妻の同胞も同樣の木片のボルト・サント島に流れ寄りたるを見たりと告ぐるあり。又現に西に當りて土地を見たりとの報告あり、アントニオ・メレはマデイラ島の西方百里の外に陸地を認めたりと語り、一水先案内はアイルランドに渡航の途中西方に陸地を認めて艇艇の一部ならんと思ひしといひ。又葡人ビチェンテ・デアスはギネアよりマデイラに歸航の途次、西方に陸地を見たりといふ類なほ他に多し、これら集收の材料虛實混交せりといへども、寧ろ印度に至る西方航路の存在を地方的に證明するものにして、コロムブスに取りてはこれら漂流の物品はマルコ・ポロが說明したるカタイ（北支那）の海岸より若干距離にある島國ジパングのものならんとおもへり。

コロムブス葡王に請ふ

コロムブスは探險の計畫略ぼ定まりしかば、自然の順序として、まづ己れの現住地たる葡國の王に謁して、己れの企圖の採用せられんことを

求めたり。ジョン二世王は之を學者の委員會に付せしに、コロムブスの考は唯マルコ・ポロに拘泥したる頗る空想に走れるものと議決せられたり。當時葡國は非常に探檢に熱心なりしが、保守主義の論者は航海商業盛なるは社會に變動を來し、古來の良風を害する事と主張せり。且此時アフリカを迂航して印度に至る航路漸く判然たらんとする所なれば、そを差しおきて此不確實なる西方航路を取るには大に躊躇したるなり。ジョン二世王はトスカネリに問合せたる位の熱心者なりしかば、コロムブスの説に耳を傾けしが、コロムブスが首尾よく新地發見を遂げたる場合の報酬として要求したる個條の重大に過ぎたるものありし故、王も言を左右に託して容易に聽許あらざりき。聞くが如くんば、ポルトガル政府は數々コロムブスと談話交通してほゞ其航路を知り、窃かにバズクズなるものに航路準備をなさしめ、コロムブスより聞得たる航路に就かしめしが、一行は洋上遠く漕出でゝ陸影を失ふや否や失神するもの多かりければ、途中より引返へし、危難莫大にして到底探險し難

葡政府の奸策

きことを報告せりといふ。

コロムブスは葡國に望なきにより、他に幇助者を求むるの已むなきに至り、その一子を携へて千四百八十三年イスパニアに赴けり。時にイスパニアはムーア人と激戰中なりしかば、彼の計畫も急に行はるべくもあらず。彼がポルトガル出發の際、弟バルトロメオを英國におくり遊説せしめしが、英王ヘンリ七世は薔薇戰爭漸く靜まり、方にチュードル家の權力を固定するに汲々の際といひ、その要求の大なる權力を與ふることを好まざりければ、確たる回答を與へざりき。コロムブスは荏苒經過するを快とせず、フランスに去らんとせしが、漸く千四百八十六年トレドの大僧正の盡力により、王后イサベラと、フェルヂナンド王とに謁見を許されて、多年の持論を滔々と辯述せり。王は彼の計畫を有名なるサラマンカ大學校の學者に下して討議せしめしに、葡國の調査委員同樣之を空想と見なせり。而して王及王后はその説を全く信せぬにあらざるも、當時この二君主の結婚に依りアラゴン、カスチラの二國始めて合

英に請うて得ず

イスパニアの好意

同し、イスパニア一統の基を開きて王權擴張に忙しく、一方には南部にムーア人の立てたるグラナダ王國と雌雄を決せんとて血戰中なりければ、暫時未定の問題となして最後の判決を下すに至らさゝりき。さればコロムブスは、イスパニアに居ること七年、待つことの賴甲斐なく徒に日を費すのみなれば、更にフランスに赴かんと決心し、千四百九十一年一子の手を携へて出立せんとし、一僧院の前にて患苦に沈みて仆れけるに、その僧の好意によりて再び王后に逢ふことを得、終に三隻を艤して探檢の用に充つることを許されたり。然も例の報酬請求の條りに過大なりければ、折角の談判も不調とならんとせしが、他に王后を說得するものありて、漸くコロムブスは所望の條條を悉く聞屆けられ、千四百九十二年四月十九日その要求たる、「若し事成る上は貴族に列し、代々海軍大將に任じ、發見地の副王として行政司法の權を握らしめ、新地の珠玉其他の物產より生ずる政府歲入の十分の一を分ち與へよ。」との契約に調印せられたり。

コロムブスの航程

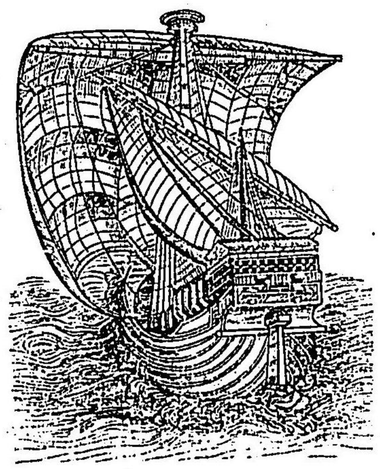
Santa Maria
Pinta
Nina
Palos.

コロムブスは茲に多年の志成り、サンタ・マリア、ピンタ、ニーナの三隻に百二十人を乘組ましめ、千四百九十二年八月三日金曜日イスパニアの西南パロス港に帆を上げたり。彼はまづカナリー諸島に赴き船舶の修繕をなし、九月六日にゝを出でゝ正西方に直航し、九月十三日始めて磁針の傾く西方に直航し、九月十三日始めて磁針の傾くを發見し、九月十六日サラゴサ海に入り、陸に近き兆候と信じ、遠き雲を認めて陸と思ひしが、やがてその誤を知れり。同二十一日彼の同行者は反抗的態度となりて歸國を迫りしが彼はなだめすかして航海を續けたり。陸未だ見えず。同廿五日頃船はトスカネリの圖に載せたるアンチリア島のあるべき

第九圖

コロムブス

第十圖



コロムブス時代の船

緯度に來れり。尤もこの島は全く空想に出でたる土地なれば、實際あるべき筈なし。トスカネリを信じたる彼は、水平に近き黑雲を見て陸なりと誤信したりき。十月一日になれり。コロムブスはカナリー島より凡七百十リーグ來れることを計へたり。若しジパングが果してトスカネリ圖の示せる位置にあるならば、最早その附近なるべしと思へり、當時の推測航法によれば、平均一日に百哩一時間に四ノット走るものとす。されば三十三日間にて、アゾールス島より日本に渉り得べしと考へられたるなり。最早三千百哩を來れり。ジパング附近に相違なしと推考したり。十月上旬の頃木の枝の流れ來るあり、鳥の去來するありて陸地の近づけるに心勇めり。十月十一日に至り、サンタ・マリア號は綠葉の附着せる枝、ピンタ號は赤き實のつきたる枝、及火に炙りて模樣のつけたる枝の流れ寄るを拾ひ上げ、其夜コロムブスは遙に陸上の燈火を望見したりといふ。果して十二日午前二時ピンタ號は月光に砂岸を認め、陸よ陸よと叫び大砲を發して吉報を他船に通じたり夜の明るを待ちてコロムブスは乘組員を率ゐて新地に上陸し、深く天の佑助を感じて直ちに其地をサン・サルバドル（聖救世主）と名付けたり。土人は自らグアナハインと稱す。コロムブスはこれアジアの東端に着せしなりと信じて、土人をインヂオス（印度人）と名付け、彼等の所持せる金環を見て何處の產なるかを問へり。土人は西南を指して答ふ。依てコロムブスは是よりキューバ、ハイチをめぐり、ハイチにチバオといふ處あるをきゝて、これジパングならんと信じたり。ハイチにてサンタ・マリア號は沈みしかば、これ天の示敎なりとし、一行中三十九名を留めて、最初の殖民地を開き、他のものはこの吉報を齎らすために歸國を必要とし、千四百九十三年一月十六日ハイチを發し、二月十七日アゾルスに着す。この間往航よりも短日時なりしが、この後暴風起り、漸く三月十五日パロス港に歸着し非常の歡迎を受けたり。コロムブスは、かの島の土人より得たる金其他の奇品を王及王后に献じたり。彼等は又直ちに七隻の船艦を用意して、千四百九十三年九月廿五日カヂヅ港を出帆し、前より一層南方の航路を取り

サン・サルバドル　San Salvador
Guanahain
Indios
Cuba
Haiti
コロムブス第一回歸航
第二回航海　Cadiz

Trinidad

Panama
Valladlid

コロムブスの死

批評

しが、無事西印度諸島に達し、早速ハイチ島を訪ひしに、城塞は取毀たれ殘留せる人々の變影だもなし。玆に起れる不幸の戰鬪やこの後コロムブス禁錮せられ不名譽を以て歸國せる事情などは本章の目的に要用なければ略す。彼が千四百九十八年第三回の航海には、トリニダッド島に到着し、南アメリカの海岸を認め、これがこの世ながらの極樂土ならんと想へり。千五百二年第四回の航海には、パナマの附近中央アメリカの海岸に航して歸れり。彼は歸國後多くの怨を受け約束の履行も成らず、許多の失意の後千五百六年五月廿日イスパニアのヴァルラドリッドに死せり。吾人の判斷し得る限にては、彼が發見したるものは彼が求めんと企てたる者なりしなり。然れどもトスカネリより得たる理想に基ける効果を奏したりとはいはれざるべし。乍併彼の行爲は陸地の沿岸を航せずして直ちに不知不案内の海洋を敢爲に渡航したる先登者として、航海上著名の發見をなす源をなせり。ヴァスコ・デ・ガマとカブラルの二人は緩徐に沿岸航海をなして、ヘンリ太子の理想を滿足するに力め、喜

Hojeda
Amerigo Vespucci
Venezuela

コロムブス以後の西航

望峯に達するに約半世紀を費せしに、コロムブスの冒險は十三年以内に世界一周者を出だせり。（ヘンリのアフリカ沿岸周航を企しは、千四百二十年頃にして、バルトロメオ・ヂアヅが嵐の岬に達せしは千四百八十六年なれば六十六年を費せり。コロムブス第一航は千四百九十二年にしてマゼルランの世界一周は千五百二十一年なればその間約三十年なりとす。）

コロムブスの後西方航路を取るもの〻多くの目的は、彼が發見したるものを一層明瞭に觀察せんとするにてありき。千四百九十八年コロムブスの第三回航海及バスコ・デ・ガマ印度に到れる成功の報告ありし後は、西印度より眞の印度に至る直線路を發見するの必要を感せり。イスパニアの紳士ホージェダは、アメリゴ・ベスプッチといふイタリアの按針を伴ひ自費にて遠征を試みたり。リトニダッド附近に印度直通路を發見せんと試みしが、勿論不可能の事なりき。而も彼等は沿岸航海をなして南アメリカの北岸に上陸したるが、ヴェネチアに似たるより、そこを小ヴ

Vincen Yaneta Pinzon

葡人とブラジル

St. Roque
La Plata
St. Georgia
C. Horn

ェネチア(即ちヴェネヅエラ)と名づけたり、翌年カブラルが西葡の境界線によりて決せられたる葡の勢力圏内に、ブラジルを容れしことは前已に記す所の如し。

實はカブラルが、ブラジルに達する三ヶ月前にコロムブス第一回航海の同伴者ヴィンセント・ヤネタ・ピンゾンは南緯八度邊のブラジルの海岸に接觸して順次北方に航し、印度に導く西方航路を求めしに、アマゾン河口を發見したるも二隻を失ひたれば、千五百年九月にパロスに歸港したり。

この不知怪疑の大陸が南緯八度まで知られたることは大に世人の興味を喚起し、カブラル歸着後間もなく、アメリゴ・ベスプッチは、カブラル發見の新土を探險して、葡領となさん目的にて編成したる、探險隊の按針として、葡王の命を受け、千五百一年に出發せり。ブラジルにては、セント・ロック岬に着して探險を始め、ラ・プラタ河に下りしが、こゝは葡國圏内より遙に西に當りき。アメリゴ一行はそれより南東に下りてセント・ゼ・

アメリカの名

Martin Waldsaemüller

オルヂア島に着す。こゝにホルン岬の東千二百哩にして寒氣と浮氷とのため永くこの地方に留まることを得ずして、當時の最南端を極めて遂にリスボンに歸れり。

アメリゴのこの航海は、コロムブスの發見に一層の新光彩を添へたり。コロムブスは印度に至る通路を發見し、その目的を達せりと思ひしかども、アノリゴの一行はコロムブスの發見地と、その目的地たる香料を產する印度地方とは、疑もなくこの陸地が障碍をなし居ることを知れり。獨逸の一教授マルチン・ウルツミュレルは、千五百六年に世界地理手引草を著し、アメリゴ發見談を記入して、この新世界はアジア、アフリカ及ヨーロッパと同じく、アメリカといふ大陸と記せり、これ彼がアメリゴを尊敬するのあまり、その名を取りたるなり。

第十一圖

アメリゴ・ベスプチの肖像

マゼルラン

Ferdinand Magellan

Amboyna
Banda

アメリゴの發見によりて、香料島に達せんには、その新發見の新世界を廻りて西方にたどるべきこと明かとなるや、ポルトガルの貴族フェルヂナンド・マゼルランは自からこの道路を發見せんと決心せり。この人嘗て東方印度にありて、アルメイダ及アルブクルケに仕へけるが、千五百十一年マラッカ征服に派遣せられ、そこより有名の香料島に至れ、と命ぜられて船三隻を與へられ遂にアムボイナ及バンダに至り、香料の產出多く且つ廉價にして主要の島なることを知りたることあり、その後一度故國に歸り、更にモロッコ遠征に從事せしが、葡政府には好遇せられざりければ不平にたへず、遂に去りて西王チャールス一世に仕へたり。これを千五百十七年とす。その後二年にして彼は有名なる世界一周の航程に上れり。

マゼルランはアメリゴ發見の新世界を過ぎて印度洋に達する海峽の存在するに相違なきこと、及香料島は境界線以外か又は西國の勢力圏内にあるべしと思へり。その論據としては、曩にイスパニアの商船が、

Schonr

St. Antonio
Concepcion
Victoria
St. Jago

世界一周の始め

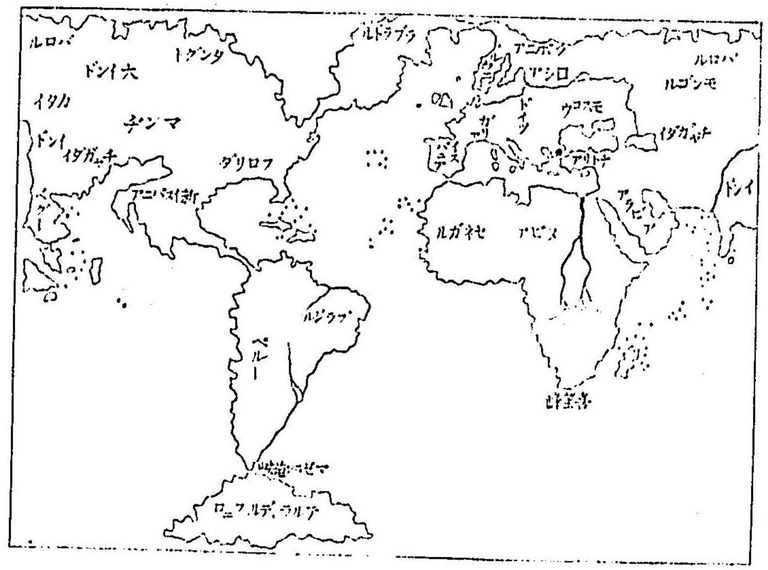
窃にブラジルの材木を得んとして通過したりし時、今日所謂マゼルラン海峽と呼ばるゝ水道あるを見たりとひ。又この海峽は確にマゼルランの發見以前即千五百十五年及千五百二十年付のシーネルの地圖にも示されたる事なりき。さてポルトガルは當時其基礎鞏固となりたる香料專賣につきて、脅迫者の出で來らんとの報を受くること數次なりしかば、腕力に訴へてなりとも、遠征隊派遣を中止せしめんとて、イスパニア王に勸戒したり。しかもチャールス王は其計畫を主張してやまず。遂にマゼルランは千五百十九年九月廿日火曜トリニダッド號、セント・アントニオ號、コンセプション號、ヴークトリア號及セント・ヤーゴ號の五隻を艤し、ポルトガル人、バスク人、ゼノア人、シチリア人、フランス人、フレミア人、ドイツ人、ギリシア人、チープルス人、コルフィット人、黑人、マレイ人及たゞ一人の英人等雜

第十二圖

フヂナンドマゼルランの肖像

Seville

第十三圖



世界圖

多の人々を乘せて、前代未聞の大發見航海をなすためにセヴィール港を出帆したり。よつて西葡兩國間の元來の憎怨は、この出發に際して乖離の度益々大となれり。一行はこの航海が眞に新世界を通ずる最初なりや否やを確認するために、ラ・プラタ河口を深き注意もて探檢したり。千五百二十年四月二日に冬籠せんとしたるセント・ジュリアン港にて一組の反抗者

Patagonia

を生じたり。これ水夫等はこの時まで、南半球にては氣候が全く北半球と反對なりとの事を知らざりければなり。マゼルランはこの反抗黨に對して、非常に確實に且つ熟練に處置し、煽動の主謀者中には、爲に殺されれ或は孤島に遺棄せられたるもあり。十月十八日再び航海をつゞけたり。暫くして土人の性質習慣を見るに、大なる背丈奇怪野暮なる足覆などあり、よつてマゼルランは彼等にパタゴニアの名を命じたり、それより三日の内に、今日マゼルラン海峽の名を保てる水道の入口に達せしに、不幸にもセントヤ！ゴ號を失ひたり。

この海峽には許多の枉曲と彎入とあり。マゼルランはそを探査せしめんとてセント・アントニオ號を分派し、他の三隻は、眞直の航路を取りてすゝめり。然るにセント・アントニオ號の水先案内者は反抗黨の一人なりければ、分離したるを幸ひとし他の水夫等をそゝのかして、ポルトガル指して一直線に歸航せり。されば、マゼルランは豫定の會合點にいたり、待てども〳〵來り合はざるも理りなり。かくと知りたるマゼルラ

Ladrones

Mactan　マゼランの陣歿

Tidor

ンは、たとひ帆の革紐を食ふに至るとも、この探檢を繼續して成功せんと決心せり。かくてこの海峽通過に三十八日を費し、その後四ヶ月間太洋の進行をつゞけたり。この太洋は波浪極めて靜穩なりければ太平洋 Pacific Ocean と名づけ、針路を北西に取りて千五百二十年三月六日にラドロン列島を見、必需の食料を得たり。壞血病はきびしく起りて、船中唯一の英人はラドロンにて倒れたり。こゝより更に一行は今日フィリッピン群島として知らるゝ群島に着し、土王の非常なる歡待を受けたりければ、その返禮にもとマゼルランはこゝの内亂戡定に係り、千五百二十一年マクタンの戰に陣歿せり、首領を失へる三隻はなほも航海をつゞけて、モリュッカ島に向ひしに、コンセプション號は坐洲して航海に適せざるに至りしかば遂に燒棄したり。次でボルネオに至り、ジョン・セバスチアン・デル・カーノはヴィクトリア號の船長に指命せられたり。

千五百二十一年十一月六日、一行は其旅行の目的地點に達しければ、香料島中の一なるチードル島に投錨せり。こゝに土人と有利の契約を結び、貿易をなし、香料、肉荳蔻等を船に充たし、遙々來れる甲斐ありと、勇みて故郷に向ひて再び航海せんとする刹那、あはれやトリニダッド號は共に拔錨にたへざるを知りたれば、ヴィクトリア號のみ、季節風を待ちて出立し喜望峰を迂廻して、千五百二十二年九月八日月曜セヴィール港に着せり。實に彼等がイスパニア出立の日より數へて滿三年に僅十二日を不足するのみ。艦隊出立當時の總員は二百七十人なりしが、ヴィクトリア號と共に歸着せるはわづかに十八人なりしといふ。

トリニダッド號は香料島よりパナマに歸へらんと企てゝ、殆ど西經百七十五度北緯四十三度の邊まで達せしに、食料欠乏を告げたれば、止むなくモリュッカに歸航せり。然るに不幸にも海賊と認められ、香料貿易につき葡國の專權をイスパニア人の妨ぐるものなりとて、特に派遣せられたる葡艦のために捕獲せられたれば、トリニダッド號の水夫は、大むね捕虜となりしが、たゞ四人が多大の困難の後、イスパニアに歸着せりといふ。ヴィクトリア號よりケープ・ベルデ島に上陸したる十三人も、生存者

一周の効果

の數に加へて第一回世界周航のため出發者二百七十人中三十五名が生存者の全數なりき。

さてこの航海は地理上發見史の見地よりして無双の切要事件なりとす。そは發見の新世界はアジアより獨立して存在せることを確實に決定せるにてありき。殊にドリニダッド號の歸航は、太平洋の面積が、アジアの東方にありて北緯にも廣く、又往航はそが南緯にも非常に廣きことを知り、又ヴィクトリア號の周航は、世界は古人の想像よりは餘程廣大なることが明證せられ、寧ろ恐くはアジアが中世代の著述者等に考へられたるよりは、割合に小なることを知り得たらん。これらの觀察點より見て、マゼルランがその理想を實行する事に於てあらはしたる頑固の主張は、トスカネリの地圖に倣ひて、陸地を發見せんと考へて數ヶ月の航海をなしたる、コロンブスに比して偉大なることは勿論とす。マゼルランに至りて兩極圏及オーストラリアの外、世界の全海岸線は大むね知られ得たりと謂つべし。

西王の喜悦

Gules

約説

チャールス一世はこの航海の結果を見て非常に滿足し、喜びてテル・カーノに養老年金を與へ、彼の事業の紀念として紋章を許せり。即ち三ッの肉桂枝、三ッの肉荳蔻及十二の丁子、城塞のギュール、汝は第一に予を一周せり」と題せる地球の頂飾、香料の枝を手に持ちて王冠を戴ける二人のマレイ王の支保者等なりき。城塞は勿論カスチールをあらはせるにて、その他の紋章は香料島に在りて航海に關する主なるものを指示したるなり。

然れども既に述べたるごとく、葡人はヴィクトリア號出發後直に香料島における彼等の位置を恢復せり。又爾後七ヶ年にしてチャールス一世はマゼルラン到達のために得たる要求を悉く抛棄したり。

本章は之を要するに、新世界の發見及境界に付ては明かに三階段を踏めり。(1)初にコロムブスは實際ジパング(日本)に達したりと思ひ、又彼の航海の目的を遂行したりとなせり。(2)其後アメリゴ・ヴェスプッチは南アメリカの沿岸航海によりて、永く翹望せる香料島と、コロムブス

Behring
Cook

が發見したる陸地との間には障碍する大なる不知の陸地あることを確めたり。(3)マゼルランは香料島に達する前數千哩、南方太平洋を渡りその意見を確かめたり。斯くの如くして第四梯段を設けば設けらるべし、そはアメリカの北西はアジアに連續し居らざることを漸次に發見したる事とす。これは實に漸次に知られたるにて、終にベーリング及クックの航海にて決定せられたるなり。

第八章　印度への北方通路、英、佛、蘭及露の通路發見

歐洲列國の風潮＝英國の北方通路＝佛人ケイアを建つ＝フローピシャー＝デーヴィス＝ハドソン＝バッフィン＝和蘭の探檢＝東洋の航路所領＝英國東印度商會＝英、蘭競爭＝英の北東通路＝露の探檢＝露人北支那に至る＝ベーリング＝約說、新世界の發見は、發見そのことが已に大なる結果なるに、なほその大影響として他の歐羅巴諸國民を奮起せしめたり。從來二千年以上も主

歐洲列國の風潮

要中心點となれるは、地中海の沿岸にして、殊にヴェネチアは位置の中央なると、東方貿易の巨大なるとによりて、中世代後半は世界の中心たりき。然るにコロムブス及マゼルラン航海後は、大西洋沿岸の歐羅巴國民は、何れも新世界に近かんとせり。然り大概香料島に近かんとせり、そは陸路に非常の運賃を支拂ふ代りに、全路海によりて容易に達せらるゝに至りたればなり。獨逸を經る商業路は直に嫌はるゝに至れり、これ大打擊にて、この打擊を全く恢復したるは實に十九世紀に入りての事なり。地中海が商業の中心地たる頃は、未だ全く知られざる英、佛及ネーデルランド地方も、西、葡兩國と同じく、世界の商業上及出來事に關して幸運の位置にありと謂ふべし。新通路の發見せらるゝや否や、北歐國民はこれを利用せんと企て、西、葡兩國の境界線とか、分割とか、勢力圏とか、いふ事に頓着せず、佛王は之を笑ひ、英、蘭はそれを尊重する理由なしといへり。コロムブスが第一航海より歸れる三年後に、英王ヘンリ七世は、ブリストルに住へるヴェネチア人ジョン・カボットに命じて、その三子と共に

英國の探檢

Bristol
John Cabot
Florida

Jacques Cartier
Samuel de Champlain
Acadia
北米に達す
Edward VI
Sebastian Cabot
Sir Hugh Willoughby
Richard Chancellor
北海航路
Ivan the Terrible

北西路によりて印度に達する航海を企てしめたり。彼は千四百九十七年にニュー、ファウンドランドを再び發見し、(さきにノルマン人が一度發見したり)翌年フロリダまで北アメリカの海岸に沿ひて下れり。

千五百三十四年ジャクケス・カルチールはセントローレンス河を調査せり。後サミュエル・ド・シャムプレインによりて繼がれ、セントローレンス河源流の大湖を探檢し、こゝに今日のカナダ當時のアケーディアと稱する佛領を建設したり。

英國はこの間なほ北方通路によりて印度に達せんとの企圖をなせり。英王エドワード六世は英國の大按針と稱するセバスチアン・カボットをサー・ヒュー・ウィロービーの部下として千五百五十三年航路探査を命じたり。一行中のリチャード・チャンスラーといふ按針を乘せたる一船は、アーチャンゼルに達する航路を復活し、それより陸路モスコーに至り、露帝イワン恐王に優遇せられて、歸途につきけるが、途中に於て溺死せり。これより北海路カタイ(北支那)に達せんとの企は斷絶したり。

Martin Frobisher
Sir Humphrey Gilbert
Adrian
ダヴィス
ハドソン

千五百七十六年マルチン・フロービシャーは、グリーンウィッチに至りてエリザベス女王の歡迎を受け、探檢に出立せり。グリーンランドよりブラジルに達し、翌年其名を付せる海峽を發見せり。彼の設計はサー・ハムフレー・ギルバートとその弟アドリアンとの共力によりて、北西、北東、又は北方より支那及香料島に至る通路を開くべき特權を賦與せられたり。これと共に基督教王よりも未だ殖民なき土地を發見すべき特許狀さへも得たりければ、ニューファウンドランド、セント・ジョンに殖民せしも、惜らくはその歸途アゾールス島附近にて、十人を乘せたるハムフレーの小船は沈沒したり。時に千五百八十三年なり。

二年の後他の遠征はジョン・ダヴィスの指揮の下にロンドンの商人等によりてなされたり。ダヴィスは這回と次回との航海にて、西方に多くの通路を發見せり。彼の名を命じたる海峽の外に、千五百八十七年の第三航海には今日ハドソンと命名せる通路を過ぎたるも實事なり。爾後廿年間は足跡を絕ち、千六百七年ヘンリ・ハドソンが十人の水夫と一人の

Henry Hudson Spitzbergen

小供とを携へて出發し、スピッベルゲンに達し、北緯八十二度に至り、翌年磁石の北極を極めたり。同行の二人は幸運にも雌の人魚を見たりと誇れり。これ恐くはカヤク(エスキモーの漁舟)に乘れるエスキモーの婦人ならんか。千六百九年の航海に今日その名を保てる海峽及灣を發見したるも、水夫等のために孤島に棄てられて、その後の消息を失へるは惜むべし。彼はさきに一時和蘭に仕へてその爲に今その名を存せる河上にニューヨークの建てるハドソン河を探りき。北方における英國の航海

william Baffin

發見的遠征は千六百十五年ウィリアム・バッフィンの航行を終りとす。彼はその名を付せるバッフィンランド及北アメリカの諸島を發見したり。

和蘭の探檢

この間和蘭もまた北方發見の業に手を染めたり。この國は當時西、葡兩國を治めたるフィリップ二世の壓制に對して叛亂を起したれば、舊主國と衝突せざる通路を探らんと欲して、千五百九十四年より千五百九十七年まで三回の航海によりて、ウィリアム・バレンツは總督保護の下に北東航海を企て、チェリー島を發見し、スピッベルゲンに觸接したりしが探

Philiph II William Barentz,

索の大目的は之を失へり。是より蘭人は自ら新航路を發見するよりは、寧ろ葡國の航路を奪はんとせり。

東洋航路

和蘭人がかゝる希望をなせるは、歴史上ネメシス(復讐の女神)の奇なる例なりとす。アラゴンのフェルヂナンドの企てたる重縁履行のために、ポルトガル王位及その國土人民は千五百八十年フィリップ二世の時イスパニアに附せられ、一年後ネーデルランドの北半部各州は、イスパニアに對して從順を缺きたれば、イスパニアの船舶及殖民地は勿論、さきにポルトガルに屬するものをも攻擊する自由を得たり。千五百九十六年の初、コルネリウス・ホートマンは喜望峰をめぐりてスマトラ、バンタムに至り、五十年間に東方所有地の多きこと葡人の上に出でたり。千六百十四年蘭人はマラッカを取り、香料島の命令權をも得、更に千六百五十八年錫蘭の所領權を確實にしたりしが、これより先千六百十九年ジャバ島にバタビアを建てゝ東印度所有地の中心となせり。

Cornelius Heutman

Java Batavia

和蘭の東印度政略に倣ひしは英人なりき。英國東印度商會は千六百

英國東印度會社

英、蘭の競爭

Anboyna
Australia

英の北東通路

年エリザベス朝の時に建設せられ、千六百十九年には香料島分割の第三者たらんと和蘭人に迫れり。これが爲に多數の英人は、アムボイナ島に殖民したれども、四年間に蘭人はこの商敵を虐殺し、生存者を島外に放逐したり。英人は、茲に於て印度本土に意を專にする事に決し、直にマドラス、ボムベイを占取し、印度洋の島嶼は蘭人の所業に一任したり。吾人は地理學史上この結果を考慮するを要す。蘭人が實地に初めてオーストラリアを發見したるは、印度洋上の諸嶋嶼を領有し居りたるに職由す。和蘭の東洋印度政略の結果の一は、その跡を現今にまでも留めたり。千六百五十一年喜望峰に殖民地を建てたれども、そはナポレオン戰爭の間に英國の手に歸したり。これ和蘭が佛帝ナポレオンに屬したりし時なりければなり。

かゝる間にも英人は香料島に達するを得ずとも、せめてはゼノア人の專賣なる支那への陸路に口をあけんと、北東通路發見の可能を疑はざりき。千五百五十八年英の使節アンソニー・ジェンキンソンはモスコー王廷に至り、次でボカラに旅行せしが、冒險に相當する價値の報酬なかりければ、從前の如くヴェネチアの大商船より印度支那の貨物を購入せざるべからざりき。千五百八十三年東洋商人の一隊はアレッポー、バグダッド、オルムッ及ゴアと直接交通を開かんとする一組合を立てたり。この企は葡人怨惡のために、オルムッとゴアとには成功せざりしかども、この整理は東洋の貨物を安價に英國に輸送するに便となれり。折しも、千五百八十七年一のヴェネチアの大船(千百噸)がワイト島附近に難破したるが爲、葡及ヴェネチアの專賣權はこゝに終結を告げて、英國は自ら東洋と商業を營むに至れり。

露の探檢

Anthony Jenkinson

Isle of Wight

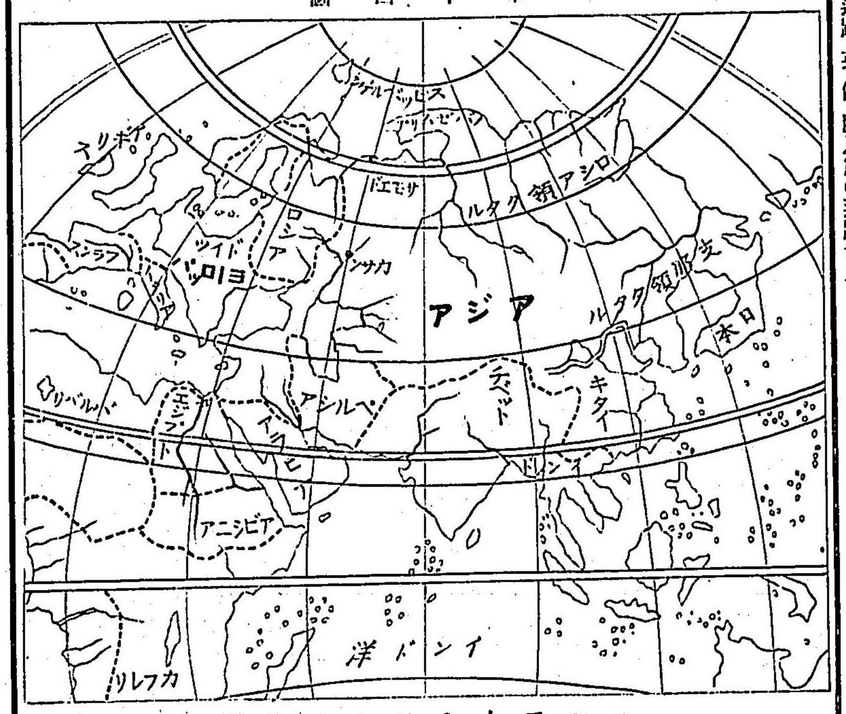
チャンスラー及ジェンキンソンの北方旅行はモスコーに至れるまでにて、その目的は完成せられざりしが、その結果として、ロシア人をしてその國の位置が極東への通路に近きを利用せんとの熟思を促したり。ジェンキンソンがイワン恐王に謁見したる後間もなく、露帝は東方にその領地を擴張せんと欲して之に着手し、黑貂皮を得るためにオビ河畔ま

Obi
Stroganof

Vassili yermak

で露の商人ストロガノフが伴へる一隊の軍兵を送れり。この軍隊中にバシリ・エルマクを頭とせる六千のコサックあり。エルマクは韃靼人を征することの容易なるを信じ、そを征服して一新王國を建てんとせり。彼は豫期の如く韃靼

第十四圖



圖地アジアの人アシロ
千七百三十七年のもの

人を破り、トボルスク附近のシビリ市を陷れたり。彼は占領地を己の所有とすることの何となく奇異なるを感じて、征服地を擧げて悉くザアーに献じたり。これ以來露人は頑固にアジア北方の未開未知の境に突進し、コサックの鐵蹄はシベリア各處に印せられ、千六百三十九年クピロフの率ゐる一隊は太平洋に達したり。又レナ河上ヤクツクより出立せる一隊は千六百四十三年に黑龍江に達し、露人は始めて支那人と境を接することを得たり。

Kupilof
Yakutz

かくて北支那に達することを得たれば、北アジアの廣袤に付て、地理學上の知識を增したり。千六百四十八年には北氷洋方面シベリアの北海岸に達し、ダシネフの率ゐたる一艦隊はコリマを出帆しベーリング海峽に至れり。然して露人のカムチャトカに達したるは千六百九十六年のことゝす。

Dashinef
Kolyma

かくの如く北方又は東方に向ひて大膽なる探檢が引きつゞきて試みられしと雖、シベリアはヨロンブス、アメリゴ等によりて發見された

St, Elias

ベーリング Vitus Behring

る新世界の北部と連續せゆや否やは未詳なりき。されば、ピーター大帝は千七百二十八年丁抹人にて當時露國に仕官せるヴィツス・ベーリングに一隊の遠征軍を附してその解決をなさしめたり。於是彼はまづカムチャトカに至り、船二隻を作り、陸地に沿ひて北方に航海を始めたり、北緯六十七度を越ゆること僅にして、北にも東にも陸影を見ずなりければ、これ大陸の北極に達せること必定なりと想へり。實は此時彼は北アメリカの西岸三十哩以内にありしなりとは後にて知られたり。かくとも知らざりし當時の彼は、ピーター大帝の命じたる大問題の解決を得たりとて大に滿足したり。かくべーリングは、自ら海峽を發見したりとは思はざりしが、後人彼の名に因みてベーリング海峽と呼びなせり。千七百四十一年、氏は再びアメリカ大陸はシベリアの東方幾何を距つるかを知らんとして遠征の途に上り、二週間を航して、一の峻嶺を認め、セント・エリアスの名を命じたり。ベーリングはこの航海中、彼の名を命じたる一島中に死せしが、その事業は、長く新舊世界間の關係を決定したり。

約說

maclure
Nordenskjold

然れどもベーリングのこれらの航海は、吾人が本章及第六、七章等に示したる時代よりは發見の時期やゝ後期に屬するものにて、その目的は主として科學的問題を決せんとするにあり、之に反して蒙、西、英、蘭人等が各自の探究は畢竟香料島や支那に達せんとの、一目的に指導せられたるものなりき。

之を要するに葡人はアフリカの海岸に沿ひて、印ふが如く緩慢に南下して探檢を了し、西人はコロムブスの大膽なる理想を採用し、且つマゼランの一層剛膽なる觀念を信じて、東方に達することに成功し、英佛は香料島にまでの北西通路を求め、英、蘭は北東通路を企畫したり。これら北方の兩道は堅氷、浮氷等に碍げられて奏効せざりしは遺憾とす。然れども吾人は十九世紀において、マクリューアが北西路を、ノルデンスキョルドが北東路を完成したるを見て安堵するものなり。

東洋の專賣權をヴェネチア人より奪はんとしたる西歐國民の企の結果を統一すれば、アジアの東海岸と歐羅巴の西海岸との間に横はれる

新世界の存在を地理學上の知識に增加したることなり。吾人は是よりこの新大陸の內地が探檢せられて歐洲諸國民の分有に歸する次第を語らんとす。

第九章　アメリカの探檢と分割

バルボア＝ピザロ＝コルテスのメキシコ征服及探檢＝レオン及ピネダ＝ピザロのインカ家征服＝アマゾナ河の發見＝西、葡領の分界＝西、葡の殖民策＝英國の經營＝蘭、典の殖民地また英の手に入る＝佛の經營＝英、佛の競爭＝パリ條約の後＝北部アメリカの探檢＝合衆國の膨脹＝アメリカ分割の完成＝約說

吾人はすでに新世界の海岸にそひ西、葡兩國人のなしたる發見につきて語れり。然るに第十六世紀の初期より彼等はその內地探檢を始めたり。千五百十三年にはバスコ・ヌネッ・デ・バルボアは、パナマ地峽を走る

Vasco Nunez de Balboa
Francisco Fizarro
Da ien

山脈の最高點に上り西方に一大洋を認めたり。後にマゼルランが太平洋と名付けたる渺々たる大洋の水の歐人の眼に映じたる始なり。茲に彼はこの陸地は南方無限につゞきて、南に至るに從ひ、黃金に富み數多の住民あることを聞知しき。この一行中にフランシスコ・ピザロなるものありて、この傳聞の眞僞を確めんと思へり。同時にダリエンの北方に金に富める大國民ありとの風說は、キュバの知事ヂエゴ・ベラスクェッの耳にも入りたり。こゝに彼は千五百十九年船十隻に六百五十人と十八頭の馬匹とを乘せて調査に赴くべしと、フェルヂナンド・コルテスに命じたり。コルテスは自らベラ・クルッと命名したる港に上陸せしが、メキシコ人は非常に驚愕せり。當時メキシコは大なる半開國にしてモンテヅマの治下に屬せり。モンテヅマは、十二世紀の頃トルテクスを繼ぎたるアツテクス家の最後の代表者なり。トルテクスは七世紀の頃メキシコの高原に移住して、金屬、道路及その他文明の要素の使用法を敎へたるものなり。モンテヅマはその旗下に十萬人を控へしが、遂にイスパニヤに

Montezuma
Toltecs
Aztecs

コルテス
Diego Velasquez
Ferdinand Cortes
Vera Cruz

ピザロ

バルボア

Cacique of Tabasco
Nicaragua　Honduras　Tlascalans
Alvarro de Saavedra

金銀及貴重の物品を貢献せんと約せり。これ大にコルテスの貪婪心を刺激し、かゝる富有の國は寧ろ征服して己の有とせんと思はしめたり。依て彼はその船を燒棄して深く內地に入り、悉てメキシコ人と戰ひたるトラスカランス種族を途々征服して、メキシコ人等に對して己を助けしめんとて懷けたり。これらの援助を得て、遂にメキシコ王を捕へ、多大の貢献をなさしめ、數回戰鬪の後その首府の主となり、メキシコ帝國の財源を主宰せり。これ千五百二十一年なり。彼は直に之をチャールス一世帝に献じ、己はメキシコの總督に任ぜられたり。

コルテス總督となるや否や、國內の探檢隊を組織し、自から千哩以上の大旅行をなして、後ホンヂュラスに達せり。この大旅行はたゞタバスコのカシクが、ニカラガ國境までその國の山川都邑を綿布に畫きたる地圖にのみ依りたりといふ。彼は又セバスチアン・デル・カノーの下に香料島に送られて、千五百二十七年にチドールに着したるイスパニア遠征隊に支給するために、アルバーロ・デ・サアベドラに小艦隊を付して派遣

コルテスの探檢

Ponce de Leon
Bayuca
Pineda
Veráeruz

Francisco Pizarro
El Dorado

したり。これがために其勢力の幾分を割きたるコルテスは、千五百三十六年メキシコ北西岸に沿ひ、海路遠征を行ひしに、一の大なる島ならんと思はるゝ地に達せり。彼はこれこそ當時流說せられたるカリホルニアといふ極土に近き極東の想像島と同一物なれと思ひきかくてコルテスの探檢にて中央アメリカ全部は千五百四十年彼の死去以前に世人に知らるゝに至れり。先是ポンス・デ・レオンは千五百十二年フロリダ附近に一島を發見し、それやがてアメリカ印度人の寓話中にあるバユカ不老國ならんと思へり。又コルテスがメキシコにおける第一回企圖の際、ピネダはフロリダを週航してベラクルヅに達し、フロリダよりメキシコの海岸のつゞけることを實見したり。

コルテスの功績はその結果に於て、人の手は帝國を壓服し、並びなき富を得る事の容易なるを證せり。依て茲にフランシスコ・ピザローはコルテスの成功に勵まされて、バルボアの遠征の時にきけるエル・ドラドの發見を企てたり。ヂエゴといふを伴ひて、南アメリカの北西岸を下り

インカ　Peru　Incas

Cuzco　Atahualpa

Lima　Almegio　Gonzales

アマゾン河

て沿岸遠征を試みける中に、ペリウ高原にインカ家といふあり。その殷富なるをきゝて、彼等は欲望を起し、多くの金銀を獲得して、さて報知のために一旦イスパニアに歸り、更にチャールス一世の允許を得、其國を征服せば、そこの知事兼總督に任ぜられ、その所得財貨の五分一を納入する條件にて、千五百三十一年二月に僅に百八十人(内三十六人は騎馬)を率ゐて出立せり。まづコルテスの政略にならひて首府クヅコに向ひて直に侵入し、以て當時のインカ家のアタホールパを捕へたり。アタホールパはその禁錮せらるゝ室に、己の手の屆く丈の高さに金の捧を積みて己の賠償にせんと申出でゝこの非常なる約束を履行せり。ピザロの同伴は三百萬スターリングに價する分捕物をなせり。千五百三十四年ピザローは海岸に近きリマに居を定めて、更にアルメグロを南方に遣し、彼は遂にチリ國の主となれり。千五百三十九年にピザローの弟ゴンザレスは、アンデス山脈を横過してアマゾン河源に達し、その同伴者なるフランシスコ・デ・オーレラナはその河口まで下れり。是に至るに彼は

Potosi

四、葡の殖民策

實に一千リーグの航海をなし、千五百四十一年八月に達せりき。されば、この河はオーレラナと命ぜられしかど、女丈夫の種族存在せりとの報告によりて、後にアマゾナ河とて知らるゝに至りしなり。オーレラナはその航海にてアメリゴの新世界における西葡兩國の勢力圏を結合せり。千五百四十年頃には中央及南アメリカの外廓及内部の若干部分はコロムブスの第一航海より半世紀内にイスパニアの冒險のために知らるゝに至れり。而して法王の命によりてポルトガルはブラジルを得、その殘りの國々の大なる面積は皆イスパニアに屬せられたり。葡人はこの新占領地を、その著しき增加人口の排出口となし、多數人民を移して殖民地となせり。さるにイスパニア人はこの大なる所有地をばたゞ彼等のみ至るべき獨占市場とし、金銀及水銀に富める鑛山は、メキシコ、ペリウ殊に有名のポトシに發見せられて皆な西國の利益となりければ、イスパニアはこれら貴金屬を歐洲に注ぎ出だす篩となれり。之に對して歐洲の貨物は西船によりて新占領地に送らるゝに至れり。たとへ

St, Augustine
Sir Walter Raleigh

ばフランダルの織物はイスパニアの紹介にて原價の三倍に新世界に販賣せられたり。この目前的政略は自然に密輸入者を生じ、歐洲他國民の船舶は、その目的にて入り込むに至れり。

英佛人等が北アメリカ北東海岸の探檢に從事したる事は、吾人既に述べたり。しかも十六世紀間には、熱帶地方のアメリカに產する如き富源は一もなきこの不愛相の海岸には少しも殖民せざりき。千五百三十四年のカルチエル及それ以前カボットの探檢は何れもその土地を占領する企圖を有せざりき。佛國ブルタニューの漁夫はニューファウンドランドの漁場に至れるあり。種々の探檢者が北西通路の入口を見出さんと企てたる事等はありしが、十七世紀初期までは新大陸の北部は未だ開拓せられざりき。而してまづ建設せられたる市街は、千五百六十五年フロリダに於けるセント・オーガスチンなりしが、後三年を經てフランス遠征隊のために亡ぼされたり。サー・ウォーター・ラレーは千五百八十四年今日ヴァージニアの附近に殖民地の建設を企てたりしが失敗せり。而して殖民地建設のために英國が組織的企畫をなせしは、ジェームス一世の御代なりとす。

Plymouth

英國の經營

茲に英國に特許を受けたる二會社あり。一をプリモウス會社といひ、他をロンドン會社といふ。千六百六年に建設せられたるものにて、ノヴアスコチアよりフロリダに至るアメリカ東海岸を二分して、前者は北部を、後者はその南部を受持區域とせり。これらの地方は、十七世紀の間に漸次に小州に區分せられたる中にも、清教徒は北部にニューイングランドを作り、高教及ローマ舊教徒は南部にヴァージニア及メリーランドを作れり。

Hudson
Delaware

蘭、典の殖民地

然りこの二會社の間及ハドソン、デラウェーア河の兩側になほ他の二個の歐洲國民の殖民地を形成せるを見る。即ち和蘭は千六百九年ハドソン河畔にニューネザーランドを作り、瑞典人は千六百三十六年頃よりデラウェーア河に沿うて。ニューズヰデンを作れること是なり。然も新瑞典は僅々數年存在せしのみにて、千六百五十五年和蘭人に併合せられた

Port Boyal, Acadia
Samuel de Champlain
Quebec
Sir George Carteret
William Penn
New Amsterdam
Wall Street
Manhattan

り。新和蘭の首府はニュー・アムステルダムと名づけられて、今日ウォール街砦柵の南、マンハッタン島に設けられたり。パドソン河は英殖民地の南北二部の楔子として未來進運の門閥たるがために、大西洋と大湖間の商業の主要動脈たる事が、チャールス二世に認められたれば、二世帝は千六百六十四年にその附近を取らんがために遠征軍を發したり。當時は已に英、蘭兩國間は平和成れる後なりしが、ニュー・アムステルダムは遂に英人の手に入りて、ニューヨークと改められたり。これチャールス王の弟ヨーク公後にジェームス二世と稱せられたる人に因めるなり。新瑞典も同時に英國の手中に入りしが、こはサー・ジョルジ・カルテレット及ウィリアム・ペンに讓與せられたり。かくてフロリダまでの海岸線は英國の手に落ちたり。

ロンドン及プリモウス兩會社は、千六百七年に殖民建設の手を下せしが、同年にフランスも始めてアメリカに有力なる殖民地を作れり。そはローヤル港と、當時アカヂアと呼ばれたる今のノバスコチアとなり。

佛の經營

Ohio
Iliinois
Louisiana
ミシシッピー河谷
Marquette
Mississippi
Arkansas
Robert de la Salle
Iroquois Indians
Algonquins

翌年サムエル・デ・シャムプレインはケベックに殖民し、佛領カナダを建てたり。彼は又大湖附近を探檢して、セント・ローレンス河岸に殖民地を作るなど、當分は佛の活動はこの邊に限られたりき。英、佛兩國殖民地間にはイロコ印度人なる爭鬪好きの土人遍歷せり。而してシャムプレインの殖民地はアルゴンクィン國中にありければ、已むなくシャムプレインはアルゴンクィンに加擔してイロコを佛の敵としたるため、第十八世紀における英佛間の終局戰爭に偉大なる影響を與へたり。さて佛人は、大陸の內地探査を續行して、千六百七十三年にはマルケットはミシシッピー河を發見し、そを下りてアルカンサス河口に達せり、而してミシシッピー河谿探檢の事業は、ロバート・デ・ラ・サリの企つる所となり、オハイオ及イリノイズ兩河を發見し、千六百八十年より八十二年まで三回の遠征は、ミシシッピー右岸地方の探檢に成功したり。この廣大なる地方は佛王ルイ十四世の名に因みてルイジアナと稱せり。

フランスは北アメリカの內部全體を欲したれども、イギリスは比較

New Orleans
Mobile
Detroit

英佛の競爭

Pittsburg
Duquesne

Wolfe

パリ條約後

的狹隘なるアレガニー山脈と東海岸との間の一帶地に限られたり。ニューオリーンスは、千七百十六年ミシシッピー河口に建設せられて、佛國の活動はクェベックとニュー、オリーシス間に擴張したり。今日なほこの邊佛語の地名存するもの多し。モビール、デトロアの如し。第十八世紀の初期の形成は、第十九世紀末期アフリカ黃金海岸におけるそれと著しく相似たり。フランスは英の勢力圈内を蠶食せんと企て、ゼオルジ・ウシントンは外交と軍略との二方面より兩國の勢力圈を限定せんとせりき。英佛のアメリカ殖民地は絕えず互に戰をなせり。その目的地は今日のピッツバーグの地點にして、西門としてオハイオ河谿を瞰下するの位置にあればなり。こゝにダケスーンは己の名に因める城砦を作り、千七百五十八年まではフランスの手中にありき。然れども翌年ウォルフはクェベックを陷れて、爲に北米に於ける佛の全勢力を放擲せしめたり。英佛間長年月の爭鬪中、英國は常にイロコ人の援助を得たりき。

千七百六十三年パリ條約にて、アメリカの佛領全部は英國に讓與せられたるが、英は外になほイスパニアよりフロリダの所有權を得たり。これ曩にイスパニアとの戰に、フィリッピン群島を占領しけるが、今これと交換したるなり。又ミシシッピー西岸の地は全く西領メキシコに併合せられたるが、一旦ナポレオンの兄ジョセフが、イスパニア王位に上りし時フランスに屬せしも、ナポレオンは千八百三年に之を合衆國に賣却したり。先是、ルーペー公を首領として千六百七十年に創立せられ、當時しばらくはルーペースランドと稱せられたるハドソン灣附近にて、アメリカインド人と毛皮貿易の特許を得たるハドソン灣會社は、漸次にロッキー山脈に至るまでアメリカ北部を知り、千七百四十年にはパレンニ・デ・ラ・バランデレーはその北部地方を發見したり。千七百六十九年より七十一年毛皮商人ハーンはコッパーマイン河より海に至る間を探査せり、而して千七百九十三年マッケンジー君がその名を負へる河を發見し、且大西洋岸より太平洋岸まで、北アメリカを横斷したり。北アメリカの北西のこの終探檢をなせる一理由は、千五百九十二年頃ジュアン・デ・

Mackenzie
Juan de Fuca

アメリカ北部の探檢

Varenne de la Varanderyela
Hearne
Coppermine

Joseph
Rupert

合衆國の膨脹

Lewis
Clarke

Pike
Red
Monroe

フーカーといふイスパニアの航海者の話せし、地理學的神怪によるものなり。バンクーバー島まで海岸を傳ひて來り、その南方の一港に入り、北方に陸地を見ざりければ、歸り報じて曰く、大洋はアメリカのこの部分以北を覆へりと、茲に多くの地理學者はハドソン灣及その付近まで航過し得べしと信じたり。即ち氷の障碍を受けざる程の低緯度にて北西通路を發見せんとの希望を激勵したるは、實にこの報告にてありしなり。

さて合衆國がミシシッピー河の西方土地の所有主となるや、直にその探査を始めたり。千八百四年及千八百七年の間にレウィス及クラークは、ミシシッピー全流域を探りしが、その間にパイクはミシシッピー河とレッド河との源流間に介在せる地方を調査したり。吾人は已にペーリング氏はロシアのために調査したるアラスカをその領土となしたるをいへり。そのカリホルニア海岸方面に南下を避くる爲に大統領モンローは、アメリカの殖民は自今合衆國内に許さずとの敎書を發せり。この年ロ

アメリカ分割の完成

Sacramento
Oregon

約説

シアは合衆國とその境界を、北緯五十四度四十分に協定したり。合衆國はその後千八百四十八年にメキシコと戰ひて、カリホルニア及その附近を得たりしが、これはサクラメント谷に金の發見せられたる少し前なりしなり。カリホルニアとアラスカとの中間地は、英米共同所有となしオレゴン地方と名付けたり。而してレウィス及クラークはコロンビア河を探りけるが、それより以前に、バンクーバー氏は同名の島を調査せり、かくて一時合衆國民はロシアとの境なる五十四度四十分まで自國領となさんとし、常に叫びて曰く、「五十四度四十分か然らざれば戰鬪」と千八百四十六年にこの地方は北緯四十九度を限界とすることになれり。この日を以てアメリカ分割は完成せりといふべし。然もなほ知らるべくして殘れる地方は氷鎖せる北方海岸なり。これにも幾多雄偉の冒險は行はれたり。そは後章に述ぶる所あるべし。

之を要するに、アメリカの地理學的發見史は大要征服勝利の歷史なり。こゝに吾人は海岸にても内地にても天然が和順なるか、その土地が

容易に運搬せらるべき鑛物か植物の富源を有するならば、商業或は殖民につとめらるべきを知れり。而して海岸は地理上早く知らるれども、海岸地方と商業上無關係なる內地は、永く不知の間に漂ふものなり。現今とてもアマゾン河の南方谿谷は未だ知られざる如し。又十九世紀初期まではミシシッピー河とロッキー山脈との間の大廣漠地も知られざりしが如し。千八百三年にナポレオンのために合衆國に讓與せられて後全く知らるゝに至りしは是合衆國膨脹の自然結果とも謂つべし。又この膨脹は蒸氣力の利用起りて、交通機關の發達を促し、その方法の改良されたること與りて力あり。然もロッキー山脈の東方地方は、今日とてもアフリカのスーダンやソマーリランド位しか歐洲人には知られざるなり。

吾人はなほ他の二大陸(オウストラリア及アフリカ)に關する地理的歷史を踏査せさるべからず。この二洲には探檢者は、殖民者或は征服者よりも先んじたり。吾人は茲に政治史を論ずることを止めて、たゞ地理學的發見の進路にのみ從ひて觀察せんとす。

第十章　アウストラリア及南洋、タスマンとクック

初めは和蘭の所有

初めは和蘭の所有＝イスパニアの遠征隊＝蘭人の命名＝タスマンの航海＝ダムピールの航海＝當時濠洲に關する知識の程度＝殘されたる地理學上の疑問＝ジェームス・クックの航海＝その小傳＝クック、タヒチ島に航す＝クック航海の動機＝バトレー氏六分儀と、ハリソン氏時辰儀＝クックの第一航海＝第二航海に關する訓令の要領＝第三航海に關する訓令の要領＝佛人の回航＝舊世界の橫斷者＝アウストラリアの殖民＝濠洲沿岸の調査＝內地の探檢

アウストラリアの西海岸を見ば和蘭の名辭の多きに驚かざるものなからん。フーグ島、ヂーメン灣、ホートマン岩、デ・ウィットランド、ニュート群島、ヂルク・ハルトグ島及リーウィン岬の如きその一例なり。又極北にはカ

Hoog Island
Diemenis Bay
Houtman; Abrolhos
De Witland
Archipetago of Nuyts

Dirk Hartogsland
Cape Leeuwin,
Gust of Carpentaria,
Van Diemensland

Louis Lopez de Villalobos
I sland of Polgnesia

ーペンタリア灣、極南地方には、バン・デーメンスランド島あり。これらに依れば第十九世紀の半頃まで今のアウストラリアは新和蘭と稱されてありしと聞くも驚かざるべし。若し和蘭がアウストラリア中、一層肥沃なる東方海岸を所有せしならば、實に今日まで新和蘭の名は持續せられたるなるべけれども、この西部アウストリヤ程、望なく不愛相なる長き海岸は又と世になかるべし。されば世人は、たとひ和蘭人が早く之が探檢をなせりとも、敢て之を所有せんとなさゞりし所以を解するなるべし。

アウストラリアの長大なる海岸線は、和蘭人によりて多く探檢せられたりと雖も、しかも和蘭人はその發見者にてはあらざりき。千五百四十二年の頃、イスパニアの遠征隊はルイ・ロペッヅ・デ・ビラルロボスの指揮の下にマゼルランの發見の後繼者たらしめんとて、イスパニア勢力圏内の太平洋中に派遣せられたり。彼はポリネシア群島の多數を發見し、フィリッピン島を掠取せんと企てしが、新イスパニア(今のメキシコ)に歸

New Guinea

イスパニアの遠征隊

Pedro de Quiros
New Hebrides
Australia del Espiritus Santo

Luys Naz de Torres トルレス

航の止むを得ざるに至れり。遠征隊の一はニューギネア島に沿ひて航海し、これこそ、トレミーが印度洋の南に在りと想像したる、大未知南方陸地の一部にして、テルラ・デル・フエゴと、幾分の連絡あるものと考へたり。好奇心は起れり。遂に千六百六年ペドロ・デ・キロスが三隻を率ゐて南洋に派遣せられたり。彼はニュー・ヘブリデス島を發見し、之を南大陸の一部なりと信じ、アウストラリア・デル・エスピリッ・サントと命じて急に歸國し、自らこの新所有地の太守職を得んとせり。彼より別れたる一船はルイス・ナッ・デ・トルレスを頭として、なほも南西に走り、新アウストラリアは大陸にあらずして、たゞ一の島なる事を知れり。トルレスはなほ遙に進みニューギネアに到り、その南海岸をたどりしに、南方に陸あるを認めて今日彼の名を存する海峽を過ぎたり。これ恐くは歐洲人にてアウストラリア大陸を見たる第一ならん。同年即千六百六年に和蘭の快走船ドイフケン號は、殆ど一千哩を走りてニューギネアの南及西海岸に沿ひキールウィール岬(再轉の意)に達したりといふ。これ恐くはアウストラリ

Duyfken
Cape Keerweer
Endraaght
Jan Edels
Abel Janssen Tasman
タスマンの航海

アの北西岸なりしならん。第十七世紀初期の三十年間和蘭人はポルトガル人がアフリカの西海岸にその探檢の紀念として、島嶼、港灣及岬角にその名を留めたる如くに、多くの仕事をアウストラリアの西海岸になしたり。エンドラート號におけるヂルク・ハルトグはその船名を負はせたる島及その名を命じたる岬、碇泊所を發見せり。これ千六百十六年の事なり。ジャン・エデルスは千六百十九年に西方海岸にその名を留めたり。その後三年にライオネス或はリーウィン號は大陸の最西地點にその名をとゞめ、又五年後の千六百二十七年デ・ニートはアウストリア南海岸を一周せり。同年カーペンターといふ和蘭總督は、今日カーペンター灣として知らるゝ大鋸齒の如き窪處にその名を負はしめたり。

なほ一層切要なる發見は、千六百四十二年に南方邦土の眞の廣袤を調査せんとアベル・ジャンセン・タスマンの下にバタビアより出立したる遠征隊によりて成されたり。リーウィン及デニートの航海後新陸地の南方海岸は、西に向はず却て東に向へる事をしりたり。若しトレミーの意見が正しかりとせばそは偶然たりしなり。タスマンの問題は南部大陸は南アメリカの南に横はりて之と連絡ありや否やを發見するにありき。タスマンはまづモーリチアスを出帆し、後南東に針路を取り、リーウィン岬を遙か南に過ぎ、遂に南緯四十三度三十分經度百六十三度五十分に達せり。これを彼はバタビア總督の名を取りてバン・ヂーメン國と呼び、これがデ・ニートの已に發見したる地方と連絡せるを確信し、なほ遙か東方に走りてタスマンは再び海洋に出で、こゝに新發見地は南極の周圍にある大未知大陸と連絡せざる事を證明したり。

彼はその後間もなく一地に到達してそをネザーランドの總督のために、スターテン・ランドと命名したりしが、これ疑もなくニュージーランドの一部なりしなり。なほ彼は北東方に走りて太平洋の諸島を發見して後、ニューギネアに寄り、バタビアに歸着したり。タスマンの發見は、地理的知識に非常の進歩を與へたり。少くとも南方不知大陸の直徑を狹小ならしめたり。一時政治上英國がウィリアム三世の時和蘭と結合せしが、

William III
William Dampier
Staaten Land
New Zeeland
Mauritius
Van Diemen

ダムピールの航海

その間ウィリアム・ダムピールは一層遙に發見をなさんとて新和蘭に向ひ出立したりしが、ヂルク・ハルトグ灣よりニューギネアまで和蘭人の探檢したる跡を再査したるに過ぎざりしも、歐人にて初めてカンガルー(袋鼠)の習性に注意したるものなりき、この外彼は地理學的知識に何の貢献もなかりき。

以上の如く和蘭人の航海のためにアジアの南東方にあたる大陸地の存在は、到處歐洲文明人の所有に歸したり。千六百九十九年にキャプテンレミュール・ガリバー(スウィフトの有名なる小說中の人物)はバン・ヂーメンスランドより北西に航して小人國に達せり。小人國はアウストラリアの大灣の隣に位置されたり。科學的知識とスウィフトの荒誕なる小說とのこの奇なる混合は、確に當時アウストラリアに就きての地理學上の知識の程度をあらはせり。

當時濠洲に關する知識の程度

Captain Lemuel Gulliver

d'Anvill

イスパニア人と和蘭人とのこれらの發見は、吾人疑問の主題目なる香料島の大探求の直接結果なりといふべし。されば發見には多くマレイ群島より船を出したりしが、第十八世紀の初期より一新動機は生じたり。當時殆ど世界の全海岸線は略知られたりき。則ち葡人はアフリカの沿岸航海をなし、西人は南アメリカを、英人は北アメリカ東方大部を探求し、中央アメリカはイスパニアを介して知られたり。太平洋島嶼の多くは、たとひ嚴密に調査せられざる迄も、とにかく知らるゝに至れり。たゞアメリカの北西海岸、アジア北東海岸が殘されたるのみ。而して地理學上疑問として殘れるは、果してトレミーの確信したる南方大陸が存在するか、若しありとせばその徑の如何なるかを知る事なりとす。

殘されたる地理上の疑問

すべてこれら海岸地理學(かくいひ得るとすれば)の諸問題は英人ジェームス・クックによりて解決せられたり。彼はヘンリ太子、マゼルラン及タスマンと共に地球上人類棲息の限界を決したりと謂はるゝ人なり。彼の航海は商業、征服等のためにあらずして、全く科學的の好奇心より起りたるなり。而も地理學よりは全く異れる科學の興味のためなる事も明なり。英の天文學者ハーリ氏は金星經過を試驗する事業を遺言し

James Cook
Halley

ジェームス、クック

クック小傳

て死せり。これは地球より太陽の距離を決するに非常に必要の事にして、その經過は千七百六十九年に起ると豫言せり。而してこの觀測はたゞ南半球にてのみなさるゝものなりければ、クックの遠征の第一航海は實にこの觀測のためなりしなり。

予をしてこの機會を利用してクック過航以前彼の生活の概要を叙せしめよ。彼は千七百二十八年十月二十七日英國ヨークシヤ洲マルトン村一農家に生れ、幼より海を好みたり。十三歳の春一雜貨商に奉公せしが、日夜海上にその身を委ねんと望み、遂に年季の契約を解き、水夫となりてニューカッスル、ロンドン間の石炭運送に從事せしが、その勉勵等輩に超えければ、間もなく自由の身となりて、絶えず各所に航海し、大西洋上に種々の經驗を重ね、航海に必要なる知識を收め、將來偉業をなすの素養を作れり。千七百五十六年英佛間の平和破れ、英國政府大に海員の募集をなす時に方り、彼は廿八歳、直に之に應じて軍艦に乘組み、艦長バルリサー氏の下に敏活の働をなし、爲にマスター(航海師)の證認を受けたり。北米クェベック征討の際敵嚴戒の下にセント・ローレンス海峽の水深測量に從事して成功したり。この役英國の勝利に歸し、司令長官は一隻を北米に留めて歸國せしが、クックはこの守備艦航海師に擧げられ、ハリファクスに冬營することゝなりければ、僅かの餘暇を得て、高等數學天體實測、航程の推算、經緯度の測定等を修めたり。千七百六十二年ニューファウンドランド島回復の役あるや、同地に赴きて、海岸の測量をなし、その水路を明かにし、航海漁業等に無上の便利を與へたり。歸國の上海軍測量官に任ぜられラブラドル海岸の測量をなせり。かくて英國に歸來し大事業をなす機會の到來を待ちしに、輿地探檢の氣焰は再燃し、偶〻金星の太陽面を經過する貴重の現象期に會せり。當時ゼオルジ第三世王の保護を蒙れるローヤル・ソサイテーと稱する學術協會は、こを觀測せしむ

第十圖

ジェームス・クックの肖像

Endeavor
Captain Wallis
Tahiti

クックの出發

る爲、一隻の船に適當の人を乘せて派遣せられたき旨を稟請しけるに、政府は愈〻遠征艦を南太平洋に派遣する事に決し、三百七十噸のエンデヴァー號は指定せられ、クックはその艦長に推薦せられたれば、海軍大臣は彼を海軍大尉に任じ、遠征艦長の榮職に補したり。これ實に千七百六十八年五月廿五日にして、彼の齡幾んど四十歳なりき。折しもキャプテン・ウォーリスは世界一週より歸國して、觀測にはタヒチ島の恰當なる場所なることを紹介したり。

クックは千七百六十八年七月三十日を以て英國デプトフォードより出發し、八月十八日にプリマス浦に投錨し、數日にして海上に進航せり。彼と共にしたる一行中星學者チャールスグリーンは、星學に關する顧問として、又學術協會々長バンクス氏も製圖師二名、書記一名、從者四名を携へて之に伴ひ、大英博物館に在勤して博物、物理に精通の聞ある瑞西人ソンダー博士も共にして總乘員八十四名を數ふ。その他食料一年半分砲二十餘門、彈藥及各種の需要品等十分に積載したり。さて一行は出發

クック航海の動機

Hadley

ハドレーの六分儀

後幾多の辛酸を經て、千七百六十九年六月三日タヒチ島に着し、遠征の主目的なる觀察を十分に遂行したり。而してクックは是より益〻千辛萬苦して世界を週航する事前後三回に及べり。これらの勞苦と、大發見とは順次記述すべしと雖も、聊こゝに挿說をなすを許せ。

クック畢生の事業なる航海の動機に二重の適合ありき。そは十八世紀初期の間になされたる航海用器械の改良せられたる爲なり。ハドレー氏は六分儀を發見せり。これによれば太陽の高度が舊式の十字臺(古代の航海者が使用したる甚だ麁末なる指針器)よりは遙に容易に且つ正確に測り得べし。是れもとより必要なりといへども、科學的地理學に一層切要なるは、正確なる時辰儀に施せる改良なりとす。土地の緯度を發見するは容易にして、古代希臘の地理學史に見ゆる如く一年中時期の異るにつれて日の長さに差ある事即ち是なり。然れども經度を定むるには一層の困難あり。そは古代にてはたゞ推測航法アテ推量にて作せしなり。然るに若し時辰儀が長途の航海中にても、僅に數分か數秒の差

John Harrison

ハリソン氏時辰儀

クックの第一回航

異を來すのみの精密なる度に改良し得たらんには、航海者は之を用ひて地球上到處の地方時と出發點若くは一定地點(勿論さきにそこの時を計り置くなり)との時差を知る事容易にして、從て經度の算出は簡易なり。この必要を認めて英國政府は一年間に極めて僅少の分秒を失ふ如き正確時辰儀の發明を一萬磅の懸賞にて求めたり。この報酬は遂にジョン・ハリソンの手に落ちたり。是より天文學的知識に乏しき船長にても、己の位置せる地點の經度を容易に知り得るに至れり。このハドレーの六分儀とハリソンの時辰儀とは、實にクックが彼の勞作をなすに必要なる器械なりしなり。この二種の使用に堪ふるに至りしこそ二重の適合といひたるなれ。

さてクック氏は千七百六十九年六月三日土曜、主目的の觀測を十分遂行したる後、更に遠く航海をつゞけてタスマン氏のスターテンランドと同一ならんと思はるゝ島に達し、その沿岸を回航して、この島の南方大陸を去ること遠きを知れり。更にこの島は二島よりなり、その間を航

クック海峽

New South Wales
Swan sea

植物灣

ニューサウス・ウエールス、

第一航海の證明

走したる水路にクック海峽と命名したり。千七百七十年三月三十一日にニュージーランドを發し、翌月廿日從來航海者に知られざる西方の他の陸地を經過せり。そこにある一港に入りて、彼は同行の博物學者バンク氏の援助によりて近傍の探索をなし、目に新なる多くの植物を發見しければ、植物灣(Botany Bay)と名付けたり。それより彼は北方に航し東方海岸に連亘せる大珊瑚礁に衝突して、殆ど難破に瀕せり。然もなほその殘片をつくろひて、それに乘りてこの方向の陸地の緣端に達せんと操縱して遂にニューギネアより分離し居ることを發見したり。これ實にトルレス海峽の南點に達したるにて、この大海岸線にニュー・サウス・ウェールスの名を負はしめたり。これスワンシーの海岸に見たると類似し居ればなり。クックの第一回航海は金星經過の觀測の外に、新和蘭もスターテンランドも何れも南太洋大陸に屬せざることを證したり。千七百七十二年に彼はこの南大陸問題を決せんとて第二回の航海を命ぜられたり。出發前彼が海軍上局より受けたる訓令の要領は、マディラ島より喜

クツク第二回航海訓令の要領

望峰に航し、こゝに食料及必須品を搭載してサーカム・ミッション岬探檢のため南方に航すべし。到着の上は該岬角は歐洲列國の最も注視せる假定大陸の一部なりや、將た唯一島の岬角なりやを探討し、又航海貿易に有益なる視察を遂ぐべし。一行の能ふ限り專ら南極に進み、或は東方に或は西方に歩を伸ばすべしと。茲に千七百七十二年七月十三日月曜日を以てレゾリューション(四百六十二噸)、アドベンチューア(三百三十六噸)の兩艦はク氏一行を載せてプリマス港を扳錨したり。指定の如くマディラより喜望峰に趣き、それより迂餘屈曲して南極の周圍に至らんとせり。氷に觸れし時のみ引上げて、達し得る限り南方にその船鼻を衝き進めたり。南方における如何なる方面にも、遂に假想の大陸とおぼしき影だも認めざりければ、彼は大陸は存在せずと斷言せり。而して、その航海の殘務を、嘗てイスパニア人、ホルランド人、イギリス人の觸接したる群島の種々の地點を再見する事に費せり。然も決して正確の測量はなさゞりき。三年の注意せる探求の後にク氏はニュージーランドよりホルン

第二回の出發

南極地方に大陸なしと斷ず、

クツク第三回航海に關する訓令

Resolusion
Descovery

岬に至る太平洋を一貫せる航走をなして、猶且如何なる大陸の存在だも發見せざりしが、この長途航海中百十八人の中僅かに四人の死者を出せしに過ぎざりしは航海術上注意の價値ありとす。

なほ決定されざる海洋地理學(航海地理學)上の一大問題は、英國航海者がハドソン灣を經て東より至らんと屢試みたる北西航路なり。千七百七十六年英王ゼオルジ第三世は新手段に依りてこの問題を解決せよとクックに命じたり。當時海軍本部より、クック氏に交付したる訓令中の要旨は、クックの熟能及善行を認識したるにより、レゾリューション號及デスカバリ號の二艦を以てまづ喜望峰に直航し、それより、タヒチ又はソサイチー諸島に向て進航し、更に北米カリフォルニヤ(當時はニューアルビヨンといふ)の海岸に向ひて直航し、その海岸に至らば薪水及飲食物を得たる後、海岸に沿うて北方に進み、北緯六十五度に達すべし。若し陸地或は氷の爲に遮らるゝにあらざれば尙ほ遠く進航すべし。此緯度に達するまでは途中江河、或は海口を捜索し、その大にしてハドソン或はバッフ

第三航海の出發

大問題の決定

イン灣の方に通ずるならんと思はるべきものを搜索し、その水路の存在の必然を期し得るか、又は存在に庶幾すと思はゝ畢生の盡力にて通行、發見を期すべし。これ本部が汝に命ずる處なりと。若し前二灣に航行の通路なしと見定めたらんには、カムチャツカに於けるセント・ピートル或はセント・ポール灣其他適宜の地に冬期を過ごし、翌年の春北方適宜の處まで進航して、益〻太平洋より大西洋或は北海に達する北東或は北西航路を搜索すべし、といふにありたり。ク氏はこの勇敢なる大計案を實施せんとして、千七百七十六年二月十四日出發したり。ジュアン・ド・フーカの大灣の古傳說がこの海岸に關して幾多の地理學者を迷はしめたり。而もクックは遂にこの目的たる大問題を決したるのみならず、ベーリング海峽を通過し、その兩岸を調査して、アジア、アメリカの兩大陸は僅に三十六哩を離るのみなる事をも決定したる偉効を奏せしが、歸途布哇に寄港し、千七百七十九年二月十四日五十二歲を一期として、そこの蕃民の毒手に殪れたるは惜みても餘りある事ども なり。首長を失ひたる

佛人の回航

François de la Peerouse

Monsieur Lesseps

舊世界の橫斷者

その船は、其後少しの地理學的貢獻なくして英國に歸着せり。

こゝにクックの航海はフランス人の大なる競爭を惹起せり。たとへ當時英佛間に干戈を交へてありけるとも、クックの不朽の名譽に對し、佛國はクックの船舶に逢ふ時は何處にもあれ敬意を表せよと、その國の艦隊に命令を下したりき。千七百八十三年にフランソア・デ・ラ・ペロアスの指揮の下にクックの事業完成の遠征軍は派遣せられたり。彼はアジアの北東岸を探檢し、樺太島を檢査し、又屢〻その名を呼ばるゝ海峽(宗谷海峽のことを)を經過せり。カムチャツカにては、露語通譯として同伴したるモンセーユ・レセップを上陸せしめ、その報告と測量の結果とを本國に送らしめたり。レセップは自らカムチャツカを精査して陸路パリに歸れり。是れ歐羅巴人中太平洋より大西洋まで舊世界を全く橫過したる第一者なりき。その後ラ・ピロカスはクックに倣ひてニュー・サウス・ウェールスの海岸を探査せんとて進行せしに、その海岸の中央なる一良港に入れる時、英船が千七百八十七年に最初のアウストラリア殖民を定めんと力めつゝある

Vanikoro

濠洲殖民

Van Diemens Land
Bass
Jackson
Flinders

バス海峡

Encounter Bay

を見て驚愕せり。故に彼は方向をかへて新和蘭の海岸を見分する爲に行けり。而しながらこの遠征に關しては千八百二十六年まで杳としてその消息を聞く能はざりしが、終にその年フィージー附近の一島なるバニコロにて難船したる事が發見せられたり。

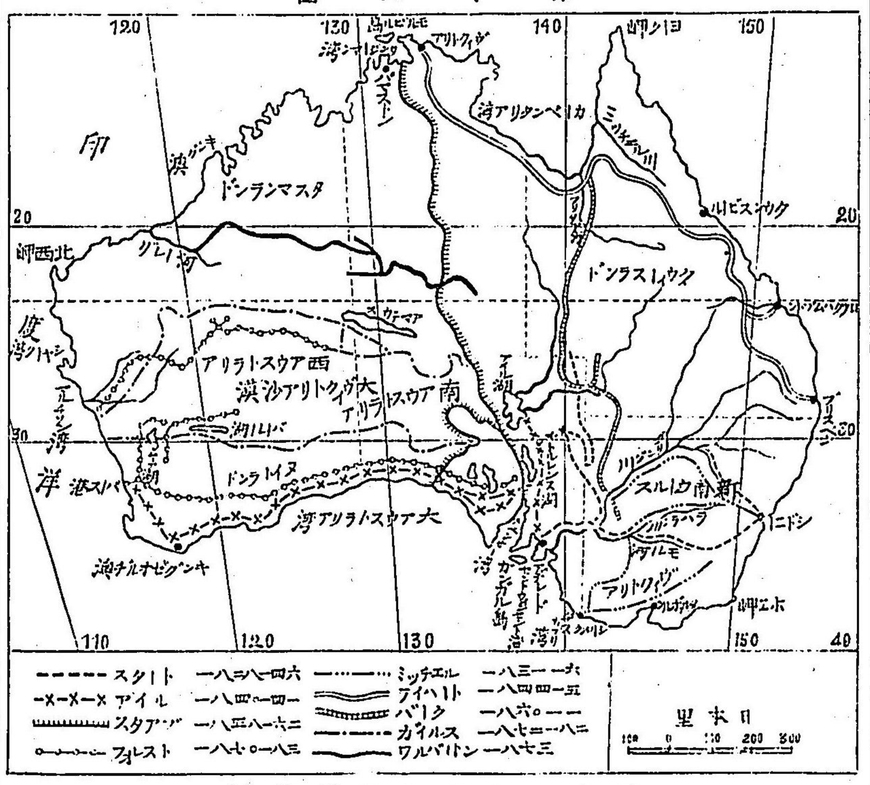
アウストラリアの東岸をクックが探檢するや、直に犯罪者の一團はキャピテン・フィリップに率ゐられて、植物灣に送られて殖民の魁をなせり。是より今日アウストラリアとして知らるゝ大面積の海岸線及內地の正確なる探檢が漸次に始まりたり。クックの第二回遠征に從へる船舶の一はバン・デーメンスランドの略測をなして本大陸に連續せりと報せしが、千七百九十七年に軍醫バス氏は六名の水夫と共に、捕鯨船に乘じジクャソン港より南下し、その最南點とバン・デーメンスランドとの間には、一公海の存在を認めてバス海峽と稱したり。彼の同伴者フリンダースは千七百九十九年東方リーウィン岬より南方海岸に沿うて航せしに、エンカウンター灣にて偶然佛船に會せり。これこの灣名の生せし所以な

濠洲沿岸の調査

Captain King

第十章　アウストラリア及南洋、タスマンとクック　一七五

第十圖　六



アウストラリア探檢圖

り。猶進みてフィリップ港を發見したり。而してアウストラリア沿岸の探檢は千八百十七年より千八百廿二年までの間に四次の航海をなして、各河口を調査したるキャプテン・キングを經て殆ど完成に

内地の探検

Blue Mountains
Philip Wentworth
Evans
Lachlan

Macquarie
Bathurst Plain
Captain Sturt
Darling

Murry
Laich Hardt
Burke
Willr

John m
Dowall

近づきたりと謂ふべし。

アウストラリアの沿岸は略〻知られたり。今や内地の探検行はれざるべからず。東海岸には大なる池溝のために蜂窩の如くなれる青峯山脈の横はるありて上陸探検を困難ならしめしかども、千八百十三年ファリッヅ・ウェントウォルスはこの山脈を横斷して遂にその西方に肥沃なる高地を見出し、翌年エバンスはラクラン及マッククァリ河を發見し、バサースト平原まで進めり。千八百二十八年より千八百二十九年にかけてキャプテン・スタートはダーリング及マーレー二大河の進路を踏査して、内地に關する知識を増したり。千八百四十八年には獨逸の探検者ライヒ、ハルト氏は内地を北方に進まんとして殺されしが、千八百六十年にはバーク及ウィルスの二人は東海岸にそひて、南より北に經過したり。然して千八百五十八年より千八百六十二年までの四個年間にジョン・ム・ドーウェルは一層の困難を犯して、大陸の中央を南より北に横斷せり。これ其後間もなく架設せられたる電信線路踏査の爲なりしなり。是までに殖民地は東濠洲の海岸各地に起りてたゞ探検未濟の部は、西方沙漠地方のみとなれり。こゝに千八百六十八年より千八百七十四年までの間にジョン・フォレストの二回の旅行は西方濠洲より中央電信線路まで至れり。また千八百七十二年より千八百七十六年までの間にエルネスト・ガイルスは北方に向ひて同じ功績をなせり。而してこの二道路は、最近千八百九十七年にダニエル・カーネギーが、南方のクールガルディー金鑛より北方のキムバレーの金山まで旅行したるために連絡せられたり。すべて是等の探検はアウストラリアの内地に關する吾人の知識に貢献する處多かりしかども、又その内地のあまり價値あるものにあらずとの感をも確かにしたり。

Ernest Giles
Daniel Carnegie
Coolgardie
Kimberley

Wills
JohnM'
John

第十一章　アフリカ洲の探検と分割、パーク、リヴィングストン、及スタンレー

第十五世紀末のアフリカ沿岸の狀態＝第十六、七世紀頃のニ

ル河源＝內地の探檢＝「ニル河本源の發見」てふ語＝ブルースのニル河源探査(青ニル河源)＝アフリカ協會＝マンゴ・パークの探檢(チムブクツー)＝アダムスの話＝バース氏＝探檢の第二期＝リヴィングストン＝バートン及スペーク＝ベーカ氏＝イスメル・パシアの政治的行動＝スタンレーの小傳＝スタンレーの探檢＝分割の議＝コンゴーの區分＝英獨の協商＝英國東アフリカ協會＝イタリヤの分野＝西部アフリカ＝北及東アフリカ＝他の旅行者＝南アフリカ(セシル・ローズ)＝約說

第十五世紀末のアフリカ沿岸の狀況說

西紀第十五世紀間にポルトガル人は印度に至る通路を求めんとてアフリカの海岸を航せし事は、既に之を述べたり。該世紀の末期に方り航海者ボルチュラノの齎せるアフリカの東西兩岸に關する談話は、粗雜なりしかども、人心に影響を及ぼせることは大なりき。實に彼等は海岸を探檢したるのみならず、その要處に殖民を試みたり。ギニー海岸に於けるアミナ、コンゴー河畔に於けるロアンド、西海岸のベングエラ等は

Amina
Loando
Benguela

彼等が金、象牙殊に歐人の使用に供するためアフリカの主產物の一たる奴隸を輸出するためのステーションとして建設したるなりき。東海岸にては、モザンビックの港ソファラを建設し、又ザンジバルには三個以上の港灣を有せり。而して海岸殖民の外折々內地の探檢を試みたるが如し。吾人が第十六、十七世紀頃の地圖に於てニル河の進路につきて著しき知識を認め得るは、少くとも彼等の力の預る處なるべし。その圖を繙きて、吾人はニル河源に三湖を認むべし。即ち今日所謂ヴィクトリア、アルベルト・ヌイアンザ及タンガヌイカなり。又月山が著しく畫かるゝを見る。是等は他日スタンレーが再び發見したるものなりとす。地圖に掲載しあるこれ等內地の狀態は、果して葡人が實地に得たる知識により記入したるものなりや、はた是等山川湖沼に關する傳說のかねてよりあるを聞きて記入したりやは決定するに難し。これトンミーの地圖に準據したる地圖は、その他のものも同樣にして、トレミーの地圖の記入は、明にアラビヤ地理學者の傳說する處のものにて、實地探檢の結果にあらざる

第十六、七世紀頃のニル河源

Delisle
D'Anville

Victoria
Albert Nyanza
Tanganyika

Mozambique
Zanzibar

内地の探檢
Niger
Congo
Bruce
Grant
Mungo Park
Livingstone
Stanley
Herodotus

こと明確なればなり。されば佛國の二大製圖家デリスレ及ダンヴィールは、これら山岳湖沼は瞭然たる證明あるにあらずとして、彼等の地圖には削りたりといへども、今日より之を見れば、十七世紀に於けるアフリカ內地に關する知識は、十九世紀初期に於けるよりも少くともニル河の本源に付きては、大なるものありしやに見ゆるは奇といふべし。

アフリカ內地の探檢はニル河源流の探檢に始まり、ニゼル、ザムベシ、及コンゴー三河の流域探査を以て終れりといふべし。是等四大河の流域が何れも英國性の人によりて決定せられたるは實に一奇なり、即ちブルースとグラントとの名はニル河と結合し、マンゴ・パークはニゼル河と、リヴングストンはザムベジ河と、スタンレーの名はコンゴー河と結合せらるゝなり。さればコンゴー河の場合を除く外、他の三所何れも初めて英國健兒が文明に接着せしめたるを見れば、これら地方が現に英國の支配下に在るを怪まざるべし。

歷史の父と稱せらるゝヘロドトスは古代の傳說なりとて報じて曰く、ニル河は西流してニゼル河となると、然れどもそれ以前なほニゼル河は多少東に流れて、恰もチグリス、ユーフラテスの如く何處かにて同じ源に結着すべしとの印象ありき。こは少くとも聖書に於ける樂園の話の暗示と見ゆ。そはとまれニル河の實際の進路は、大なる不確實にして、

一ニル河本源の發見」なる語

「ニル河本源の發見」なる語は實に數世紀間不可能事件の遂行をなすといふ常套語なりき。ジェームス・ブルースはスコットランドの紳士なりしが、千七百六十八年この不審を解決せんと公示せり。この決心は早くも彼の青年時代に起りたるにて、その頑固不撓の性質は遂にそを實行せしめたりしなり。彼は幾分かアラビヤの事情を解し、アルジールの領事としてアフリカの風習を知れりき。彼はファーサントまでニル河を溯り、それより砂漠を橫過して紅海に出で、ジェッタに到り、更に船路をマソワに取り、アビシニアに入りてニル河の源流の探査を初めたり。彼は故都アキザムト廢墟を訪れ、その附近に於て遭遇したる一事あり。そは牝牛の臀肉の一對は生ながら拔取られ、その傷口は縫はれて然も驅使せらるる

ブルースのニル河源探査

Argeria
Farsunt
Jedda
Massowan
Axum

Payz

Gambia パーク　アフリカ協會

ゝの事なり。かゝる例は彼の旅行記に多く見えたり。そこより彼は青ニル河を溯りて三泉に達せり。これぞ古圖に見ゆる三湖にして、正しくニル河本源と思惟せり。茲に彼はニル河を下りて千七百七十三年カイロ府に到達したり。彼の發見したるはこれ只青ニル河の本源にして、前きに葡人ペーヅの到れる事ありし地なりき。然も彼の經驗したる興味ある冒險及彼の報告したる面白き記事は、痛く一般の注意を惹起したり。實に千七百六十八年てふ年はジェームス・クックとジェームス・ブルースとの兩ジェームスが、地理學上發見の目的にて旅行をなし、科學的探檢と稱せらるべき時代を開始したる記憶に値する事なりけり。その後十年にしてアフリカ協會と稱する一協會はアフリカ未知の境を探檢すべき目的にて組織せられたり。これぞ地理學的會合の生ずる第一なる。千七百九十五年マゴ・パークは該協會より西方海岸に派遣せられたれば、彼はガムビアを發し、途中ムーア人のために捕はれ幾多の艱苦を嘗め、漸くニゼル河畔に達し、その中流に沿ひて進みけるに、誤りてチムブク

Timbuctoo
Boussa
Adams

チムブクツー

Mogador

Senegambia
Sahara
Major Denham
Clapperton

ツーに達せりき。次で千八百五年第二回の企圖は、その河口はコンゴー河と同一物なる事を證せんが爲めにて、ニゼル河を航下せしも、不幸にしてブーサにて死し、ニゼルの殘餘部を探檢するの功を果さゞりき。

マンゴ・パークが第一回旅行より歸りて奇怪の吹聽をなしたるより、一般の注意はチムブクツーに集注したり。又千八百十一年英國の水夫アダムスはこゝに至れり。これ彼はさきにムーアの海岸にて難船し、ムーア人に捕はれ奴隷として、チムブクツーに送られたるが、遂にモガドルの英領事の爲に救はれたり。彼のなせる談話は甚しく西アフリカ探檢の興味を恢復したり。ニゼル流域の秘密を察知せんとの計圖は、セネガムビアとコンゴーとの兩方面より試られたれども共に失敗に終りき。茲にアダムスの經驗によりて、サハラを横斷せる隊商の行路により て、ニゼルに達せんとの新企圖は起れり。千八百廿二年デンハム大佐及クラッパートン中尉はフェザンの首府ムルヅークを發し、チャッド湖を經てボルヌに至れり。クラッパートンはその後再びベーニンよりニゼルに至

Fezzan
Murzouk
Chad
Bornu

れり。これら二人の旅行者は、共に吾人の西アフリカに關する知識に約二千哩の行程を增加したり。千八百二十六年にはレイング大佐チムブクツーに至りて虐殺せられ、千八百二十七年にはレネ・ケーリアといふ若き佛人が到れり。彼の談話は、また一方ならぬ興味を喚起せり。實に詩聖テニスンはアフリカのこの不可思議なる都府につきての題目の懸賞詩に應募して、かの詩的生活の端緒を發せしなりき。

Benin
Laing
L'ené Cailia

千八百五十年に至り、デンハム・クラッパートンの行爲は、バース氏によりて繼がれたり。氏は五年間を費してチャッド湖西部全域を探査し、チムブクツーを見舞ひ、且つクラッパートンとケーリア氏との道路を聯絡せしめたり。この西方の探檢は、その後千八百六十九年より七十四年にわたる全五年間チャッド湖の東方ダルフル、ワダイ地方を旅行したるナハチガールの功に依りて成就せられたり。近年に至りては政治的關係より許多の遠征を企つるを見る。殊にフランス人はその所有地なるアルジール、チュニスを金海岸、セネガル地方に連續せしめんが爲め遠征を試

Tennyson
バース
Nachtigall
Darfur
Wadai

Kilimane
Ngami
Zambesi
Kuonza
Loanda
David Livingstone
Blantyre
Bechuana

みたりき。

アフリカ探檢の第二期は、近世發見地の全體に、實際その足跡を印したる人と相終始す。その人とは即ち土人と掛引きの才ありて、平靜なる執拗、及不撓の勇氣を以て中央アフリカの全く未知の境域を開放するに成功したる、デーヴィド・リヴィングストンその人なり。氏は千八百十三年英國スコットランドのグラスゴー附近ブランタイアに生れ、アフリカ內地の探檢と、傳道とを以て名高し。初め千八百四十年より四十九年に至るまでは、南アフリカのベチュアナに傳道せしが、それより內地を探査せり。今その主なるものを表記すれば、

第十七圖

リヴィングストンの肖像

一八四九、ヌアミ湖發見、
一八五一―五四、ザムベシ及クアンザ河域の探檢、ロアンダよりキ

リマネまで横斷、

一八五五、ヴィクトリア瀧發見、

一八五八、九、シルワ及ヌァツサ兩湖發見

一八六六、ロヴマ谿發見、

一八六七、チアムベシ發見、

一八六七、八、タンガヌィカ、マエロ、バングウェオロの諸湖探檢

一八六九、ウジジにあり、

一八七一、ウジジにてスタンレーに救はる、

一八七二、ウンヤンエムベにてスタンレーに分る、バングウェオロ湖にかへる。

一八七三、赤痢をやみてチタムボに死す、

Chambezi

Ujiji
Unyanyembe
Bangweolo
Chitambo

Burton
Speke
バートンスペーク

この間バートン、スペークの兩探檢家は久しく噂にのみ聞き居たる湖水を發見せんとて、ザムジバルを出で、翌年タンガヌィカ湖に達せり。歸途スペークはバートンとわかれて、獨りなほ北方に進み他の一湖を見たり。そは後にヴィクトリア・ヌィヤンザと稱するものなり。スペークは千八百六十年に他の友グラントと共にヴィクトリア・ヌィヤンザに立歸りてその流域を探れり。彼等はこの湖より北方に流出する大河を見出し、それに沿ひてゴンドコロまで至りしに、茲に白ニル河源調査のために旅行せるベーカー氏に逢へり。依りて彼等は白ニル河源はヴィクトリア・ヌィヤンザなりと證せり。更にベーカー氏はなほ査察を續行して、遂にニルの他の河源はヴィクトリア湖の西に當れるアルベルト・ヌィヤンザといふ一小湖なる事をも證せり。かくしてこれら三人の英人は久しく結びて解けざりし問題たるニル河本源を決定したりしなり。

Gondokoro

Baker

英人のこの發見に次でエジプトの副王イスメール・パシアは一の主要なる政治的行動を起せり。そはパシアはニル河の全流域は彼の領土に屬せりとして、全河長に沿ひて宿驛の設置をなせる事是なり。こは地理學的目的のためにニル河の流域につきて十分の報告を得易からしめたるなり。而してサミュエル・ベーカー及コロネル・ゴルドンの下に文明

Ismail Pasha
イスメール・パシア

スタンレー小傳

H, M, Stanley　Denbigh

は一時河源より河口まで傳へられたり。

リヴィングストン氏の發見の功績が、世人に多大の興味を惹起せしめける折柄、氏の消息久しく絶えければ、氏を搜索する爲にニューヨーク・ヘラルドの新聞社主はスタンレーをアフリカに派遣する事になせり。時に千八百六十九年なり。スタンレーは千八百四十一年英國ウェールスのデンバイ町に生れしが、家貧にして他に寄食し、艱苦の中に生長して早くより自活せしが、幼より地理學と數學とにて等輩を壓しけるが、或時外國の旅行及冒險談等の書を讀みて、心窃に大探險旅行者たらんと期し、徒らに故國に留りて知人の厄介になり居るよりは、國外に出でゝ自ら職業を求めんと、船丁となりてアメリカに渡り、ニュー・オリーンスに至り、某店頭の廣告を見て、直に番頭

第十八圖

スタンレーの肖像

Sherman
Napier

の申込をなしゝに幸に採用せられて後、痛く店主の氣に叶ひ、遂に主人ヘンリ・モルトレーキ・スタンレーの養嗣子となれり。然も彼の幸榮は夢の間なりき。養父スタンレーは遺書なくて急に死去したりければ、遺産は親戚間に分割せられ、彼は再び金なく、友なく、この世に流浪の身となれり。かくて千八百六十年アメリカ南北戰爭起るや、南軍に與してジョンストン將軍の下に屬し、各地に轉戰せしに遂に捕はれけるが、窃に牢獄を脱して故國に歸り、更にニューヨークに來りて百難の末、遂にニューヨーク・ヘラルドの寄書家となれり。戰終りて後、地中海を經て小アジア附近に巡洋を試みて寄禍を買ひし事もありけり。千八百六十七年アメリカに歸り軍事通信員として、或はヂアンに對するシャーマン將軍の遠征軍に從ひ、或はナビーア公がアビシニアのセオドル王進擊の際、英軍に從軍せる等にて、その記事の迅速と正確とは實に通信員の王とまで尊はるゝに至れり。この成功は遂にヘラルド社主をしてリヴィングストン搜索の大任を彼に託するに至らしめたり。

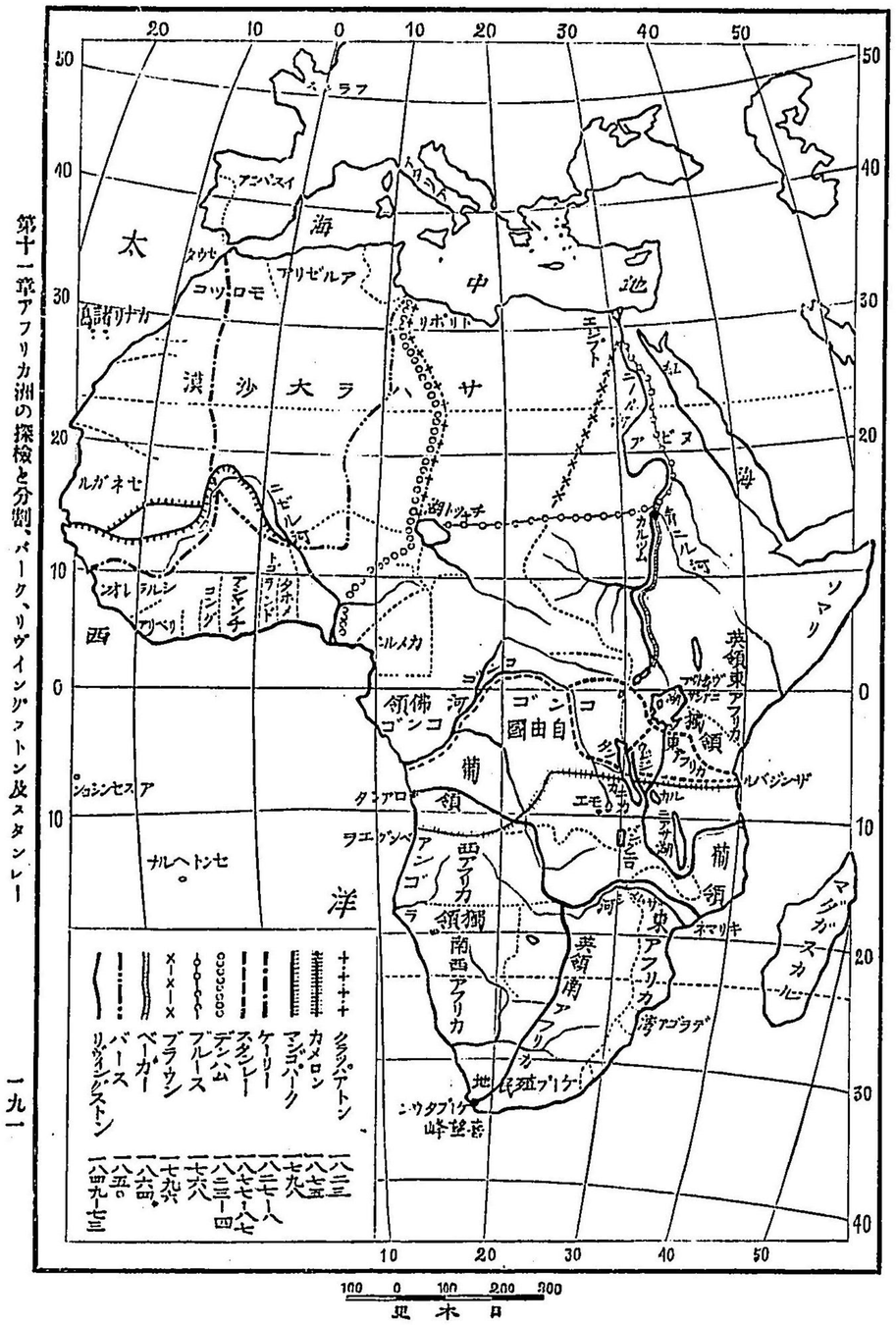
スタンレーの探檢

Emin Pasha　　Lualaba

スタンレーは千八百七十一年三月ザンジバルを出立せり。その年十一月に一白皙人は暗黑大陸の中心ウジジに來れりき。茲にスタンレーは「余は思ふ、君はリヴィングストン氏ならずや」との史的尋問にて彼に挨拶したりき。この後二年にしてリ氏は地理學上及熱心なる宣教上の殉教者として死せり。嗚呼彼は實に死せり。然れども彼の事業はスタンレーによりて繼承せられたり。ス氏は千八百七十四年再びリ氏の事業を繼續するために派遣せられたり。氏の探檢の主なる地方は、

一八七五―七七、ヴィクトリア・ヌィアンザ湖周航、アルベルト・ヌィアンザ及タンガニカ湖探險、アルベルト・エドワルド・ヌィアンザ湖發見、コンゴー國ルアラバ川を下る。

こゝにルアラバとヌィアンザとは、全く別物にして、共にコンゴー大河の支流なることを證せり。

一八七九、コンゴー地方を開拓して、コンゴー自由國を立てんが爲、萬國アフリカ協會の使命を受く。

第十九圖　アフリカの探檢及分割圖